平成三〇年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史 No.3

-文化講座資料集・記録集-

2019(平成31)年３月
宮古島市教育委員会

平成三〇年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史 No.3

-文化講座資料集・記録集-

2019(平成31)年３月
宮古島市教育委員会

例　言

1．本書は、平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業（国庫補助）で実施した文化講座及びシンポジウムのレジュメ、講座風景写真、ポスター、新聞掲載記事などの資料を取りまとめた資料集・記録集である。

2．本事業は、宮古島市教育委員会生涯学習振興課（文化財係）が主催した。

3．本事業における文化講座、シンポジウムの概要は以下のとおりである。

第 1 回　戦跡巡り ～城辺地区の戦争遺跡～
日　時：平成 30（2018）年 6 月 9 日（土）　9：30 ～ 12：00
場　所：宮古島市城辺地内
案　内：久貝弥嗣、森谷大介、山口直美 (宮古島市教育委員会)
参加者：20 人 (定員)

第 2 回　文化講座「国仲元島遺跡・上地村番所前遺跡の発掘調査概要」
日　時：平成 30（2018）年 10 月 28 日（日）　14：00 ～ 16：00
場　所：宮古島市総合博物館・研修室
講　師：久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
参加者：18 人
関連行事として、「発掘調査速報展 2016 ～ 2018 年度」を宮古島市総合博物館・特別展示室にて、10 月 26 日から 11 月 11 日の会期で開催。

第 3 回　文化講座「イノシシのいた宮古島の遺跡 – 発掘調査からみた宮古島のくらしとイノシシ –」
日　時：平成 31（2019）年 2 月 9 日（土）　14：00 ～ 16：00
場　所：宮古島市総合博物館・研修室
講　師：菅原広史（浦添市教育委員会）
参加者：22 人

第 4 回　文化講座「宮古諸島における 11 ～ 14 世紀の集落」
日　時：平成 31（2019）年 3 月 3 日（日）　10：00 ～ 12：00
場　所：働く女性の家ゆいみなぁ
講　師：久貝弥嗣（宮古島市教育員会）
参加者：14 人

第 5 回　シンポジウム「宮古諸島における 15 ～ 17 世紀の集落 – 残された「モノ」から読み解く –」
日　時：平成 31（2019）年 3 月 9 日（土）　13：00 ～ 17：00
場　所：宮古島市中央公民館・研修室
共　催：沖縄県立博物館・美術館
参加者：51 人
報　告：「宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡」 久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」石井龍太 (城西大学准教授)
「琉球列島に見る 15 ～ 17 世紀にかけての集落遺跡の変容」 山本正昭（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）
「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」 山元貴継（中部大学教授）
総合討論・司会：鎌田誠史（武庫川女子大学教授）
関連行事として、同テーマの展示を宮古島市総合博物館・特別展示室にて平成 31 年 2 月 26 日～ 3 月 17 日の会期で開催。

4．本書に掲載した資料及び、音声データ等については宮古島市文化財資料室で保管・管理している。

5．新聞記事の掲載については、宮古毎日新聞社、宮古新報社より掲載許可を得た。

平成三〇年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

目　次

例言

第１回　戦跡巡り～城辺地区の戦争遺　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

バスによる巡検ポイント

①下里添の野戦重火器秘匿壕群

②アーリヤマの戦争遺跡群

③東保茶根の戦争遺跡群

④福里公園の忠魂碑

第２回　発掘調査速報展 2016 年度～ 2018 年度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

「国仲元島遺跡・上地村番所前遺跡の発掘調査の概要」

第３回　イノシシのいた宮古島の歴史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

菅原広史 (浦添市教育委員会)

「イノシシのいた宮古島の遺跡～発掘資料から見た宮古島の暮らしとイノシシ～」

第４回　宮古島における 12 世紀から 14 世紀の集落　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

「宮古島における 12 世紀から 14 世紀の集落」

第５回　宮古島における 15 世紀から 17 世紀の集落－残された「モノ」から読み解く　・・・・・・・・69

久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

「宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

石井龍太（城西大学準教授）

「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）

「琉球列島に見る 15 世紀～ 17 世紀にかけての集落遺跡の変容」・・・・・・・・・・・・・・・・・83

山元貴継（中部大学教授）

「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

総合討論　司会：鎌田誠史（武庫川女子大教授）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103

城辺地区の戦争遺跡

城辺庁舎　＜９時30分　出発＞

１．下里添の野戦重火器秘匿壕群

２．アーリヤマの戦争遺跡群

３．東保茶根の戦争遺跡群

４．福里公園の忠魂碑

平成30(2018)年６月９日(土)
宮古島市教育委員会

れきしりゃくねんぴょう 歴史略年表

※太字部分は宮古島における大きなできごと

出典：『宮古の戦争と平和を歩く』宮古郷土史研究会 1995 年

西暦	沖縄・宮古島の動き		日本と世界の動き	
1938 年			4 月	国家総動員法公布
1940 年			9 月	日独伊三国軍事同盟成立
1941 年	4 月	尋常高等小学校は国民学校に名称変更（初等科・高等科）	12 月	対米英宣戦布告（真珠湾攻撃）
1942 年	1 月	福里北海岸浦底に飛行機不時着	1 月	日独伊三国新軍事協定調印
	2 月	特務艦 柏丸、池間沖に停泊	4 月	米空軍、本土初空襲
			6 月	ミッドウェイ海戦大敗
			12 月	ガダルカナル島撤退決定
1943 年			5 月	アッツ島日本守備隊全滅
	10 月	**七原、屋原、クイズで軍用飛行場用地接収**	9 月	イタリア無条件降伏
	11 月	特設警備第 210 中隊、下地国民学校を接収		
		貨船嘉義丸、湖南丸、奄美大島近海で撃沈	12 月	学徒出陣
1944 年	3 月	南西諸島に大本営直轄の第 32 軍が新設、沖縄防衛本格化		
	5 月	要塞建築勤務第 8 中隊・第 205 飛行場大隊宮古入り		
		平良第二国民学校・新里国民学校、軍に接収		
		陸軍宮古島西飛行場の建設開始		
	6 月	宮古神社遷座祭・奉納祝祭開催	6 月	マリアナ沖海戦
		富山丸が徳之島東沖で撃沈され、宮古配備予定の守備兵約 3,700 人が死亡		大都市の学童集団疎開
		郡内各国民学校で「青少年兵志願隊」結成		
		陸軍宮古島中飛行場の建設開始		
	7 月	城辺国民学校・西辺国民学校、軍に接収	7 月	サイパン島の日本軍全滅
		奄美、沖縄、宮古、石垣の老幼婦女子に疎開命令。**宮古から本土、台湾へ約 1 万人疎開**		
		第 28 師団配備、宮古高等女学校を司令部に接収		
	8 月	**平良第一・第二・下地の 3 校児童、九州疎開**	8 月	閣議、一億総武装を決定
		対馬丸、悪石島付近で撃沈（22 日）		
	9 月	伊良部国民学校、軍に接収		
	10 月	狩俣国民学校、陸軍病院分院として接収	10 月	レイテ島沖海戦神風特攻隊初出撃
		「十・十空襲」米軍艦載機が県内全域を爆撃。平良など、初めての空襲を受け、飛行場、港に停泊中の船舶、民家に被害が出る		
		米軍上陸必須の状況と判断し、先島守備隊は第 28 師団司令部を野原岳に構築、軍事物資を秘匿するための地下陣地の構築が加速。住民の疎開や防空壕づくりも本格化		
1944 年	11 月	各国民学校の御真影・勅語謄本を宮古中学校に移動（1 日）し、翌日、野原越の「奉遷所」に移す		
		宮古出身者約 800 人が警備召集（特設警備 505 大隊）		
	12 月	宮古群島守備兵力、ほぼ展開終了（陸軍 2 万 8,000 人、海軍 2,000 人、計 3 万人余り）		
1945 年	1 月	納見敏郎中将が第 28 師団長に着任		
	2 月	宮古に空襲や警報発令が続く	2 月	ヤルタ会談、米機動部隊本土初空襲
	3 月	**数百機による大爆撃により宮古島全域が被害をうける。**住民の犠牲も続出	3 月	硫黄島の日本軍全滅東京大空襲
	4 月	米軍、北谷・読谷に上陸（1 日）		
		平良の街の中央部から北西部が爆撃により焼失		
		米太平洋艦隊司令官、宮古島攻略の無期延期を指令		
	5 月	**英太平洋艦隊、宮国沖から艦砲射撃（4 日）**	5 月	ドイツ軍無条件降伏
		軍艦 18 隻に 385 発撃ち込まれる		
		日本軍南部へ撤退、10 万以上の住民が戦闘に巻き込まれる		
	6 月	宮古出身者の防衛召集が強化される		
		第 32 軍司令官牛島満ら、摩文仁で自決		
		沖縄戦終了（23 日）。一般人約 9 万 4,000 人・将兵約 9 万 4,000 人、米軍将兵約 1 万 2,000 人が死亡		
	7 月	米軍、琉球作戦終了を宣言		
	8 月	**終戦（15 日）**	8 月	米軍、広島（6 日）と長崎（9 日）に原子爆弾投下。
		米軍機により降伏ビラがまかれる		日本、ポツダム宣言 受諾（14 日）
		軍旗、野原岳の洞窟司令部で奉焼の後、洞窟司令部を破壊、「御真影」「勅語謄本」などを奉焼		連合軍先発隊、厚木に到着
	9 月	現地編成及び現地徴収部隊の復員終了	9 月	降伏文書調印（7 日）
		納見先島集団長ら、米軍機で沖縄本島へ渡り、降伏文章に正式調印。		
		米軍約 2,000 人が宮古島へ上陸し、日本軍の武装解除にあたる。		
		武器は海中投棄され、重火器などは爆破		
	10 月	兵器奉還業務完了、宮古に駐屯する将兵らの復員はじまる（翌 1 月に一応の終了）	10 月	政治犯 3,000 人釈放国際連合発足
	12 月	米軍、宮古島へ進駐		
		納見中将、BC 級戦犯に指名され、野原越司令部の宿舎で自決（13 日）		

『先島群島作戦（宮古篇）』
瀬名波栄 を参考に作成

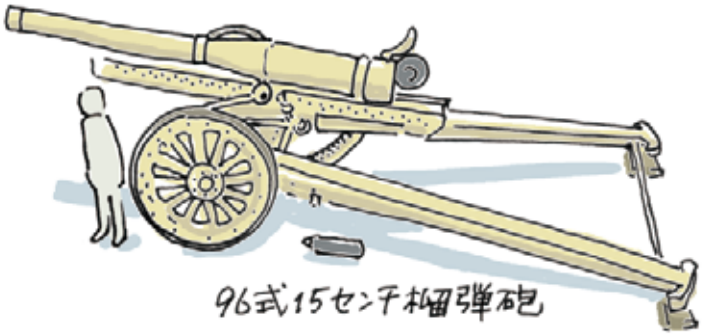
㉘ 下里添の野戦重火器秘匿壕群

所在地：城辺字下里添

この壕群は４つの壕からなり、野戦重砲第１連隊第１大隊が使用していました。東側の３つの壕は96式15糎榴弾砲を秘匿、設置するために構築されました。壕の入り口は野原岳を望む南西の方角を向いており、野原岳の第28師団本部を後方（東側）から援護することを目的としています。

壕①は終戦後に納見中将の命令によって納骨堂へ転用されており、周辺には記念碑が立ち並んでいます。

- 海上艇進基地第30大隊慰霊碑
- 「陣没せる軍役動物を吊ふ」碑



納骨堂

壕②の階段

砲の違い

（現在は機能が似てきている）

榴弾砲

曲射が主

砲身は短く太い

低初速・短射程

着弾すると爆発する榴弾を撃つためのもの

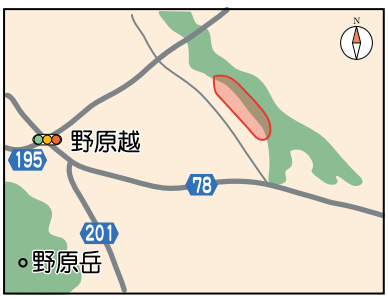
加農砲 ＝キャノン砲

低伸角が主

砲身は細長

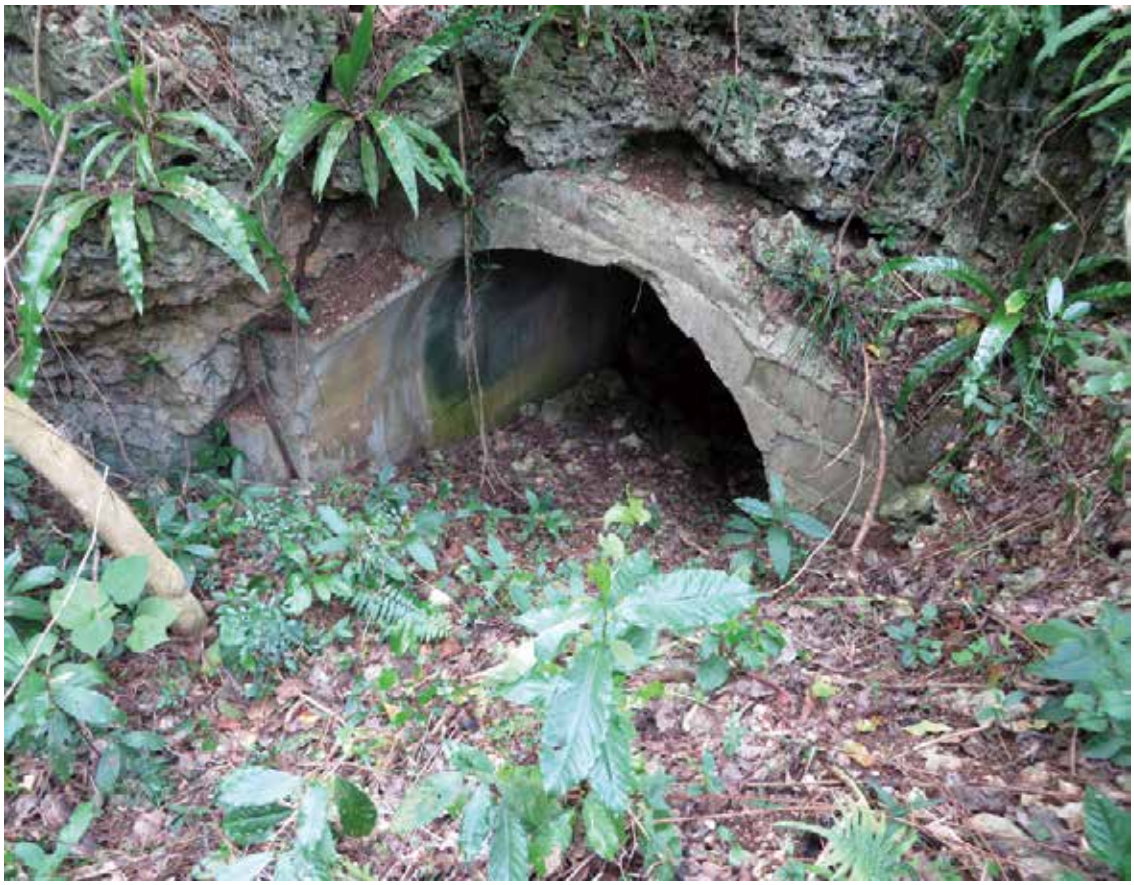
高初速・長射程

戦車などを撃ちぬく徹甲弾などを撃つため重く大きい



長山の丘陵地に残された壕

㊶アーリヤマの戦争遺跡群

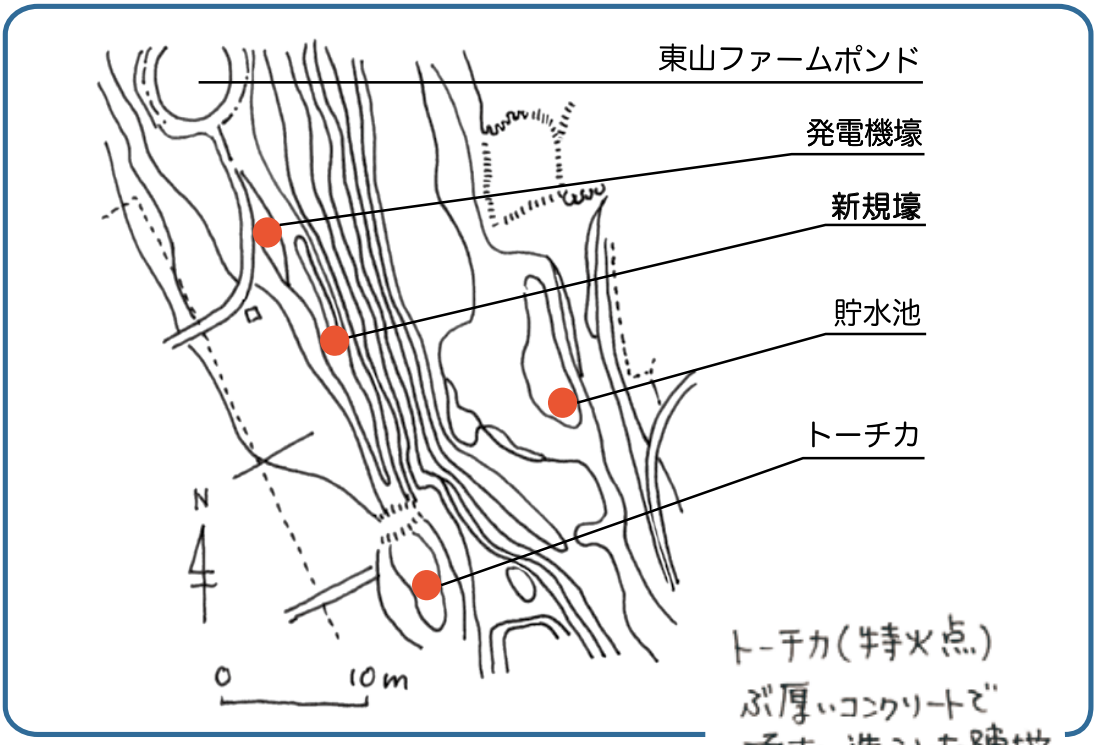


所在地：城辺字西底原（東山ファームポンド付近）

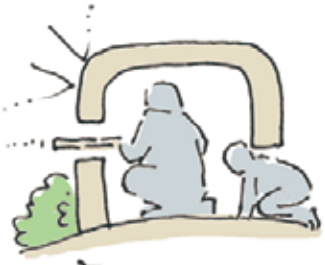
長山の丘陵地にある東山ファームポンドの南東側に位置し、発電機壕やトーチカ、貯水池からなる遺跡です。発電機壕は海軍313設営隊が構築したと言われています。この近辺に通信隊がいたという資料があり、発電機壕は電波探知機を起動させるものだったと考えられています。トーチカは宮古島南側一帯を見渡せる丘陵の頂上に構築され、見張り台としても利用されました。２人程度が入ることのできる広さで、

岩盤をくりぬいた内部はコンクリートで覆われています。

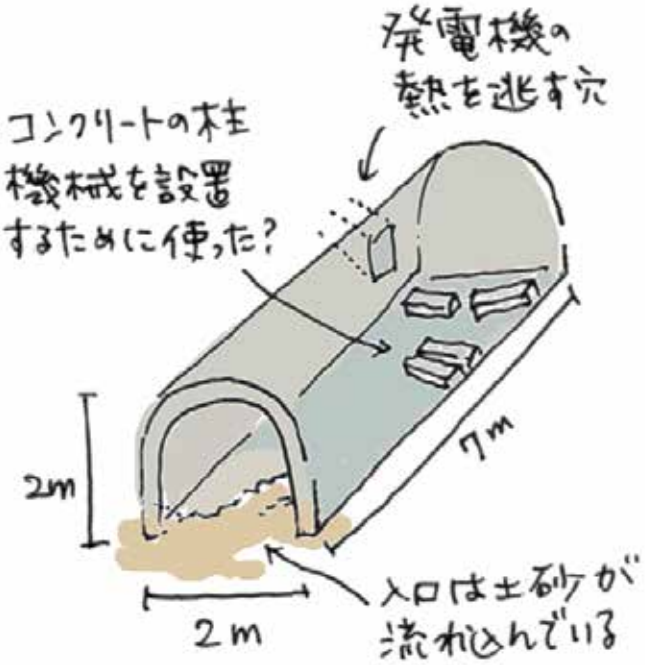
雨水を貯めるために造られた貯水池は、約2.5m×1.5mでほぼ完全な形で残っていますが、危険防止のために塞がれています。



トーチカ(特火点)
ぶ厚いコンクリートで
頑丈に造られた陣地



宮古では1~2人
が入れるものが主



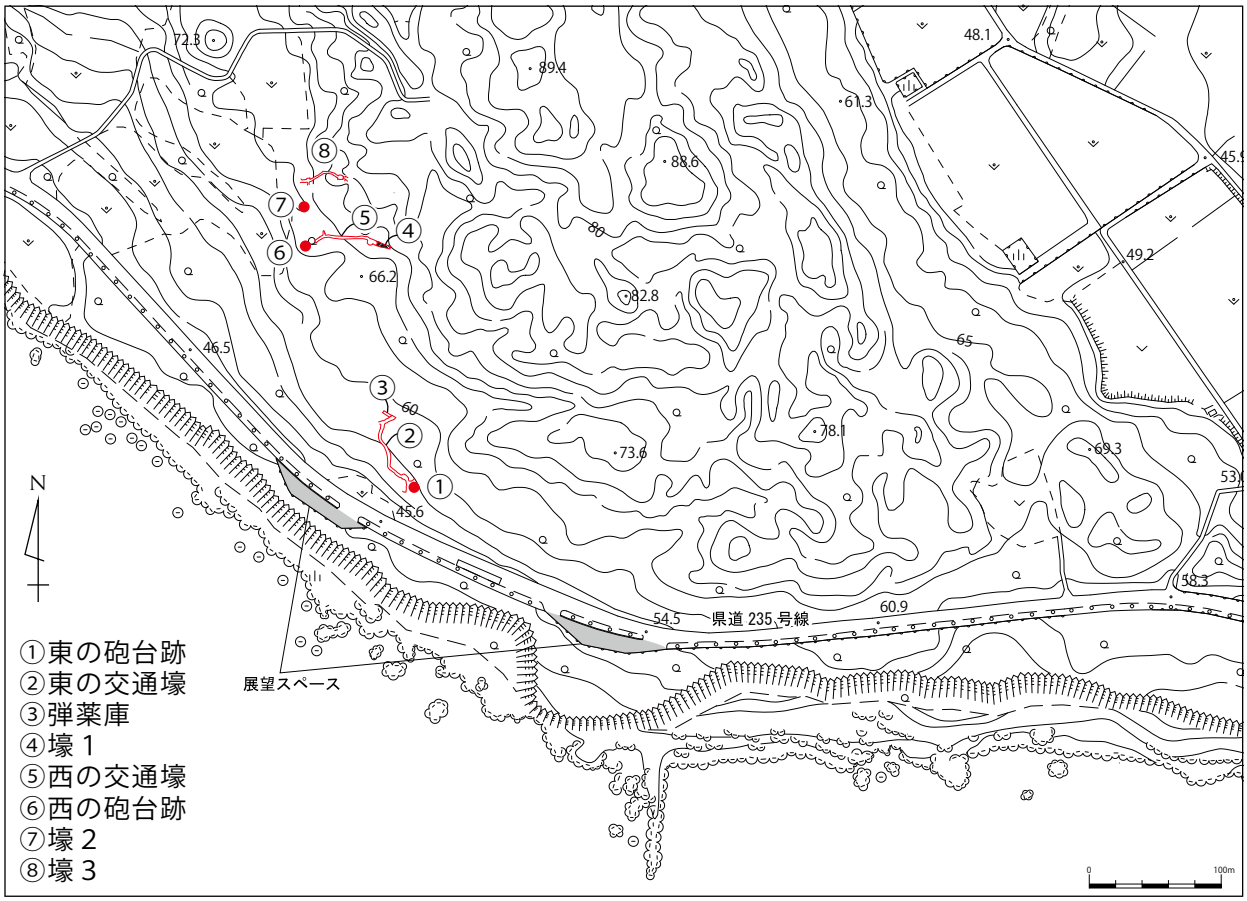
㊾ 東保茶根の戦争遺跡群（ひがしほちゃね　せんそういせきぐん）

所在地（しょざいち）：城辺字友利（ぐすくべあざともり）

友利集落の東側に連なる低丘陵地に、海軍第 313 設営部隊によって、東西ふたつの砲台が連合軍の上陸阻止のために設置されました。

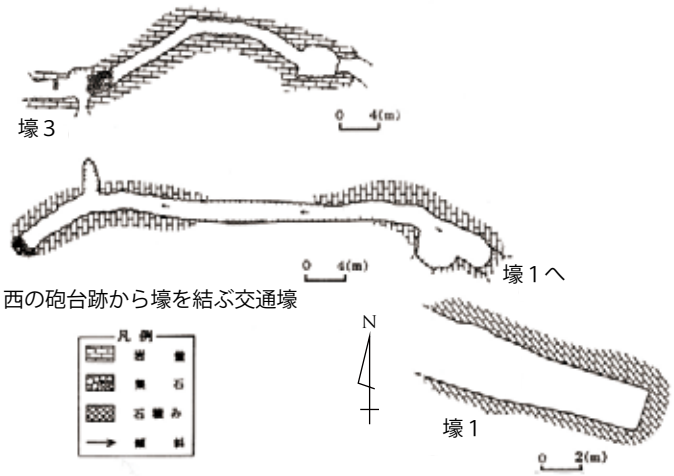
東の砲台は友利海岸、西の砲台は南西方向（上野宮国沖）に向けていて構築されていますが、戦後に砲台部分は大きく破壊されているため、詳細な状況は不明です。

その他の特徴として、砲台と弾薬庫（砲弾を格納する場所）を交通壕を構築して結んでいる点にあります。特に東の砲台からは北側に、約 54 メートルも交通壕が伸びており、コンクリート作りの堅牢な弾薬庫が現存しています。



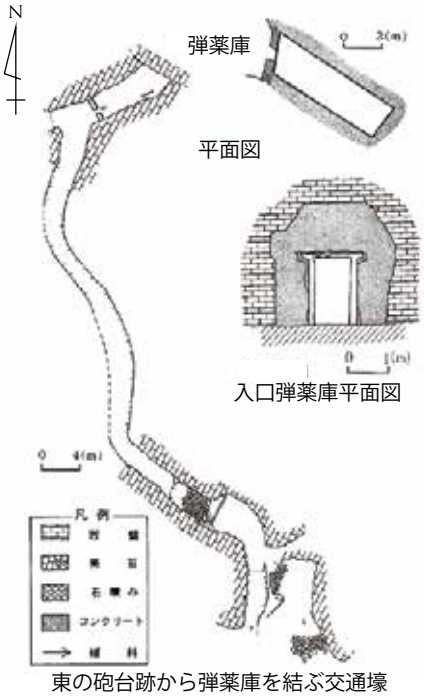
第 80. 図　東保茶根戦争遺跡群位置図

※各壕の位置については今回の調査で、沖埋文 2005 の修正を行った。



沖縄県戦争遺跡詳細分布調査 (Ⅴ) 宮古諸島編より (2005)

第 81. 図　西の砲台跡



東の砲台跡から弾薬庫を結ぶ交通壕

第 82. 図　東の砲台跡

⑨福里の戦争遺跡

（１）福里公園の忠魂碑（ふくざとこうえんのちゅうこんひ）

①所在地

宮古島市城辺字福里後前竹

②立地・現況

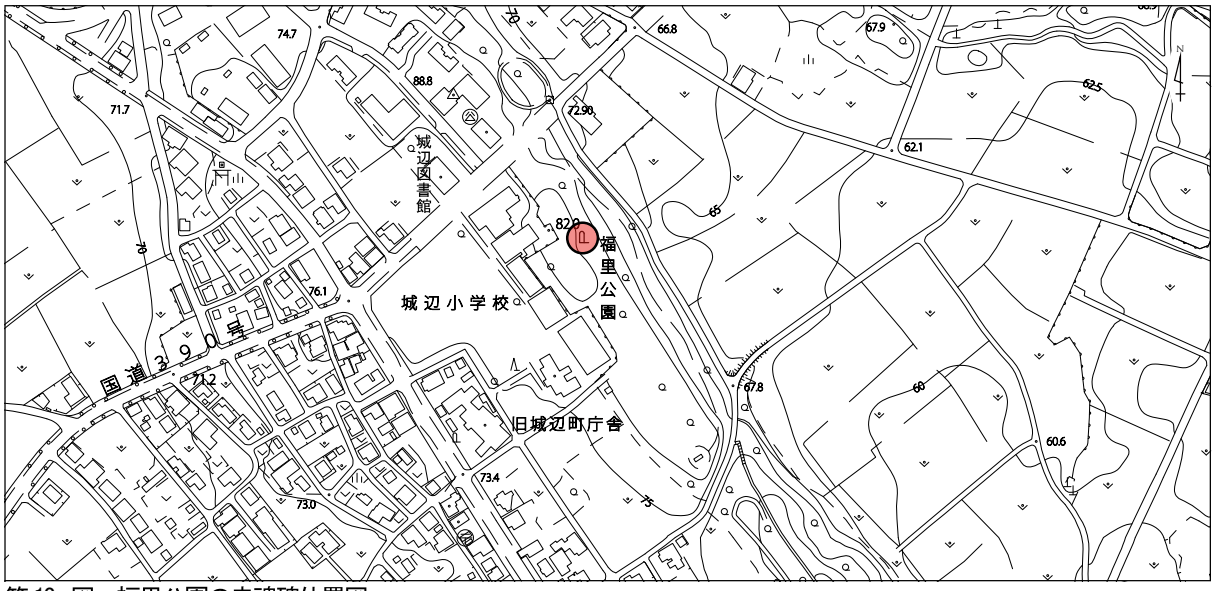
忠魂碑は、城辺小学校の東、福里公園内にあり、1927（昭和２）年、明治維新で軍功をあげた日本陸軍の創始者山縣有朋の揮毫で、城辺町在郷軍人会の後援で建立された。その隣には 2001（平成 13）年に慰霊碑が建立され、308 名の戦没者を弔っている。

③歴史状況

日露戦争直後から全国各地でさかんに建立されるようになった「忠魂碑」は靖国神社に直結する「村の靖国」であった。宮古では 1914（大正３）年５月、伊良部村長浜で建立され、ついで、1924（大正 13）年１月、平良の下里カママ嶺（揮毫山縣有朋元帥）、1927（昭和２）年８月城辺村福里（揮毫山縣有朋元帥）、1932（昭和７）年３月下地村洲鎌ツヌジ御嶽（揮毫鈴木壮六陸軍大将）に建立している。いずれも町村当局を中心に在郷軍人会等によるものである。（みやこの歴史より引用。）こ

写真 56. 忠魂碑

写真 57. 慰霊碑



第 13. 図　福里公園の忠魂碑位置図

宮古島内に配備された主な部隊編成と用語集

●第28師団：通称「豊部隊」。1944（昭和19）年６月28日に満洲で編成され、８月中旬に宮古島へ上陸。納見敏郎中将を師団長として、野原岳に本部を置く。

●第59旅団：通称「碧部隊」。1944（昭和19）年８月に満洲で編成され、９月下旬に宮古島へ上陸。 多賀哲四郎少将を旅団長として、添道に本部を置く。

●第60旅団：通称「駒部隊」。1944（昭和19）年８月に満洲で編成され、９月中旬に宮古島に上陸。安藤忠一郎少将を旅団長として、西城国民学校に本部を置く。

歩兵.....戦場を徒歩で行動する兵士
騎兵.....馬に乗って戦う兵士
山砲.....重火器の一種。山地などで使えるよう分解して運搬できる
山砲兵.....山砲を保有する部隊の兵士
工兵..... 橋や飛行場などを建設または敷設、あるいは爆破するために必要な技術と資材をもつ部隊
輜重兵..... 軍需品の輸送を任務とした兵士
野戦病院.. 戦場に置かれる病院
海上挺進基地大隊...特攻艇秘匿壕などを作る部隊

軍の編成

名称	従属部隊	構成人数	指揮官	階級
師団	司令部を有し独立して作戦する 歩兵４個連隊を軸とする	１～２万5,000以上	師団長	中将
旅団	２以上の連隊又は大隊で編成	2,000～5,000	旅団長	少将
連隊	数個大隊又は中隊で編成 県・市・区・郡別に置かれた	500～5,000	連隊長	大佐/中佐
大隊	歩兵４個中隊と機関銃１個中隊で編成	300～1,000	大隊長	少佐/大尉
中隊	３～４個小隊からなる	60～250	中隊長	中尉/少尉
小隊	30～50人の小部隊	30～50	小隊長	少尉/准尉
分隊	軍隊構成上の最小単位	12～	分隊長	軍曹/伍長

階級

	将校（士官）									准士官	下士官				兵		
	将官			佐官			尉官										
陸軍	大将	中将	少将	大佐	中佐	少佐	大尉	中尉	少尉	准尉	曹長	軍曹	伍長	兵長	上等兵	一等兵	二等兵
海軍										兵曹長	上等兵曹	一等兵曹	二等兵曹	水兵長	上等水兵	一等水兵	二等水兵

飛行場大隊.....飛行場管理・機体整備・補給・通信・気象等の業務を行う
震洋隊.....特攻艇を使った特攻部隊（P21参照）
野戦重砲..... 野戦に使う口径が10～15cm程度の火力の大きい大砲
重火器.....破壊力が大きく重量のある銃砲。重機関銃、大砲など
榴弾砲、加農砲が代表的（榴弾砲、加農砲P47参照）
速射砲.....間隔を短く、続けざまに発射可能な火砲
機関銃.....引き金を引き続ければ、 連続して自動的に弾丸を発射できる火器
複廓主陣地..... 司令部を中心に幾重にも巡らされた主陣地
秘匿壕.....武器や物資などを隠すために造られた壕
電波探知機..... 電波の発信置を探知する装置。敵機来襲の警戒などにあたった
接収.....国などの権力機関が個人の所有物を強制的に取り上げること
復員.....戦争編制の軍隊を平時体制に戻し、兵員の召集を解除すること
また兵役を解かれて帰省すること
BC級戦犯.....第２次世界大戦後、連合国によって捕虜虐待など「人道に対する罪」や「通例の戦争犯罪」に問われた元軍人ら。
遷座祭・奉遷....ご神体を遷す祭儀のこと・ご神体をよそへ遷すこと
奉還..... お返しすること

※用語解説は主に『広辞苑』などから作成しました

⑱ 池原・久路布の壕群（いけはら・くーるふのごうぐん）

①所在地

宮古島市城辺字比嘉池原・久路布

②立地・現況

本壕群は、城辺字比嘉の小字池原と小字久路布の西側に接する丘陵に位置し、合計３基の壕が確認された。壕の前方は戦後のほ場整備によって、一段低いサトウキビ畑が広がり、壕口とは段差がある。

③歴史状況

戦車第 27 聯隊第３中隊戦史資料（Ref. C 11110011100）によると、作戦準備に関する命令の内容として主力をウヅラ嶺の集積所に、一部を福里待機位置近傍に集積すと記されている。同隊の所有する戦車は 12 基で、本壕は、体験談等から戦車第 27 練隊が駐屯したとされる福里南の小丘陵沿に構築されており、戦史資料にある福里待機位置近傍と見ることができ、関連性を示唆している

④遺構の特徴

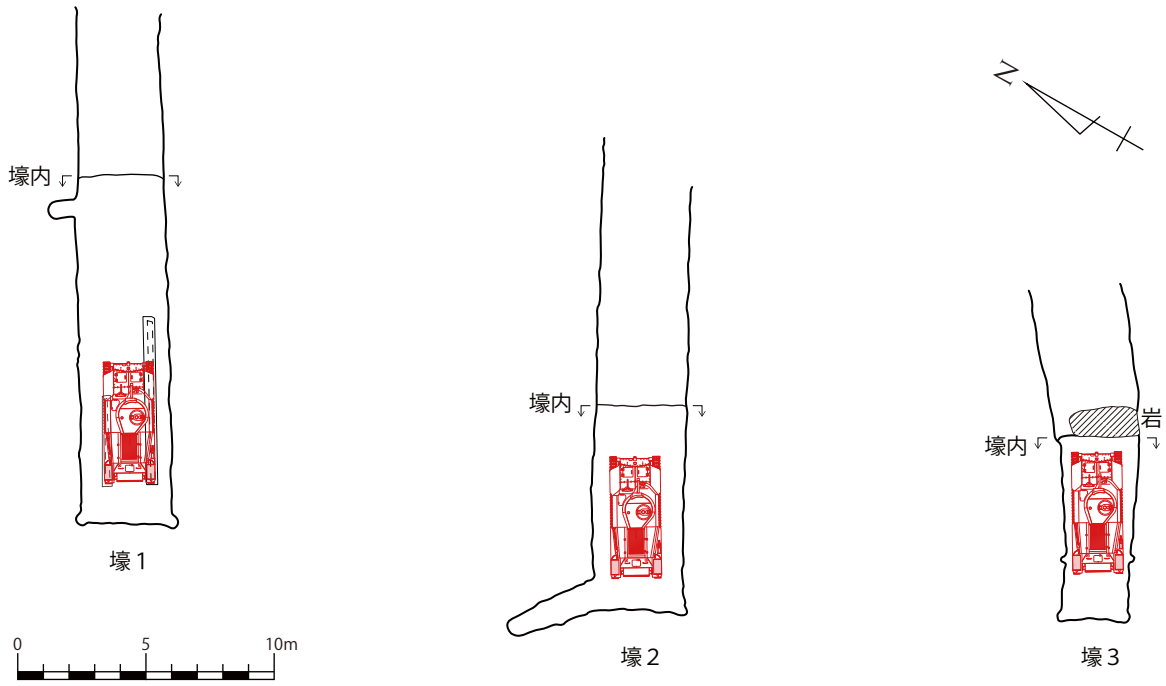
本壕群は丘陵の東側に位置し、合計３基の壕が確認された。壕の前方はキビ畑になっており、戦後のほ場工事の為か、岩盤が削り取られている。その為、入口付近の畑からは 1.8 メートルの段差ができているが、距離的には６～８メートルしか離れておらずアクセスについては比較的容易である。

壕１　琉球石灰岩を掘り込んで作られており、残りは比較的良い状態である。約６メートルの羨道が作られている。壕口は北東を向いており、幅 3.5 メートル、高さ 2.9 メートルの広い口を開けている。壕口から南西方向に直線で約 13.5 メートル進んで止まっており、壕口付近の北壁に幅 0.5 メートル、奥行１メートルの小部屋が作られている。壕内部には車輪幅が 0.4 メートル、車輪軸がおよそ 1.2 メートルの轍が残されている。

壕２　琉球石灰岩を掘り込んで作られており、制作途中で中止した状態なのか、残りは悪い。約 8.5 メートルの羨道が作られている。壕口は北東を向いており、幅 3.5 メートル、高さ 2.2 メートルの広い口を開けている。壕口から南西方向に直線で約８メートル進み止まっている。右奥に北西方向に通路が掘られているが、約４メートル進んで止まっている。

壕３　琉球石灰岩を掘り込んで作られている。壕口付近が崩落による岩盤でほぼ塞がっている。中は幅 2.5メートル、高さ 2.7 メートルと広い作りをしており、壕口から南西方向に直線で約７メートル進んで止まっている。壕口付近の崩落により土砂の流入が内部の半分を占めている為、残りは非常に悪い。

第 20. 図　池原・久路布の壕群位置図



第 20. 図　壕１・壕２・壕３の平面図（九七式中戦車の格納を想定）

写真 94.　壕１　壕口

写真 95.　壕１　内部

写真 96.　壕２　内部

写真 97.　壕３　壕口

㉚西更竹司令部壕（にしさらたけしれいぶごう）

①所在地

宮古島市城辺字下里添西更竹

②立地・現況

本壕は宮古島市城辺字下里添西更竹の丘陵地に位置する。宮古島はおおむね南北に連なる丘陵地が、いく筋か並んでおり、第 28 師団司令部があった野原岳は、ほぼ島の中央を貫く丘陵地の中ほどにある。西更竹の丘陵地は、その東側に位置する丘陵地である。丘陵の最高標高地は 88.7 メートルであり、司令部壕はこの丘陵の中ほど、標高およそ 60 メートルに位置している。この司令部壕の位置する丘陵地の南方には、アーリヤマ戦争遺跡群が位置おり、標高の低い宮古島において、これらの丘陵地は戦時中の日本軍の壕が、数多く形成された地域でもある。

司令部壕の位置する丘陵地は、原野であるが、壕の近くまで植林が行われている。そして、その植林地の東側部分はサトウキビ畑として利用されている。この司令部壕は、2012 年に近接する長南陣地壕群の発掘調査時の聞き取り調査で、宮古島市教育委員会によって新発見された壕跡である。更竹周辺の住民の多くが、この壕の存在を知っており、戦後この壕を訪れた人も多かったようである。なお、本壕は「吉田の陣地壕」として一度報告されている (久貝 2012) が、地域名の誤認とその構造から「西更竹司令部壕」として報告を行うこととした。

③歴史状況

本司令部壕は、明確な利用部隊が明らかにされていない。西更竹の位置する城辺地域は、戦時中は東地区と位置付けられ、独立混成第 60 旅団の管轄地区である。独立混成第 60 旅団は、昭和 19 年 8 月 10 日満州牡丹江で編成された。昭和 19 年 9 月 23 日に釜山港を出帆し、10 月 30 日に宮古島に上陸している。宮古島においては、城辺一帯の東地区の防衛を行い、司令部を長間の西城小学校に置いている。独立混成第 60 旅団の通称は駒部隊であるが、本壕に関する聞き取り調査の中では、駒部隊が使用していたとの話が得られた。

④遺構の特徴

本壕には、現在３つの壕口が確認されているが、内部の構造から土砂で埋まった状態の壕口がもう 1 か所あることがみてとれ、４つの壕口が連結した構造をなしている（南側より、壕口１、壕口２、壕口３、壕口４とした)。壕口１～３は長さに若干の違いがみられるものの、複数回折れ曲がる複雑な構造をなしており、いずれも同一の構造で規則的である。この入口の途中部分には、約２平米の掘り込みを有しており、通行の際の一時的な待機所としての機能が想定される。

現在では、この入口付近に、くるぶしまで浸る程度の水が常時たまっているような状態であるが、連結した通路部分には水がたまっているような場所はみられない。壕口１～３を連結する通路は、断面の形態が馬蹄形を呈し、幅が約 1.5 メートル、高さが約 1.5 ～ 1.8 メートルほどの人ひとりが通れる程度で、それほど大きな形態をなしているものではない。４つの壕口をつなぐように、構築された通路は、最も南側の壕口１側からは北進し、壕口２部分から、最も北側にある壕口４に向けて北西方向にのびている。また、この連結部の通路と交叉するように、壕口３から南西側にのびる通路が構築されている。この通路は、交叉部分からやや湾曲するものの、南西方向に 58 メートル続いている。そして交叉部分から 48 メートル進んだあたりで基盤が､クチャ層から琉球石灰岩へ移り変わっている。この基盤の変化のためであろうか、さらに南西側に６メートル進んだ時点で、この通路は行き止まりとなっている。

本壕では構造的な特徴として、約 10 平米ほどの面積を有する脇部屋が、通路の左右に数多く設けられているという点がある。脇部屋の総数は、18 に及ぶ。いずれも、天井までの高さが約 2.2 ～３メートル

ほどと通路部分と比べ高いつくりとなっている。その用途を推し量る資料が現在のところ確認できないものの、倉庫や小部屋としての利用が推察される。

本壕における遺物の出土は、非常に少ないものの、脇部屋部分で薬ビンと思われるビン類がわずかに散乱する箇所がみてとれる。その他、壁面部分には、ランプをつるすためと考えらる釘などが打ち込まれている箇所が複数みてとれる。

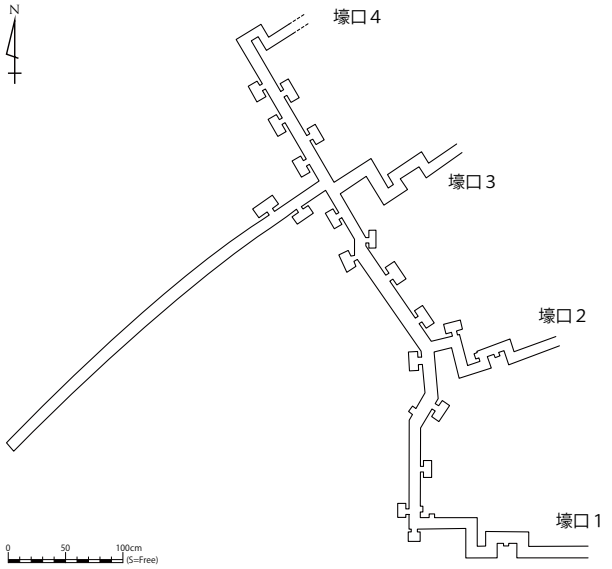
ここまで記述した壕跡とは別に、もう２つの別途の壕口が確認されている。これらの壕口は、石を積んで入口をふさいだ状態にあるため、その内部の構造を確認するに至っていない。しかしながら、これらの壕口と、司令部壕との間には、それぞれの壕口を結ぶような形で、隊道が構築されている。

また、隊道の中間部分には、長さ 10 メートル、高さ３メートルほどの盛土がなされている。これらの状況から司令部壕を含めた丘陵地一帯を、ひとつの要塞として構築する意図がみてとれる。

まとめ。

本壕は、総延長が224メートルにも及ぶ、宮古島市内では最大規模の壕跡である。『先島群島作戦(宮古篇)』では、城辺字長間に旅団司令部が置かれていることが判る。独立混成第60旅団の本部は、西城小学校に置かれており、本壕はその西側の丘陵地に位置する。その規模などや位置的な関係、聞き取り調査の成果を踏まえると、本司令部壕が独立混成第60旅団の司令部壕であった可能性は非常に高い。

久貝弥嗣　2012年 「(仮称)吉田の陣地壕について」　『宮古郷土史研究会会報№191』 宮古郷土史研究会



第 47. 図　西更竹司令部壕平面図

第 48. 図　西更竹司令部壕位置図

㊵「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑（「じんぼつせるぐんえきどうぶつをとむらう」ひ）

①所在地

宮古島市城辺字下里添佐事川

②立地・現況

本碑は県道 78 号線の平良と城辺との境界に近く、下里添の野戦重火器秘匿壕群に隣接している。碑は小高い丘の頂上部に建立されており、現況としては雑木林になっている。そのため道路からは碑を確認することはできず、道路から約 10 メートルほど丘の中に入る必要がある。

③歴史状況

第 28 師団病馬収療所（豊 5685 部隊）（隊長：保坂斯道獣大尉）は、昭和 19 年 7 月 8 日動員下令先島群島派遣のため斉々哈爾出発、 7 月 20 日釜山港出帆、 7 月 22 日門司寄港。 8 月 6 日鹿児島港出帆、 8 月 12 日沖縄県宮古島に上陸（ref. C 12122499000）。宮古島では、城辺村下里添に駐屯している。

体験談や聞き取り調査などから、野原越には病馬廠があり、馬の世話に通ったとの証言がある。昭和 20 年秋、戦没将兵と軍役動物（主として軍馬）の霊を慰めるための慰霊碑が、先島集団司令部の所在したゆかりの地、野原越に建立された。碑文は納見中将の揮毫によるもので、この慰霊碑の近くには当時の納骨堂も建立された。

④遺構の特徴

本碑は県道 78 号線の北側にある、雑木林の小山をおよそ 10 メートル分け入ったところに建立されている。斜面に石積の階段（10 段）を構築し、小山の頂上部を石垣で囲った、幅 7 メートル、奥行き 5 メートル、高さ 1 メートルに整地された平地に碑が建立されている。

碑の大きさは、幅 2.5 メートル、奥行き 1 メートル、高さ 2.3 メートルである。現在はガジュマルの大木に覆われて、碑文をすべて読み取ることは困難であるが、かろうじて読める碑文には、「陣歿せる軍役動物を吊ふ　昭和 20 年中秋　納見中将誌」とある。また、碑文下の土台には写真に示したような文様が確認できる。

第 47. 図 「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑位置図

写真 203.　「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑近景

ふ吊を物動役軍るせ歿陣
○○順従○○彼
各○其馬○○仕奉
昭和二十年中秋
納見中将誌

図版 5.　碑文及び碑文の書き出し
（○は判読不明）

図版 6.　碑文下にある文様

㉙佐事川の陣地壕（さずがーのじんちごう）

①所在地

宮古島市城辺字下里添佐事川

②立地・現況

県道 78 号線（城辺線街道）を平良から城辺方面へ進み、農業研究センターと宮古島リハビリ温泉病院の間の農道を右折し、30 メートル程行くと畑の端にサジガー井戸がある。その井戸から 50 メートル程、畑のきわに沿って奥に進むと、左側に 1 メートル程の水路を挟んで小丘陵があり、壕口は小丘陵の壁面に開いている。

佐事川の陣地壕から北に 700 ～ 800 メートルの距離には、下里添の野戦重火器秘匿壕群が、また、南に 200 メートルの距離にある丘陵には、野戦洞窟病院壕があったと言われ、その南西側およそ 200 メートルの場所にはウズラ嶺陣地壕がある。

③歴史状況

この陣地壕の周辺は東南には西更竹司令部壕、南にウズラ嶺陣地壕群、独立速射砲第５大隊本部、北に下里添の野戦重火器秘匿壕があり、１キロ西側には師団司令部壕と考えられているタキグスバルの地下壕がある。このような地形からみて、師団司令部の１施設ではなかったかと考えられる。城辺町史の体験談の中には、佐事川嶺に師団司令部があった。との情報も得られているが、この師団司令部がタキグスバルの地下壕を指しているのか、あるいは佐事川の陣地壕を指しているのか判然としない点があり、構築の形態から、本部壕としての機能を有すると考えられるが、部隊名を特定するには至っていない。

④遺構の特徴

佐事川の陣地壕は２つの壕口が、「コ」の字型に連結しており、泥岩（クチャ層）の岩盤を掘りこむかたちで構築されている。２つの壕口は、いずれも西を向き、北側の壕口は土砂の堆積によりほぼ壕口（壕口１とする）が埋まった状態にある。南側の壕口（壕口２とする）は、幅が 90 センチ、高さが 1.5 メートルほどと、人ひとりが腰を屈めて出入りするような規模であるが、内部は高さが 1.8 ～２メートルほどの高さを有しており、立って歩けるほどの高さとなる。壕口２から約 28 メートルほど東進するが、その入口から 9.5 メートルほど南側に幅 0.9 メートル、奥行 1.4 メートル、高さ 1.7 メートルほどの小部屋が設けられている。

同様の小部屋は、壕口１の入口から９メートルの南側にも設けられている。この２つの小部屋は、狭い通路をすれ違うための待機所としての役割を有すると考える。また、この２つの小部屋には灯り取りが３つずつ壁面を掘り込むかたちで設けられており、壕口２側の小部屋の灯り取りには、当時のものと考えられるロウソクも残されている。

壕内には床面の両壁側に幅約 0.2 メートル、深さ約 0.05 メートルの側溝が設けられている。これは壕が帯水層である泥岩（クチャ層）の地盤を掘り込んで作られており､壕内に水がたまりやすい環境のため、その排水の役割を有している。

また、排水のために、壕内は全体的に壕口へと下がる傾斜をもつように作られている。これとは別に、壕口１の連結部周辺には南壁部分に幅約 0.2 メートル、高さ 0.05 メートルの段差が確認できたが、その用途は判然としない。

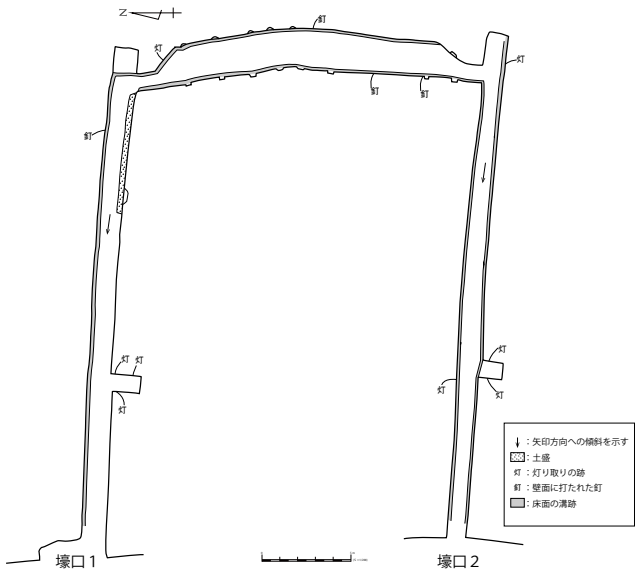
２つの壕口を結ぶ南北方向の連結部は、やや東側に湾曲しながらも、幅が約 2.2 メートルと広く作られている。西側の壁面部には、８か所に柱を設置するための掘り込みが確認できる。連結部の北側は、ほぼ一定の間隔で柱跡が５か所設けられ、東側の壁にもそれに対応するように掘り込みが見られる。しかし、この東側の掘り込みは、西側の掘り込みが柱の形に合わせて約２メートルの高さにわたって半円状に掘り

込むのに対し、柱部分の半円状の掘り込みをもたず梁がわたされる、約２メートルの高さの場所が部分的に丸く掘り凹んだ形状をなしており、東西の柱跡の掘り込み方法には違いがみてとれる。その一方で、連結部の南側で東壁に確認された３つの柱跡は、その間隔がやや不規則であり、壁面の崩落などにより明瞭に西壁部分の柱や梁の掘り込みが確認できない箇所もあった。連結部は、天井部分の崩落個所が大きく２か所にみられ、床面には崩落の土砂が堆積している。

壕内の壁面には、連結部や小部屋部分を中心に灯り取りの窪みを複数確認することができる。ロウソクの残存については前述した通りだが、壕口１側の小部屋に設けられた灯り取りの掘りこみの底面には、缶の底の部分を切り取って灯りを立てるための道具も置かれていた。その他、壕内の壁面には多くの箇所に釘が打ち込まれていた他、先の部分が丸い形状をしたピン状の釘が打ち込まれた箇所も見られた。これらの部分の壁面の多くは黒く変色していることなどから、灯りを下げるための機能を有していたことが推察される。

壕内には遺物がほとんどみられず、唯一壕口２との連結部の境目あたりに、透明のビン（インクをいれるためのビンか？）が１点確認できた。

第 47. 図　佐事川の陣地壕位置図



第 48. 図　佐事川の陣地壕平面図

㉟ウズラ嶺の陣地壕群（うずらみねのじんちごうぐん）

①所在地

宮古島市城辺字下里添ウズラ嶺

②立地・現況

本壕群は、総数５基の壕で構成されている。いずれも、ウズラ嶺という小丘陵地に構築された壕群で、現在は雑木林となっており、産業廃棄物の不法投棄が著しい。ウズラ嶺の小丘陵地は、サジガーの丘陵部までのびる一連の丘陵地である。聞き取りでは、この嶺には、水が流れる小規模な川があったということであるが、現在はそのような水流はみられない。

③歴史状況

『先島群島作戦（宮古篇）』においては、「野原越東方ウズラ嶺」に野戦重砲兵第２中隊が 15 糎榴弾砲を４門配備したと記されている。これと同様の内容を示す資料として宮古島地区防禦配備図（佐渡山氏提供資料）にも、ウズラ嶺の位置する一帯に榴弾砲を設置したマークを見て取ることができる。

また、聞き取り調査においても、大砲が４門据えられ、２門は白川浜を、２門は野原岳の方向を向いていたとの証言がえられている。その一方で、山砲兵第 28 聯隊の砲兵隊陣地構築一覧表によれば、山砲（75 ミリ）を「ウズラ嶺八七高地北方百五〇米」に２門、「ウズラ嶺八七高地西側」に３門を設置したと記されている (ref.C11110237900)。ウズラ嶺八七高地とは、西更竹の丘陵地の北西部に位置する最高標高地点を示すものと考えられる。これらの資料から、ウズラ嶺には、15 糎榴弾砲もしくは、山砲（75 ミリ）が設置されていたことを示している。

④遺構の特徴

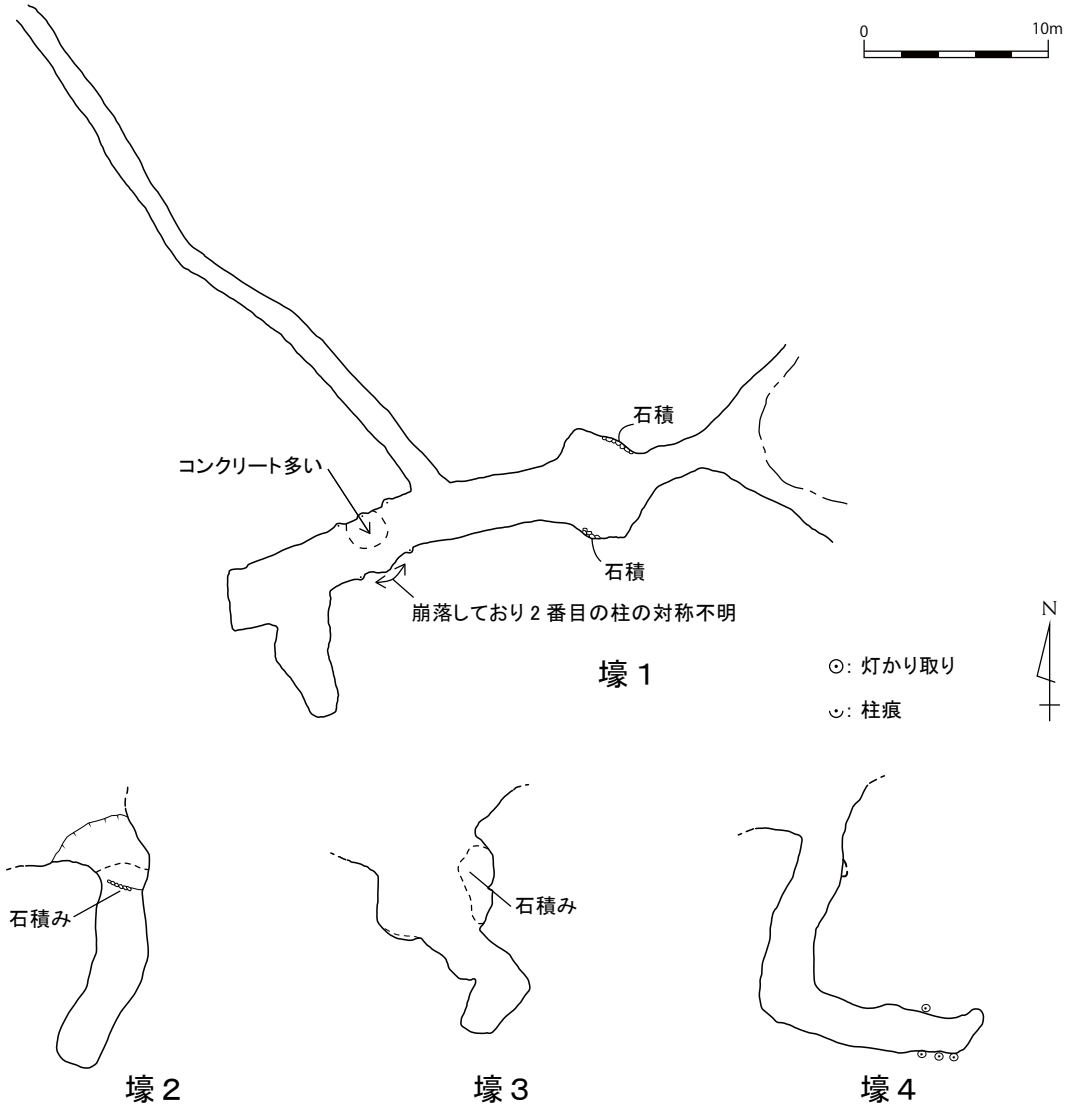
５つの壕はそれぞれ西側から壕１～壕５の名称を付した。これらの壕はその構築場所から、２つのポイントに大別される。西側に位置する壕１～壕４は、隣接して構築されており、最も東側にある壕５は、これら４基の壕とは離れた道路沿いに位置する。

壕１は、壕口部分の幅が 3.3 メートル、高さ３メートルと規模の大きな壕で、北北西に開口する。壕口近くの平面形態は、両壁面部とも三角に掘り込んで幅を広げ、そこからは、ほぼ直行した平面形態を呈するが、南西方向と、北東方向に通路を設けている。南西方向へは、幅が約 1.6 ～２メートル、高さ 1.6 メートルと、人ひとりが歩けるほどの通路である。本来は、丘陵部にむけてもうひとつ壕口を設けるように構築された通路の可能性がある。東北方向へは約 5.5 メートルほど直進して突き当たる。直行する部分は、高さが 2.4 メートルと壕口部分に比べやや低い。また、３対の柱と梁を設ける目的で、壁面を半円型に掘り込んだと思わる範囲がみられる。柱間の幅は 1.5 メートルほどで、半円型の直径は約 0.4 ～ 0.5 メートルである。梁を設置するために、壁面の上部を丸く掘り込んでいる跡も確認される。この柱痕の近くには、麻袋に入れられていたような形状のコンクリートの固まりが散乱している。

壕２の壕口前には、壕を構築した際の石灰岩礫を山にして積み上げ、目隠しとしている。壕１にみられるような、両壁面を三角に掘り込む形態は、下里添の野戦重火器秘匿壕群にもみられる形態である。前述した歴史状況を踏まえるならば、壕１は九六式 15 糎榴弾砲を格納する壕の可能性が高いといえる。

最も東側にある壕５の壕口は、道路建設時に丘陵部側へ周辺の土砂や石灰岩礫を寄せたものと考えられ、壕口がほぼ埋まった状態にある。聞き取り調査によると、この壕は、食料庫であったとされ、２つの壕口が内部でつながったコの字型を呈するとされる。実際に、内部を確認したところ、人が立って歩けるほどの高さを有しややＵの字状の平面形態を呈している。大まかな壕の形態が、聞き取り調査と類似する点などから、食料庫として利用されていた壕の可能性が高い。

第 47. 図　ウズラ嶺の陣地壕群位置図



第 48. 図　ウズラ嶺の陣地壕群　壕１～壕４平面図

⑪西川底の壕群（にしかわぞこのごうぐん）

①所在地

宮古島市城辺字福里西川底

②立地・現況

国道 390 号線を城辺小学校へ向かう西里添と福里の境の低い丘陵に位置し、壕口は東側を向いている。

③歴史状況

戦車第 27 聯隊第３中隊は昭和 44 年７月 17 日に宮古島に上陸している。城辺小学校沿革誌によると、『昭和 19 年９月 14 日、当校駐屯の戦車隊、当校より西部および南部へ移動。当校舎には八□□旅団司令部設置。校舎大部分採用される（但し職員室除く）』とあることから、戦車第 27 聯隊第３中隊は宮古島上陸後、一時期、城辺小学校に駐屯したと考えられる。その他、城辺町史第二巻戦争体験談編では、戦車隊は高阿良後（たかあらぐす）の前ミャーマガーに天幕を張り、炊事に井戸を利用していたとの事である。

また、歩兵第 30 聯隊に現地入隊し、福南の高阿良後で実際の戦車で訓練したとの証言もあり、この福南の地には戦車隊が駐屯した事を裏付けている。同中隊は戦車を 12 台保有し、総勢 124 名であったことが同中隊の戦史資料で確認できる。西川底は字福里の南側に位置し、この地の壕群は戦車第 27 聯隊第３中隊との関連性が高い。

④遺構の特徴

壕群は、西川底にある嶺の東側の麓に、約30メートルの間隔をあけて等間隔に５基の壕口が確認できる。５基中３基の残存状況は良好で、１基はゴミの流入により入口がほぼ埋まっている状態であるが、内部は広く残地は良い。

壕１。琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕口は東を向いており、幅約４メートル、高さは約３メートルと広く、断面はＵ字型を呈す。内部は、壕口から西方向に直線的に 14.5 メートルほど進み、奥に行くほど尻すぼみとなり、約３メートルまで幅が狭まる。左奥にも通路が南西方向に折れ曲がっている。幅約 0.8 メートルの通路が上方向にアールを描きながら約７メートル登り、南方向を向くともうひとつの壕口にでる。

壕２。羨道のみが構築され壕内部については掘削の行われていない構築途中の壕である。羨道部分の幅は 3.3 メートル、長さ 5.1 メートルである。壕口は砲北東を向く。

壕３。琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。羨道が 17 メートルほど続いており、壕口が北東方向に幅３メートル、高さ３メートルの逆Ｕ字型の形に開いている。内部は壕口から直線で約 14 メートル進

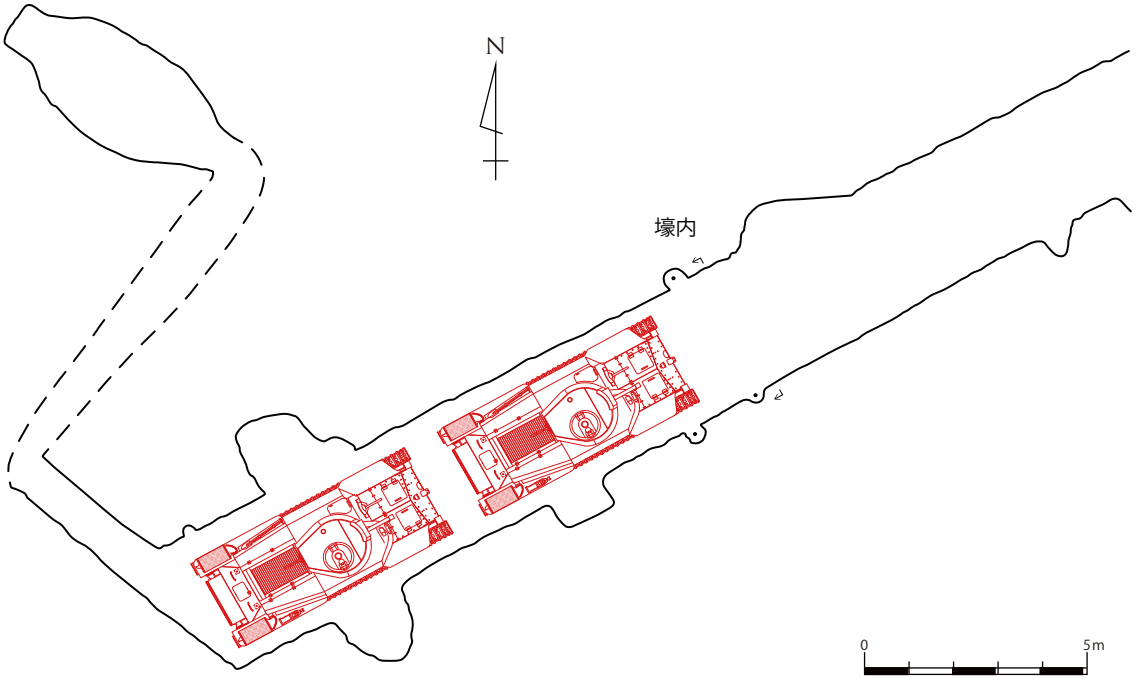
第 13. 図　西川底の壕群位置図

んで止まっており、左右の壁面には 1.6 メートル程の小部屋が作られている。右奥には北西方向に通路が 8.5 メートル伸びており、幅 2.5 メートル、高さ 2.3 メートルの脇部屋が作られる。

壕 4。本壕は、羨道部分の幅が 3.4 メートルあるが、壕口近くにはコンクリートで固められた石積があり、その部分が通路側にせり出している。この石積のある最も羨道の幅が狭まる部分は幅 3.1 メートルである。羨道の長さは約 8.5 メートルを有し、北北東を向く。壕 4 については、羨道部分と壕内部が直線ではなく 30 度ほど曲がった形状をなす。そのため、壕口部分は北東方向を軸とする。壕内の幅は約 3.3 メートルで長さは 15.8 メートルである。最奥の突き当り部分には約 1.8 メートル上がった部分に約 1.2 メートルの通路が構築され、90 度折れ曲がった先に、幅 1.6 メートル、長さ 7.2 メートル、高さ 1.4 メートルの脇部屋が設けられている。壕内の天井部分は崩落も多いが、やや丸みを持った略方形状の断面形を呈する。

壕 5。琉球石灰岩を掘り込んで作られている。入口はゴミや土砂の流入により幅 0.8 メートル、高さ 0.4 メートルと非常に狭い。内部は高さ 3 メートルほど降りた位置にあり、南西方向に直線で幅 3.6 メートル、奥行 10 メートル程伸びている。右側には 1 か所、幅 0.8 メートル、高さ 1.3 メートルの小部屋が作られている。右奥には西方向に通路が約 3 メートル伸びており、幅 3 メートル、高さ 1.8 メートル程の小部屋が作られている。また、その延長線上に上方向に登りながら約 3 メートル進み、北東と北西に分かれ、それぞれ 3 メートル程掘り進めて止まっている。奥の通路には、5 か所の灯り取が見られ、壕口からの突き当り南壁には高さ 1.6 メートルの位置に、幅 0.25 メートル、奥行 0.25 メートル、高さ 0.3 メートルの棚が作られている。

写真 56. 西川底の壕群（遠景）



第 13. 図　壕 3 平面図（九七式中戦車の格納を想定）

「下里添の野戦重火器秘匿壕群」の前で概要を解説

「下里添の野戦重火器秘匿壕群」にある納骨堂を見学

「東保茶根の戦争遺跡群」の弾薬庫を見学し、概要を解説

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用講座

第 1 回戦　跡巡り～城辺地区の戦争遺跡　（平成 30 年 6 月 9 日（土）午前 9 時 30 分～正午）

アンケート集計

1．今回の巡検に参加しての感想

●本日は詳しい説明をありがとうございました。宮古で 18 年、東京で 45 年、宮古の歴史を知りたくて手はじめに本講座に参加させていただきました。宮古島の事、少し分かってきたような気がします。次はどんな歴史が分かるのかとても興味深く楽しみです。ありがとうございました。（60 代、女性）

●昨年も案内していただいたコースでしたが、2 回目なので、前回より理解が深まりました。説明もわかりやすかったです。清掃もありがとうございました。（40 代、女性）

●非常に為になりました。毎回参加したいのですが、沖縄本島に在住のため、むつかしい面がありますが、できるだけ参加したいと思います。（60 代、男性）

●ヘルメットや軍手、ライトなども準備して頂きありがとうございます。普段は入れない所、知らない所に案内して頂いたので、とても勉強になりました。今後とも続けて頂けるとうれしいです。（50 代、女性）

●宮古島在住者です。一般教養として参加しました。過去何回か参加しておりますが、主催者の細やかな配慮にいつも感心しております（安全面・資料・コースの草刈その他）。（60 代、男性）

●同じ地域に住んでいても判らない所があり、今回は参加し大変よかったです。次回は宮古全体に参加したいです。（60 代、）

●準備などご苦労さまでした。とても意義ある貴重な企画です。戦跡は今も生きる歴史の“証言”です。次世代に、保全して引き継がれ、戦争させない国作りの一助にしなければなりません。（60 代、女性）

●個人ではなかなか探す事ができない場所、戦後幾日過ぎても、その場所を観る事によって風化してはいけない歴史だと思います。ありがとうございます。（50 代、女性）

●なかなか個人では行きにくい所へもいくことができて良かった。また機会があれば参加したです。（40 代、女性）

●戦後生まれが大多数となり、戦争体験の風化が進む昨今、戦跡めぐりは往時の宮古島の戦闘体制への理解を深める貴重な講座となった。（70 代、男性）

●久しぶりに行った場所が歩けるように枝切りや小石等を除き、事故がないように心配りしているのに感心した。多くの人を案内する為に色々気をつかっているのに感謝します。（60 代、男性）

●なかなかいけない場所なので、行くことができて良かった。資料にあっても場所に行けず、説明も受けることができてよかった。ありがとうございました。（60 代、女性）

●はじめて、戦争遺跡がこんなに多くあったことを知りました。なかなか自分ではいけない場所なので、説明をききながらはよかったです。ありがとうございました。（50 代、女性）

2．今後の文化講座で取り上げたいテーマ

●沖縄本島で焼失した貴重な資料と同時代のものが、宮古にあった為、戦火を免れた、というような文化財について知りたいです。（40 代、女性）

●能見中将について詳しく知りたいのですが…（60 代、男性）

●戦跡もあやんつも色々な事を知りたいです。（50 代、女性）

●遺跡や戦跡などは島に生きる者にとって大切な歴史だと思います。これからもどんどん取り上げてもらいたいです。（50 代、女性）

●又、戦跡が行きたい。行けない場所があったので、何回でも行きたい。（60 代、女性）

戦時の島に思いはせる

城辺地区で戦跡巡り

市教育委員会主催

市教育委員会主催の戦跡巡り「城辺地区の戦争遺跡」が9日に行われた。事前に申し込みをしていた市民20人が参加。担当職員から詳しい説明を聞きながら、日本軍が使用していた壕など宮古島でも戦争があったことを今に伝える戦跡を目の当たりにして、当時の状況に思いをはせた。

今回の戦跡巡りは、戦争遺跡を実際に訪れ、太平洋戦争時の城辺地区の状況について理解を深めてもらうことが目的で、4カ所の戦争遺跡を見学した。

市役所城辺庁舎に集合した参加者は、市のマイクロバスで戦跡巡りに出発。榴弾砲を秘匿、設置していた下里添の野戦重火器秘匿壕群、発電機壕やトーチカ、貯水池からなるアーリヤマの戦争遺跡群、連合軍上陸阻止を目的に東西二つに設置された砲台や弾薬庫、交通壕などからなる東保茶根の戦争遺跡群、日本陸軍創始者の山縣有朋の揮毫で、城辺町在郷軍人会の後援で建立された福里公園の忠魂碑を巡った。

担当職員（左手前）から説明を聞く参加者＝9日、下里添の野戦重火器秘匿壕群

参加者たちは担当職員の説明を聞き、メモを取りしながら興味深そうに戦跡を見学した。

新聞のお知らせ欄で今回の戦跡巡りのことを知り参加した川上良絵さん（48）＝上野＝は「資料を見るよりこういうものに参加した方が、専門家から詳しく説明を聞けるので良いと思い参加した。地図を見ても個人ではたどり着けないような場所もあり、貴重な経験ができた。また機会があれば子供と参加したい。自分たちが住んでいるところに戦争で使ったものがあることを間近で見ると理解が深まると思う」と語った。

今回の戦跡巡りは、2018年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の第1回として実施された。

市教委

城辺地区で戦跡巡り

野戦重火器秘匿壕群など

宮古島市教育委員会は9日、2018年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の第1回戦跡巡り「城辺地区の戦争遺跡」を行った。約20人の市民が下里添の野戦重火器秘匿壕群やアーリマヤの戦争遺跡群、東保茶根の戦争遺跡群、福里公園の忠魂碑を訪れ、沖縄本島のように地上戦は無かったものの米軍の攻撃に備えた当時の様子などを聞いた。

午前9時半から始まった戦跡巡りでは同委員会文化財係の久貝弥嗣さんらが案内し説明。下里添の同秘匿壕群は4つの壕からなり、野戦重砲第1連隊第1大隊が使用していた。東側の3つの壕は96式15糎榴弾砲を秘匿に設置するために構築。壕の入口は野原岳を望む南西の方角を向いており、野原岳の第28師団本部を後方（東側）から援護する役目を担っていたという。

参加者たちはメモを取りながら、真っ暗な壕の中にも入り興味深そうに聞いていた。

城辺地区の戦争遺跡の特徴は、山砲兵や野戦重火器など多種多様な部隊による壕が構築されていることを挙げた。同史跡巡りは17年度の分布調査の成果を踏まえ実際に戦争遺跡を訪れ、戦争時の状況について理解を深めることを目的に実施された。

戦跡巡りで久貝さん（左）から説明を聞く参加者＝9日、下里添の野戦重火器秘匿壕群

平成三〇年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回

発掘調査速報展

二〇一六年度～二〇一八年度

松原遺物散布地　＊掘立柱建物跡検出状況

国仲砂川の壕

アラフ遺跡

荷川取ウプドゥマーリャの特攻艇秘匿壕群

国仲元島遺跡

戦争遺跡分布調査＊写真は西花切陣地壕群

上地村番所前遺跡

【発掘調査速報展】

会期：10 月 26 日（金）～ 11 月 11 日（日）

場所：宮古島市総合博物館・特別展示室

備考：博物館への入館料を必要とします。

【関連講座】

内　容：「国仲元島遺跡・上地村番所前遺跡の発掘調査の概要」　久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

日　時：10 月 28 日（日）　午後 2 時～ 4 時

場　所：宮古島市総合博物館・研修室

問合せ先：生涯学習振興課（77-4947）

展示パンフレット

【先史時代（無土器期）】

アラフ遺跡（城辺字新城）

【グスク時代】

松原遺物散布地（平良字松原）

国仲元島遺跡（伊良部字国仲）

忠導氏仲宗根家屋敷跡（平良字東仲宗根）

【近世琉球】

上地村番所前遺跡（下地字上地）

【太平洋戦争時】

荷川取ウプドゥマーリャの特攻艇秘匿壕（平良字荷川取）

国仲美里の壕（伊良部字国仲）

国仲砂川の壕（伊良部字砂川）

戦争遺跡分布調査ー城辺・上野ー

公開活用事業の紹介

本資料の中での時期区分

先史時代（無土器期） 約 2,800 年前～ 1,200 年前

グスク時代：11 世紀後半・12 世紀～ 16 世紀（約 1,000 年前～ 400 年前）

近世琉球：17 世紀～ 19 世紀後半（約 400 年前～約 150 年前）

太平洋戦争時：本書では主に昭和 19 年～ 20 年を対象とした

宮古島の無土器期を代表する遺跡

アラフ遺跡

場　所：宮古島市城辺字新城　　時代：無土器期

調査年：2017 年 3 月　　調査機関：宮古島市教育委員会

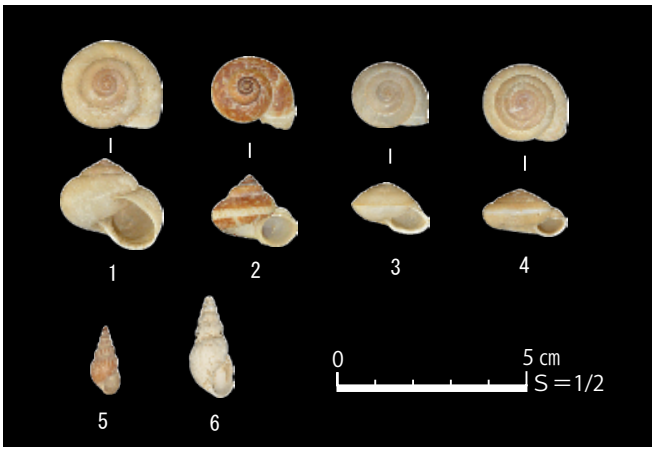
発掘調査成果の概要

アラフ遺跡は、これまでの発掘調査の成果から、約 2,800 年前から 1,800 年前の遺跡であることが分かっています。今回の発掘調査は、新城海岸のトイレ施設整備工事に伴い実施されたもので、遺跡の東端に位置する場所です。今回の調査では、軽石の堆積層や陸産マイマイの出土状況などから、新城海岸の自然環境を考える多くの資料をえることができました。。

発掘調査地近景

砂丘の堆積層。砂層の中には、形や色の異なる軽石が多く含まれる層が複数確認されました。

発掘作業風景



砂層から出土した陸産貝。

1: オキナワウスカワマイマイ、2: ミヤコヤマタニシ、
3: サキシマヒシマイマイ、4：アカマイマイ、5～6：トウガタカワニナ科

11 世紀後半・12 世紀を開始期とする松原の集落遺跡

松原遺物散布地

場　所：宮古島市平良字松原
時代：11 世紀後半・12 世紀～ 16 世紀
調査年：2018 年 7 月～ 8 月
調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

松原遺物散布地は、これまで土器などの遺物が散布している状況が確認されているものの、その性格については詳しく分かっていない遺跡でした。しかし、今回の発掘調査では 1 基の掘立柱建物跡と、1 基の土壙墓が発見され、人が生活を行っていた集落遺跡であることが分かりました。

遺跡の年代としては、15 ～ 16 世紀の資料が多く、17・18 世紀代の資料もみられますが、11 世紀後半から 12 世紀の資料である中国産の白磁玉縁碗が出土した他、13 世紀後半の浦口窯白磁なども出土しています。このことからグスク時代の初期という非常に古い時期から人がこの場所で生活していたことが分かりました。放射性炭素年代測定の結果から、埋葬された人骨の年代は 15 世紀代の人骨で、未成人の女性であることが分かっています。

発掘作業風景

遺跡の位置

土層壁面　＊土の堆積状況

松原遺物散布地の土の堆積は、以下の 3 つの層に分かれます。

1 層：現在の表土層
2 層：11 世紀後半・12 世紀～ 16 世紀のグスク時代の生活層
3 層：地山の赤土層

＊地山とは、本来の自然堆積層で、人の生活が確認されない基盤層。

人の生活の跡の発見

第 3 層の赤土の層には、人がこの場所で生活をしていた痕跡として次のようなものが確認されました。

・掘立柱建物跡　1 基

黒線で示された部分

・埋葬人骨　1 体

黄色線で示された丸の部分

掘立柱建物跡

柱の穴の配置から、1 基の建物跡が確認されました。建物は、調査区の外にも広がっている可能性がありますが、少なくとも 14 本の柱穴が確認され長方形の形をしていることがみてとれます。

＊白い糸が建物の形を示しています。

＊掘立柱建物跡とは、柱を使って建てられた建物の跡のことです。

埋葬人骨

人骨は、土を掘って埋葬されており、体は横向きで、足を折り曲げた状態で埋葬されています

出土遺物　1・2：白磁玉縁碗（11c 後半～ 12c）、3 ～ 5：白磁閩清窯・浦口窯（13c 後半～ 14c 前半）、6：カムィヤキ（11c 後半～ 13c）、7 ～ 9：青磁（14c ～ 16c）、10：中国産褐釉陶器（13c ～ 15c）、11 ～ 13：沖縄産陶器（17c ～ 18c）　*c は世紀を示す略語です。

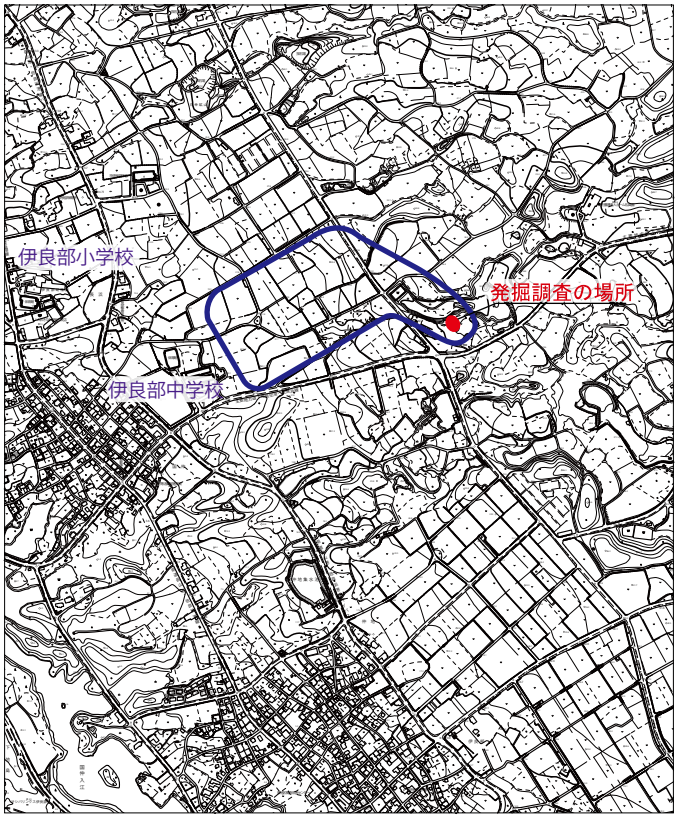
15 ～ 16 世紀の集落遺跡

国仲元島遺跡

場　所：宮古島市伊良部字国仲
時代：グスク時代 (15 ～ 16 世紀)
調査年：2017 年 1 月～ 3 月
調査機関：宮古島市教育委員会

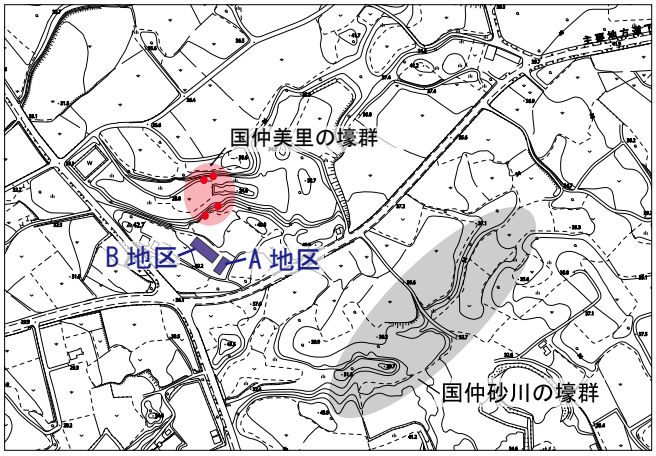
発掘調査成果の概要

国仲元島遺跡の発掘調査では、B 地区の北側でグスク時代の良好な生活層が確認されました。また、調査地内の畑の石積からも多くの陶磁器や土器、 食料の骨、 貝などが採集されています。 出土した陶磁器の年代としては、 古いもので 13 世紀から 14 世紀の資料も確認されますが、 15 世紀から 16 世紀の資料が主体をなしています。 出土した中国産の陶磁器からは、 復元された資料も数多くえられ、伊良部島の集落の始まりを考える上で貴重な成果をえることができました。



：今回の発掘調査地
：国仲元島遺跡の範囲

発掘調査の位置図
今回の発掘調査によって、従来の国仲元島遺跡の範囲よりも東側に遺跡が広がっていることが確認されました。



調査区位置図（青字の部分 ）

発掘作業風景

調査区の周辺部からも多くの遺物が採取されました。

調査区 B の北側ではグスク時代（15 ～ 16 世紀）の堆積層が良好な状態で確認され、多くの陶磁器や土器、貝、骨などの資料が出土しました。

中国産褐釉陶器の出土状況

復元された中国産陶磁器
15 ～ 16 世紀の青磁、中国産褐釉陶器が多く出土しています。

仲宗根豊見親を祖とする仲宗根家の屋敷跡

忠導氏仲宗根家屋敷跡

場　所：宮古島市平良字東仲宗根　　時代：グスク時代～近世

調査年：2017 ～ 2018 年度　　調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

忠導氏仲宗根家は、 仲宗根豊見親を祖とする宮古島を代表する士族の家系です。 現在でも、 その屋敷跡の敷地が残されており、敷地内には国の登録文化財（名勝）「旧仲宗根家の庭園」があります。

発掘調査は、 この屋敷跡の埋蔵文化財の確認調査として行っており、 2017 年度から開始して、 現在も定期的に発掘調査を実施しております。 発掘調査では、 グスク時代の中国産の陶磁器や、 宮古島産の土器、 食料とされた貝類や動物骨など様々な資料がえられており、 この地にグスク時代の頃より人々が生活していた状況が確認されています。

遺構検出状況

旧仲宗根家庭園

景徳鎮系の青花（15 世紀後半）出土状況

下地字上地の近世集落遺跡

上地村番所前遺跡

場　所：宮古島市下地字上地
調査年：2017 年 5 ～ 6 月
時代：グスク時代～近世
調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

上地村番所前遺跡は、 文化財の確認調査によって新発見された遺跡で、 現在の上地構造改善センター (上地公民館) の北側に位置する遺跡です。 発掘調査では、 15 ～ 16 世紀のグスク時代の焼物なども出土しますが、 大部分は 17 世紀から 18 世紀の近世の焼物などが占めています。 特に沖縄産の無釉陶器や施釉陶器が多く、 その陶器を模倣してつくったと考えられる宮古島産の土器も出土しています。 宮古島の近世の集落遺跡を考えるうえで貴重な成果がえられました。

発掘調査地近景　＊右奥にみえるのが上地公民館

完掘状況　複数の堀込や溝跡が確認されました。

発掘作業風景

遺物出土状況　＊沖縄産の陶器が出土しています。

旧日本陸軍の構築した特攻艇を隠すための壕群

荷川取ウプドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群

場　所：宮古島市平良字荷川取
時代：太平洋戦争時
調査年：2017 年 4 ～ 5 月
調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

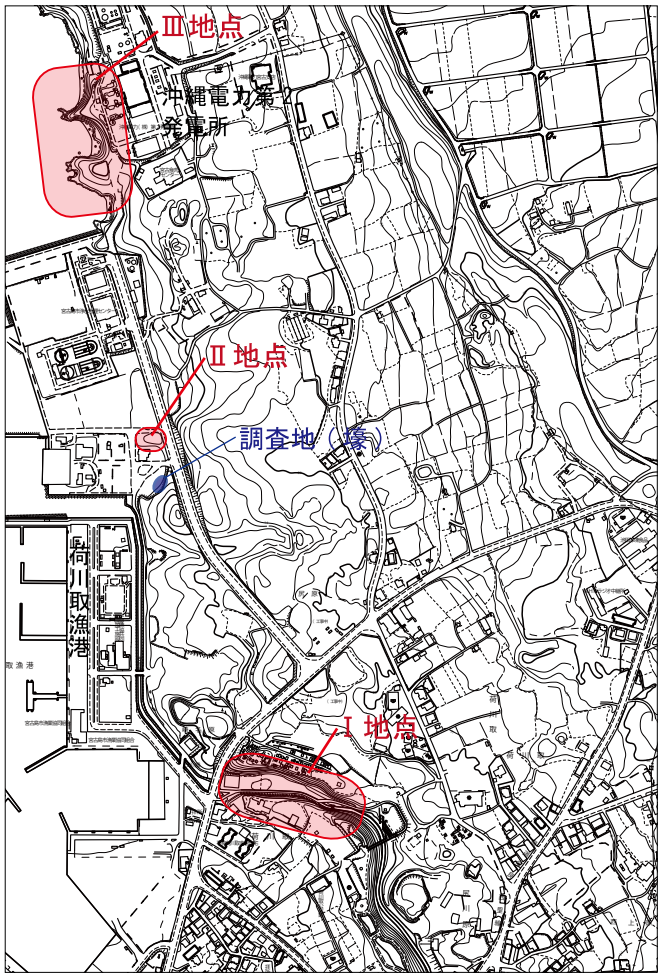
荷川取ウプドゥマーリャの特攻艇秘匿壕群は、大きくⅠ～Ⅲの 3 つの地点に分かれており、今回調査を行ったのはⅡ地点の 2 つの壕です。2 つの壕は、特攻艇を隠すための壕で、戦史資料などから海上挺身基地第 4 大隊と呼ばれる部隊によって構築されたと考えられます。そして、実際に特攻艇に乗り込み出撃する部隊は、海上挺身第 4 戦隊と呼ばれる部隊で、昭和 20 年 1 月から 2 月にかけて宮古島へ到着し、実際に特攻艇を格納し出撃のための訓練などを行っていました。

壕 1 は、壕口が南を向き、全長は 14.0m で、壕内は柱と梁で補強されていたと考えられ、木材をつなぎ合わせるカスガイが 1 点出土しています。

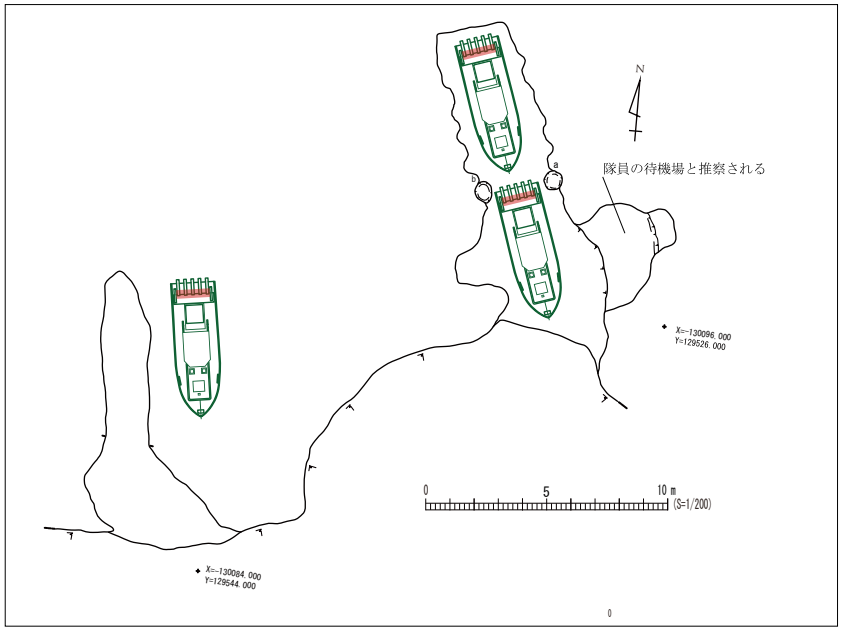
壕 2 も壕口は南を向き、壕口の幅は 4.2m、高さ 2.0m で全長で、壕 1 に比べると小さい壕です。

元陸軍海上挺身第 4 戦隊駐屯地碑 ＊Ⅰ地区に建立

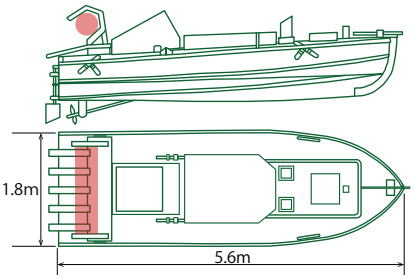
調査した 2 つの壕の近景　＊右を壕 1、左を壕 2 とした



調査地の位置図



陸軍水上特攻艇「マルレ」



ベニヤ製
全　　速：23-25 ノット (42.5-46.3 ㎞ / h)
爆　　雷：250 kg

帝国陸軍が設計製造した特攻艇
当初は敵船舶に接近し爆雷を投下し離脱する目的で設計された為、艇後部に爆雷が設置されているが、体当たりでの攻撃が技術が必要なく効果があるとのことで体当たり攻撃が採用されることになりました。

壕の中に秘匿された特攻艇は、通称マルレとよばれ、その舟の規格と比較した場合、壕 1 には最大で 2 基を格納することができ、隊員が待機していた考えられる場所もみられます。一方、壕 2 には、舟を格納することができず、避難を目的とした壕と考えられます。

カスガイ
壕 1 から出土し、柱と梁をつなぐために使用されたと考えられます。

壕 1 の壕口部分〔壕口の幅は約 4.8m、高さ 2.5m〕

壕 1 の壕内部〔柱を設置するために、壁が半円形に掘り込まれており、左右対称に 5 カ所確認されます〕

壕 2 の壕口部分〔壕 1、2 とも琉球石灰岩を掘り込んで構築されています〕

壕 2 の壕内部〔壕の奥側は、幅が 1.6m、高さ 1.5m と狭まった形態をしています〕

独立混成第 59 旅団に関連する壕群

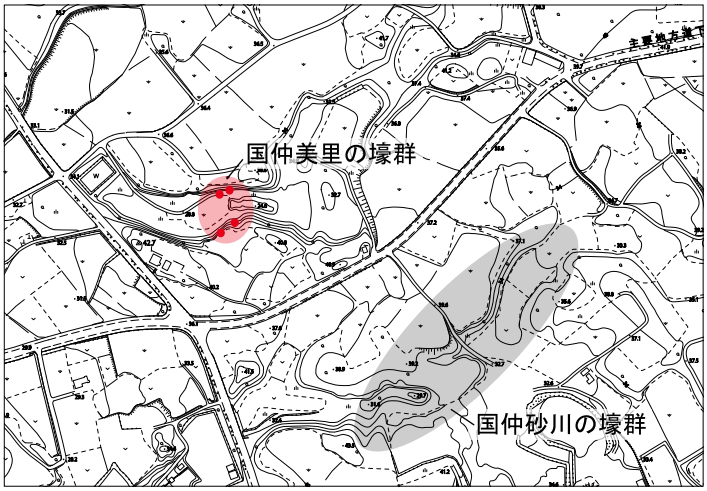
国仲美里の壕群

場　所：宮古島市伊良部字国仲
時代：太平洋戦争時
調査年：2017 年 1 月～ 3 月
調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

国仲美里の壕群は、 全体で 4 つの壕から形成されます。 小規模な谷地形の中腹部や、 崖下部に壕を掘り込んで構築しています。壕 1 以外は小規模な壕であり、緊急避難時に使用したと考えられます。壕 1 は、 3 つの壕口が連結しており、 その平面形態は Y 字型に近い形をしています。 壕の中には、缶詰や陶器などの道具のほか、 灯り取りの痕が複数確認されます。 また、 スロープ状の階段や、 脇部屋のほか、丁寧な造りの直線的な通路も構築されていることから、部隊の中でも一定の役割（機能）をもった壕であることが推察されます。 近接する国仲砂川の壕と同様に独立混成第 59 旅団に関連する壕と考えられます。

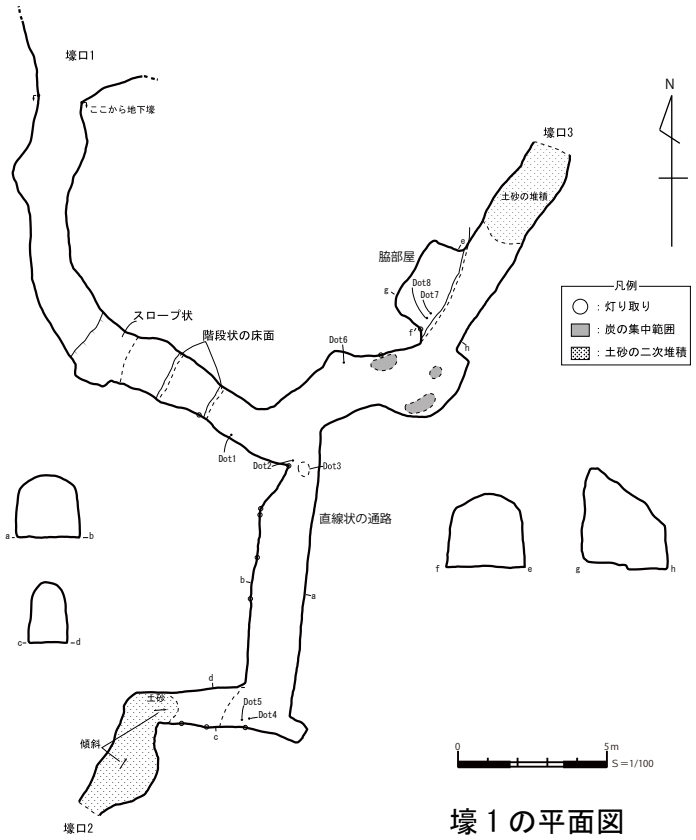
壕 1 の壕口 1（幅 1.6m、現況の高さ 1.3m）



壕位置図　＊国仲元島遺跡の北側の谷部に位置する

壕 2 の壕口（幅 0.7m、高さ 1.2m。石灰岩の崖面の中腹部に構築されており、その崖下に壕 3 が位置する。

壕 3 の壕口（幅 1.2m、高さ 0.5m）
地下にむかって掘られ、地表面からの高低差は 1.5m で、奥行きは約 6.0m。



壕１の平面図

直線上の通路部分。断面が逆Ｕの字型をし、床面は非常に平坦につくる

壁から天井部分が黒ずんでいるのは、灯り取りの煤が付着したため

壕１から出土した道具
缶詰や缶詰を２次利用した灯り取りなどが出土する。

壕口３の近くで確認された脇部屋（写真の左側）

壕２の内部。地下へ向かって掘り下げられる。

壕４の壕口部分（幅1.0m、高さ1.15m）

独立混成第 59 旅団に関連する野戦重火器秘匿壕

国仲砂川の壕群

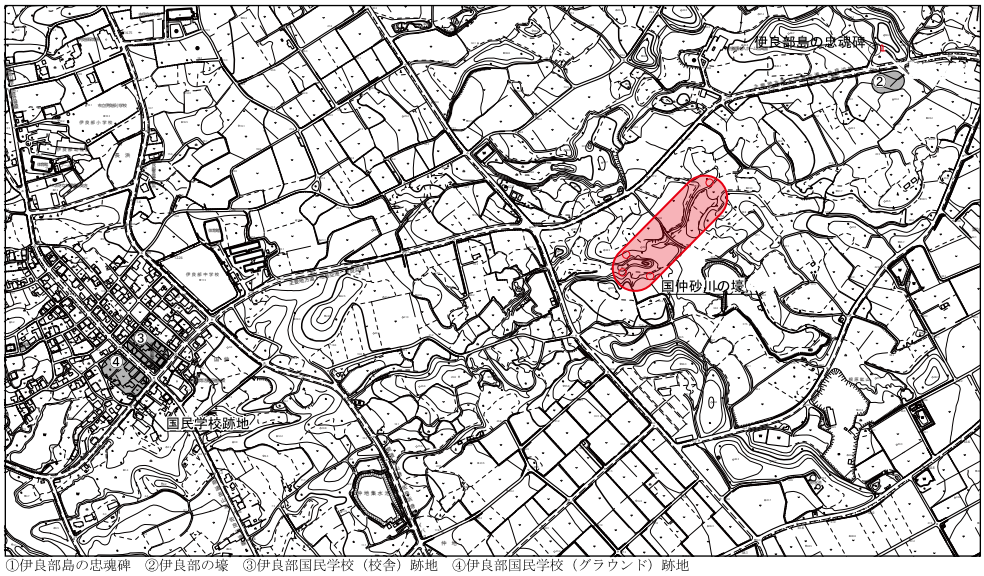
場　所：宮古島市伊良部字国仲　　時代：太平洋戦争時

調査年：2016 年 8 月　　調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

国仲砂川の壕は、伊良部字国仲のほ場整備工事で新発見された戦争遺跡で、宮古島市教育委員会によって記録・保存のための発掘調査が実施されました。壕は全体で 4 基確認されていますが、その内の 3 基は、壕の入口部分が三角形の形をしています。これは、榴弾砲とよばれる野戦重火器の形態にあわせて、壕の形を三角形にしているものと考えられ、戦時中はこの 3 つの壕に榴弾砲を隠していたことが推察されます。もう 1 つの壕は、直線的な形態をしており、緊急避難用の壕として利用されたと考えられます。

周辺遺跡－忠魂碑－



①伊良部島の忠魂碑　②伊良部の壕　③伊良部国民学校（校舎）跡地　④伊良部国民学校（グラウンド）跡地

壕 1 の壕口部分

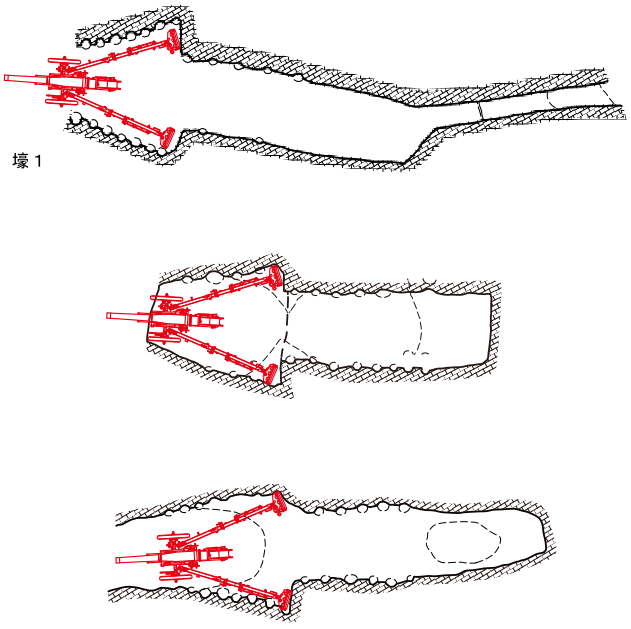
壕 1 の壕内部

壕 3 の壕口

壕 4 の内部

壕 4 の内部・柱跡

壕 2 の内部　＊直線的な構造をなす。



壕 1・3・4 の平面図に 96 式 １５糎榴弾砲を同じ縮尺で配置した場合、榴弾砲のサイズと壕の規格がほぼ一致します。宮古島市内の類似した壕としては、下里添の野戦重火器秘匿壕群があります。

96 式 15 糎榴弾砲（西原町中央公民館展示）

砲身：口径 149.1 ミリ，全長約 3.5 メートル

重量 1,388 キロ

最大射程：11,900 メートル

戦争遺跡分布調査 - 城辺・上野 -

場　所：宮古島市城辺地区・上野地区　　時代：太平洋戦争時

調査年：2017 年 4 月～ 2018 年 3 月　　調査機関：宮古島市教育委員会

発掘調査成果の概要

近年、ほ場整備工事などに伴い、新規に発見される戦争遺跡が増加傾向にあることから、宮古島市教育委員会では、平成 29(2017) 年度から平成 31(2019) 年度までの 3 ヵ年計画で、宮古島市内の戦争遺跡の分布調査を開始しました。2017年度は、城辺地区と上野地区を対象に調査を行い、城辺地区では39の新発見の壕を含む64の戦争遺跡が確認され、上野地区では 8 つの新発見の壕を含む19の戦争遺跡が確認されました。

【城辺地区の戦争遺跡の概要】

城辺地区は、標高の高い丘陵の嶺が複数みられます。壕は、このような丘陵を掘り込んで構築することが多いことから、城辺地区では、他の地区に比べて多くの戦争遺跡が確認されたと考えられます。また、非常に多くの日本軍の部隊が展開していたことも聞き取り調査などから分かってきました。

西花切の壕群　〔７つの壕から成り、写真の壕は、山砲兵第 28 連隊第 7 中隊に関連する壕です〕

西川底の壕群　〔5 基の壕からなり、戦車第 27 連隊第 3 中隊の戦車を秘匿した壕群と考えられます。壕の特徴として、羨道を有し、壕内部は幅３ｍ、奥行きは 8.5 ～ 15.8ｍです〕

佐事川の陣地壕　〔2 つの壕口を有したコの字型になっており、内部は幅 90 ㎝、高さ 1.8m ほどです。特徴としては排水のための側溝を設けています〕

【上野地区の戦争遺跡の概要】

上野地区の戦争遺跡の数は、城辺地区に比べ少ないですが、第 28 師団の本部が置かれた野原岳には 40 もの壕が密集しています。また、今回新発見された戦争遺跡として、新里から宮国の海岸線沿いに多くの銃眼が構築されていたことや、関連する 2 つの壕の総延長が 150m 以上にも達する歩兵第 3 連隊の本部壕と推定されるナベアマ原の壕群など、多くの成果をえることができました。

ウズラ嶺の陣地壕群　〔5 基の壕で構成され、15 糎榴弾砲を秘匿可能な形態や、倉庫として使用されたと考えられる壕など、様々です。

新里の機関銃壕群　〔自然の岩を利用して機関銃が設置できるように構築されています。この海岸域は敵の上陸地点と想定され、水際にて敵を殲滅するために数多く構築されたと考えられます〕

高山原の壕群　〔２つの壕からなり、前面には廃土で盛土して目隠しをしています。この地域には歩兵第 3 聯隊第 2 大隊が布陣していたことが戦史資料より確認されており、この部隊に関連する壕と考えられます〕

東青原の壕　〔歩兵第 3 聯隊の戦史資料から機関銃中隊の 1 小隊が配備されており、この部隊が布陣した壕と考えられます〕

ナベアマ原の壕群　〔陸軍飛行場戦闘指揮所に隣接し、壕内は複数の小部屋を有し、将校の体験談等から歩兵第 3 聯隊の連隊本部壕と考えられます〕

資料の再整理と文化講座・シンポジウムの開催

公開活用事業

公開活用事業の概要

地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業（以下、公開活用事業）では、これまでに発掘調査された資料の台帳作成（データベース化）や、再整理（資料の再収納、復元作業）をとおして、広く資料の活用を図ることを目的としています。

◂文化財資料室

城辺字福里所在（旧城辺保健センター）。発掘調査で出土した資料の整理作業や保管を行っています。

ビジュアル版『発掘調査にみる宮古の歴史』

これまでの遺跡の発掘調査の成果を写真などを多く用いて、分かりやすくまとめた冊子になっています。

出土遺物の再収納作業風景

過去の発掘調査出土資料の種類や出土位置などを確認しながら、コンテナに再収納していきます

台帳作成（データベース化）

再収納した遺物コンテナ等の情報を台帳作成し、資料活用の利便性を高めていきます。

資料の再整理（復元作業）風景

破損部分を石膏で復元していきます。

復元された外間遺跡の発掘調査資料

現在は、宮古島市総合博物館第１展示室で展示しています。

文化講座の開催

これまでの宮古島市内での発掘調査の成果から明らかになってきた宮古島の歴史について、県内外の各分野の専門研究者を招き、文化講座・シンポジウムの開催を行っております。あわせて、発掘調査資料の展示、解説も実施しており、過去の調査資料をみていただく場として活用を図っております。これまでの講座等の内容については下記のとおりです。

シンポジウムの開催風景（平成 29 年度第 2 回）

【平成 28 年度】

第 1 回 文化講座「サンゴ島に生き、文化を築いた人々～浦底遺跡から考える新しい無土器期文化像～」
講師：山極海嗣（琉球大学）

第 2 回 文化講座「グスク時代に拓かれた新たな交易ルート～出土陶磁器から考えるグスク時代の物流～」
講師：宮城弘樹（沖縄国際大学講師）

第 3 回 文化講座「宮古島のグスク時代農耕はどの様なものだったか？」
講師：千田寛之（株式会社文化財サービス）

第 4 回 文化講座「先島の人類史解明を目指して－宮古島の人骨調査から－」
講師：土肥直美（元琉球大学医学部教授）

第 5 回 文化講座「遺跡から見えてきた自然災害の痕跡－先島諸島を中心にして－」
講師：山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）

【平成 29 年度】

第 1 回 シンポジウム「戦争遺跡の可能性－保存・整備・活用の視点から－」
報告者：山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）、保久盛陽（南風原町教育委員会）
久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

第 2 回 シンポジウム「浦底遺跡の発掘調査に見る無土器期研究の新展開」
報告者：江上幹幸（元沖縄国際大学教授）、島袋綾野（石垣市教育委員会）、
山極海嗣（琉球大学）、久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
コーディネーター：下地和宏（宮古島市市史編さん委員長）

第 3 回 文化講座「中国産陶磁器からみるグスク時代東アジア海域の交易」
講師：田中克子（アジア水中考古学研究所）、瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）

第 4 回 文化講座「化石で探る宮古島のほ乳類の移り変わりと人類渡来問題」
講師：河村愛（富山大学）

第 5 回 文化講座「沖縄最古の文化への探求－新発見された県内最古級の遺跡－」
講師：仲座久宜（沖縄県立埋蔵文化財センター）、山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）
横尾昌樹（うるま市教育委員会）、久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

＊講師の所属等については、当時のものです。

「発掘調査速報展 2016～2017 年度」
宮古島市総合博物館にて

宮古毎日新聞

2018年（平成30年）10月27日　土曜日

発掘調査出土品を展示

市立総合博物館

宮古の歴史の一部物語る

宮古島市立総合博物館（宮國恵良館長）で26日、市教育委員会生涯学習振興課主催の2018年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の第2回として「発掘調査速報展、2016～17年度」が始まった。来月11日まで。同展には16、17年度に行われた発掘調査の出土品約200点が展示され、来館者らは興味深げに閲覧していた。

展示品を興味深げに閲覧する来館者ら＝26日、市総合博物館

市内では両年度に19カ所の発掘調査が行われているが、最終的に報告書として公表されるには1～2年の時間が掛かるため、この速報展で出土品を市民や観光客らに公表することとなった。

展示物は戦跡や先史時代（無土器時代）のアラフ遺跡や、グスク時代（12～16世紀）の松原遺物散布地、国仲元島遺跡などからの出土品が展示され、宮古島の歴史の一部を見ることができる。

松原遺物散布地の調査では、11世紀後半から12世紀という非常に古い時期から松原地域で、人が生活していたことが確認できる出土品が展示されている。

宮古新報

2018年（平成30年）10月27日　土曜日

宮古の歴史解き明かす

松原遺物散布地など発掘調査速報展

地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回「発掘調査速報展～2016年度～17年度」（主催・宮古島市教育委員会）が、26日から市総合博物館特別展示室で始まった。11月11日まで。松原遺物散布地や国仲元島遺跡、アラフ遺跡、上地村番所跡遺跡などから出た土器など遺物を展示。同委員会では「松原遺物散布地からは11世紀後半から12世紀という非常に古い時期から松原地域で人が生活していたことが確認された。このように遺跡の発掘調査は宮古の歴史を解き明かす上での多くの情報を得ることが出来る」として来館を呼びかけている＝写真＝。

松原遺物散布地は、これまで土器などは確認されているもののその性格については詳しく分かっていない遺跡だった。今回の発掘調査では1基の掘立柱建物跡と1基の土壙墓が発見され、人が生活を行っていた集落遺跡であることが分かったという。

成果としては11世紀後半～12世紀の資料である中国産の白磁玉縁碗が出土したほか13世紀後半の浦口窯白磁なども出土したことから、グスク時代初期の非常に古い時期から人が生活していたことが分かったと強調している。

同展期間中のあす28日午後2時から、総合博物館研修室で関連講座「国仲元島遺跡・上地村番所前遺跡の発掘調査の概要」が行われる。講師は同委員会の久貝弥嗣さん。問い合わせは同委員会生涯学習振興課（77・4947）。

平成三十年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業文化講座第３回

「イノシシのいた宮古島の歴史
－発掘資料からみた宮古島のくらしとイノシシ－」

写真は、友利元島遺跡出土の
動物骨の分析作業風景

【講師紹介】

菅原　広史（すがわら ひろし）

浦添市教育委員会文化課
博士（早稲田大学大学院）。動物考古学を専門とする。

【講座の概要】

これまで、宮古島市内の友利元島遺跡、ミヌズマ遺跡、金志川豊見親屋敷跡出土の動物遺体の分析を行っており、宮古島の遺跡から出土する動物骨から分かってきた、人と動物（特にイノシシ）の関わりについて報告が行われます。

日時：2 月 9 日（土）午後 2 時～ 4 時
場所：宮古島市総合博物館研修室
申し込み不要。入場無料。
問合せ先：宮古島市教育委員会・生涯学習振興課
TEL：0980-77-4947

平成30年度地域の特色ある埋蔵文化
財公開活用事業　第3回文化講座

平成31年2月9日（土）
於：宮古島市総合博物館

イノシシのいた宮古島の遺跡

―発掘資料からみた宮古島の暮らしとイノシシ―

菅原広史（浦添市教育委員会）

動物考古学とは

- 「人間が動物をどのように扱っていたかということを通して人間の生活を考える考古学の一分野」（西本・松井 1999）

・遺跡から出土する動物の痕跡とは
魚類・両生類・鳥類・爬虫類・哺乳類の骨、
貝殻、昆虫の羽・卵、など　＝「動物遺体」と呼ぶ
→「動物界全体」を対象とすることができる
※ただし、骨や貝殻・卵などが、どんな動物なのか理解するためには、生物学的な知識が必要となる

・動物遺体が出土していれば、どの時代の資料も対象にできる

講座のテーマ

- （1）動物考古学とは何か
- （2）沖縄諸島におけるイノシシからみた生業史
- （3）宮古島の遺跡から出土する動物骨
- （4）動物遺体分析からみた宮古島の動物利用史とくらし

動物考古学から分かること

- ヒトの生活と生業の復元
  人間の手により遺跡にもたらされた動物遺体からの復元
  ①狩猟・漁撈活動により食料として持ち込まれた動物
  ②家畜など、ヒトが生活のため飼育していた動物
  ③愛玩などの目的で、ヒトと共に生活していた動物

- 古環境の復元
  自然の一因として、動物がどのような環境で生息するのかを知ることで、当時の自然（古環境）や人間の生活環境を特定する

（1）動物考古学とは何か

動物考古学におけるイノシシとブタ

ニホンイノシシとリュウキュウイノシシの剥製（沖縄県立博物館・美術館2●●●）

イノシシとは

- アジアからヨーロッパまでユーラシア大陸に広く分布
- 低山から平地の森林・草原などに生息
- 植物・小動物・昆虫などを食べる、雑食性
- 鋭い嗅覚・走力・泳力を持つ
- 日本では東日本・西日本・琉球列島に生息
  ニホンイノシシ　*Sus scrofa leucomystax*
  リュウキュウイノシシ　*Sus scrofa riukiuanus*

イノシシとブタ：骨の違い

左：イノシシ　右：ブタ（沖縄県立博物館・美術館2017）

リュウキュウイノシシ

- 琉球列島に生息する野生のイノシシ
- 現在では、奄美諸島・沖縄本島北部（ヤンバル）・石垣島・西表島に分布
- 現在の宮古島には自然に生息していない
- 九州以北に生息するニホンイノシシや、中国大陸に生息するイノシシに比べオス・メスともに小型であることが特徴

イノシシとブタの頭蓋骨の違い

大宜見村で採集したイノシシ

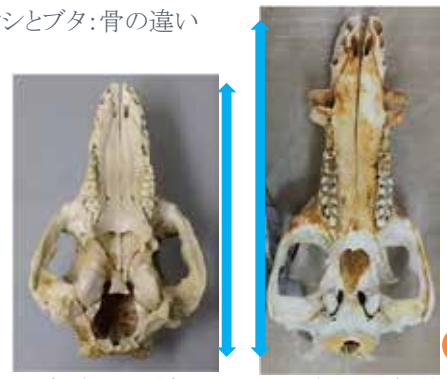
とあるレストランで丸焼きにされたブタ

- イノシシとブタをよく比べてみると、形に違いがあることが分かる。特にブタは頭全体が短く、特に鼻先が短い様子が観察される。

イノシシとブタ

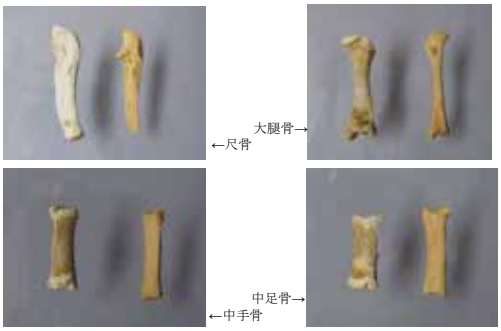
- 生物学上イノシシとブタは「同じ生物」
  イノシシ　*Sus scrofa*
  ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*（家畜化されたイノシシ）
  →交配も可能で、その結果生まれたものはイノブタと呼ばれる
- イノシシを家畜化・品種改良することで姿形が変化
  短頭化、短足化、胴長
- 姿形の変化に伴い、骨の形質も変化
  頭の骨が短くなる・太くなる、手足の骨が短くなる、
  骨質がもろくなる

イノシシとブタ：骨の違い



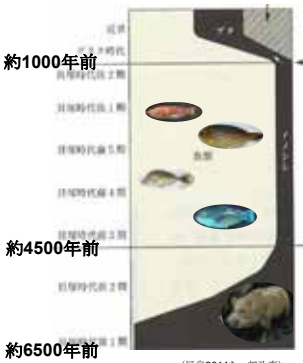
左：ブタ、右イノシシ　（ブタの顎がイノシシよりも短い様子が窺える）

イノシシとブタの骨の違い



- イノシシの長さに比べ、ブタは短く太い形に変化している
（写真はいずれも左が現生のブタ、右が友利元島遺跡出土のイノシシ）

イノシシから見た沖縄諸島の動物利用史



ウシ・ブタ・ウマの家畜の飼育と漁撈を行う時代
イノシシは僅かに利用していた

主にサンゴ礁で漁撈を行って食料を獲得する時代
イノシシも全くとらないわけではないが少量

主にイノシシを狩って食料にすることを生活の中心とした時代

（樋泉2014を一部改変）

イノシシの骨とブタの骨

- イノシシが家畜化されることで、骨の形も徐々に変化
- 先史時代のイノシシ骨と現代のブタ骨は明確に形の違いが判別できる
- ただし、イノシシを家畜化して何世代でどれだけの形態変化を起こすかは不明

→形態変化したものが、野生と交配したとしたら？

↓

野生から家畜化され骨の形が変化する過程で、どこまでがイノシシでどこからがブタかの明確な線引きは非常に難しい

(3) 宮古島の遺跡から出土する動物骨

(2) 沖縄諸島におけるイノシシからみた生業史

イノシシのいない宮古島に イノシシのいた歴史

各地で発見される化石から、琉球列島には約3万7000年前から2万6千年前の間にイノシシが登場したと考えられる。

このころのイノシシは現在のイノシシよりも大きかったことがわかっており、宮古島でもピンザアブなどで旧石器時代に相当する時期の遺跡から見つかっている。

沖縄県立博物館・美術館2017

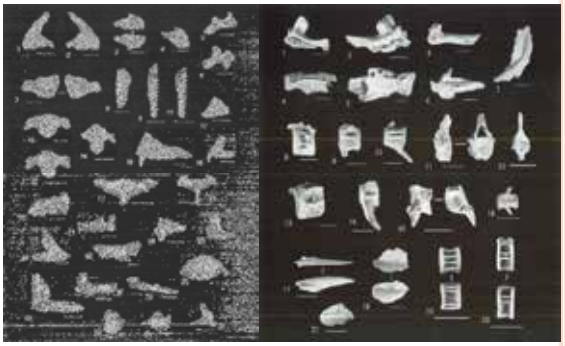
宮古島における脊椎動物遺体の出土遺跡

- アラフ遺跡（城辺）
- 長墓遺跡（平良）
- **浦底遺跡（城辺）**
- **友利元島遺跡（城辺）**
- **ミヌズマ遺跡（平良）**
- 金志川遺跡（城辺）
- 砂川元島遺跡（城辺）
- 尻川遺跡（平良）
- 外間遺跡（平良）
- 尻並遺跡（平良）

今回、紹介する無土器期からグスク時代の遺跡

無土器期前半における脊椎動物遺体

長墓遺跡出土の魚骨



（名島2013）

【遺跡位置図】

長墓遺跡の魚骨分類群の組成

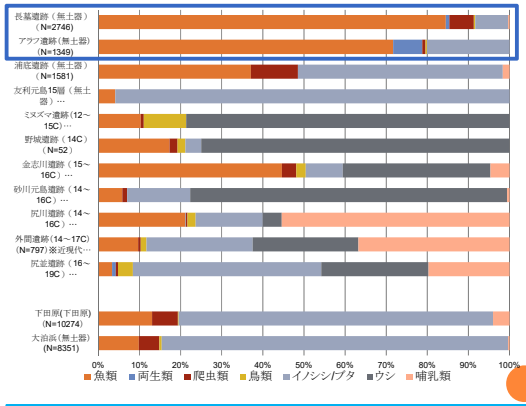
（名島2013）

無土器期前半期の遺跡出土の動物遺体

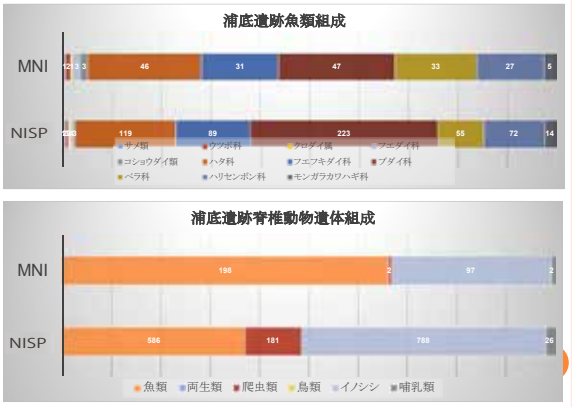
長墓遺跡とアラフ遺跡

無土器期前半の動物利用を考える

- 長墓遺跡・アラフ遺跡の動物利用
  両遺跡共にサンゴ礁域に生息する魚類の骨が中心
  7～8割が魚類で、ブダイ科を好んでとると同時にシャコガイやチョウセンサザエなどの貝類を食料とした生活を営んでいた
- 海に面した場所に立地する遺跡として理解しやすい
- イノシシはいないことは無いが少数。



無土器期前半期は宮古島の他の時代に比べ、魚類の利用が圧倒的に多い時代



無土器期後半期の遺跡出土の動物遺体

浦底遺跡と友利元島遺跡

浦底遺跡の脊椎動物遺体にみる特徴

- 魚類はブダイ科・ハタ科が組成の1位と2位を占めることから、主にリーフを利用した漁撈活動
- 魚類と哺乳類（イノシシ）が同程度の利用頻度
  →前述の無土器期前半期と比べイノシシの利用が高くなってくる
- イノシシ骨の出土傾向
  ・イノシシは概ね全身の部位を含む
  ・雄 ： 雌 ＝ 66 ： 54 （遊離した犬歯、左右計）
  ・リュウキュウイノシシに比べると、骨長計測値が大きい個体がみられる

浦底遺跡出土の脊椎動物遺体の様相（暫定）

- 同定された動物

魚　類 （NISP n=586、MNI n=198）

ブダイ科・ハタ科・フエフキダイ科・ハリセンボン科・ベラ科
サメ類・ウツボ科・フエダイ科・クロダイ属・コショウダイ類
→リーフ及びイノーでの採取活動で得られる魚類

哺乳類 （NISP n=813、MNI n=99）

イノシシ・ジュゴン・クジラ類
→魚類と同等程度の利用頻度を窺わせる出土数

浦底遺跡にみられる大？イノシシ

左：沖縄本島のイノシシ　中：浦底遺跡出土のイノシシ　右：九州のイノシシ

友利元島遺跡における動物遺体の出土様相

第15層が無土器時代の包含層。C14年代測定の結果から5～8世紀に位置づけられる。
遺構：土坑2基
遺物：シャコガイ製貝斧、食料残滓(イノシシ骨、貝類)

- 出土動物骨の大半が無土器時代に比定される「15層」および土坑中からの出土
- 同定された分類群（15層および土坑内出土資料）
  魚　類（NISP：n=71、MNI=15）
  ウツボ科・ハタ科・ブダイ科・ニザダイ科・
  モンガラカワハギ科・アイゴ属
  哺乳類（NISP：n=1659、MNI：n=70）
  イノシシ

無土器期友利元島遺跡の脊椎動物遺体組成の特徴

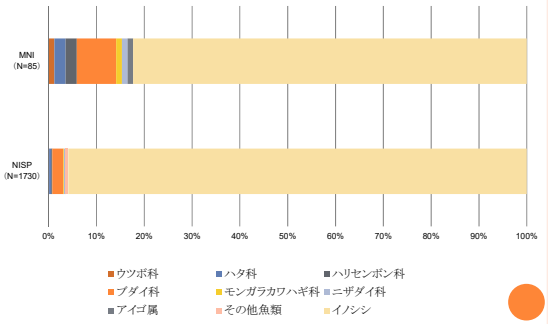
- 魚類はブダイ科を主体とするが全体的に僅少
- 組成の大多数がイノシシで占められる組成
- イノシシ骨の出土傾向
  ・イノシシは概ね全身の部位を含む
  ・雄 ： 雌 ＝ 50 ： 10 （犬歯の数の比率）
  ・四肢骨の骨端が、上腕骨遠位端・橈骨近位端を除く大多数で未癒合
  ・強く進行した咬耗はみられない
  ・高い頻度で認められる打割痕

【友利元島遺跡遠景】

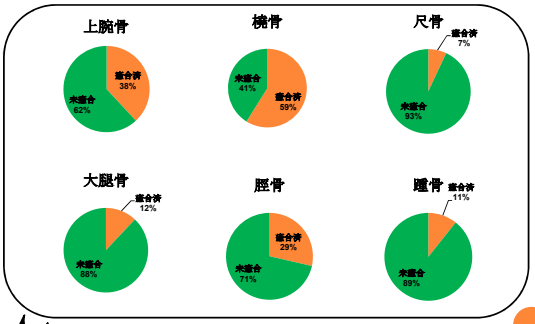
骨端の癒合

- 哺乳類の四肢骨骨端は若いうちは軟骨で繋がっているため、外れる
- 一定の年齢に成長すると一体化する
- 骨によって一体化する年齢が異なる

15層・SK1（無土器期）出土脊椎動物遺体組成



部位別の骨端癒合状況

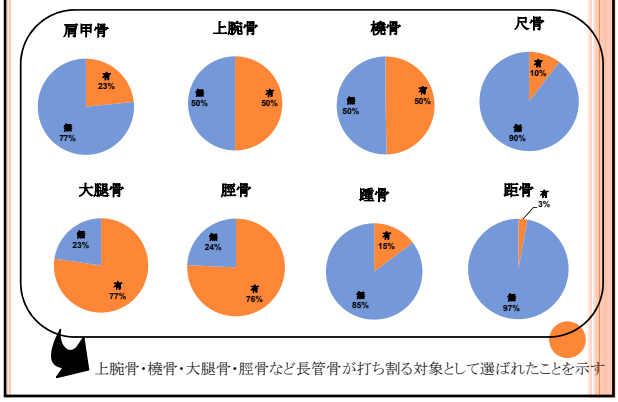


月齢の早い時期に癒合する上腕骨と橈骨で癒合済みが多いが、全体的に見れば、ほとんどが若齢の個体で占められていることを示す

イノシシ骨に観察される傷痕

- 傷痕の大半は骨を割ることを目的とする打割痕
- カットマーク(解体痕)はそれほど認められない
  ※解体していないと考えるわけではなく、
  骨に傷が残らないような解体方法だったと
- 四肢骨の一部の長骨に集中して観察される
- 近位端～骨幹あるいは骨幹～遠位端を残存する状態が多く認められ、骨幹のみが残存する資料が少ない。破面の形状を併せると、いずれの打割痕も骨幹部への加撃から生じたものと判断される

部位別の打割痕等出現率



上腕骨・橈骨・大腿骨・脛骨など長管骨が打ち割る対象として選ばれたことを示す

打ち割られたイノシシの上腕骨

友利元島遺跡の動物遺体にみるくらし

- イノシシを中心とした動物利用は、宮古島の無土器期としては他に例がない
- シャコガイなどサンゴ礁域の貝類が多く出土するが魚骨は少ない

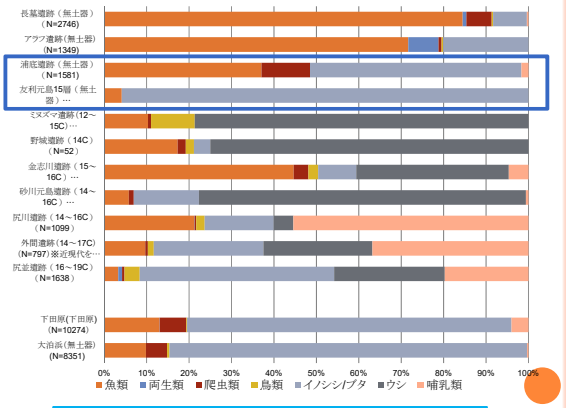
遺跡の目の前の海で貝を採集しているにも拘らず、
魚は採らず、イノシシを主たる食料としている

打ち割られたイノシシの橈骨

友利元島遺跡の動物遺体にみるくらし

- 出土するイノシシは一定年齢以下の個体に集中
  →沖縄諸島におけるグスク時代初期の傾向に類似する
- オスに偏る出土傾向
  →資源管理の意図をもって利用していたと推定される
- 打割痕が認められる部位の偏重と同じ形に打ち割られた傾向から、定型化した打割技術の存在が窺われる
  →高頻度でイノシシを利用・習慣化があったと考え得る

イノシシが飼育されていた可能性を示唆する



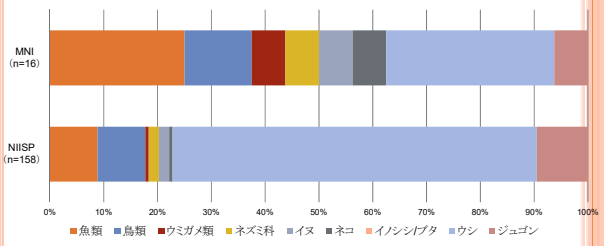
無土器期後半期はイノシシ利用が増えた時代

ミヌズマ遺跡の脊椎動物遺体（グスク時代における出土様相）

無土器期の後の時代の様子

ミヌズマ遺跡の事例

ミヌズマ遺跡の脊椎動物遺体組成



ミヌズマ遺跡の脊椎動物遺体（グスク時代における出土様相）

ミヌズマ遺跡の脊椎動物遺体組成の特徴

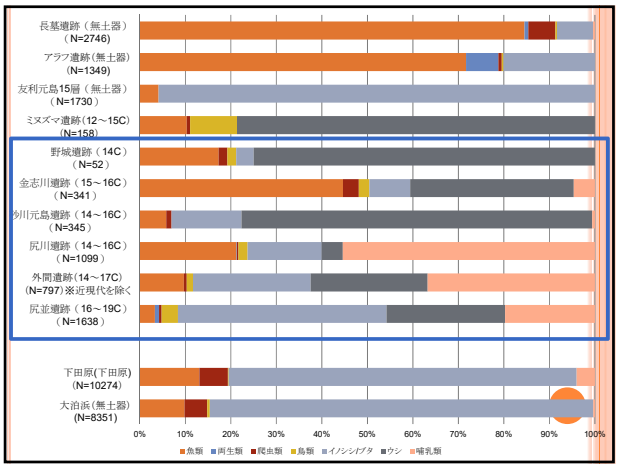
- 魚類は全体的に僅少
- 組成の大多数をウシで占める組成
- イノシシ/ブタの不在
- ウシ骨に関する観察所見など
  - ・角芯から指骨までの部位
  - ・比較的高い頻度のカットマーク・スパイラルフラクチャー
  - ・臼歯の咬耗段階は様々

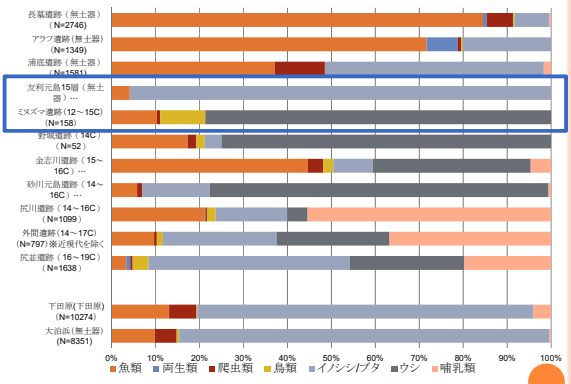
ミヌズマ遺跡の動物利用とくらし

- ウシが多くを占めることで、無土器期の頃とは大きく動物利用の形が変化したのだと考えられる。
  ＝ 家畜の導入により生活に大きな変革が生じた
  ※ただし、家畜が「いつ」「どこから」もたらされたか、現時点で、は不明。

- イノシシが出土しないことは何を意味するのか？

※沖縄諸島では家畜が導入された後も、完全にイノシシの痕跡がなくなることはない
宮古島のイノシシが絶滅？
友利元島遺跡の時代とミヌズマ遺跡の時代の間に「何か」があったことになる





友利元島遺跡とミヌズマ遺跡の極端な動物の違いは、何を示すのだろうか

(4) 動物遺体分析からみた宮古島の動物利用史とくらし

ミヌズマ遺跡以降の動物利用の変化

- 再びイノシシの骨が登場
- ただし、野生のイノシシではなくブタの可能性が高い
- 時代が進むにつれて、イノシシあるいはブタの骨の比率が高まってゆく

一度絶滅したイノシシに代わり、島の外から新たに持ち込まれたブタが徐々に増え、家畜利用の中心的な存在へと変化していった

まとめ：宮古島におけるイノシシとヒトの関わり

- 更新世の頃にイノシシが登場
- 無土器期前半には漁撈と狩猟によるイノシシの利用
- 無土器期後半のイノシシ飼育の可能性
- 無土器期からグスク期における転換
  イノシシの消滅と家畜の導入

検討課題
- 魚類利用からイノシシ利用への変化はなぜ起こったのか？
- イノシシとブタの生物的系統と移入
- 家畜の導入ルート

追記

- 本稿は、平成31年2月9日に実施した宮古島文化講座で掲示使用した資料を、記録集への掲載に当たり加筆・修整を行ったものです。

＜引用・参考文献＞
沖縄県立博物館・美術館2017『イノシシとブタと私たち』
菅原広史2015「宮古島における脊椎動物遺体出土様相の変遷」『いま、宮古島の考古学が面白い！―無土器期からグスク時代への移り変わり―』沖縄考古学会
樋泉岳二2014「脊椎動物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』高宮広土・新里貴之編
名島弥生2013「長墓遺跡出土の魚類遺体」『南嶺の長墓遺跡調査研究Ⅰ ―宮古島の先史時代と近世の遺跡調査報告―』長墓遺跡調査団
西本豊弘・松井章編1999『考古学と動物学』同成社
宮路敦子・丸山真史・松井章2003「アラフ遺跡出土の動物依存体（1）」『アラフ遺跡調査研究Ⅰ―沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告―』アラフ遺跡調査団

菅原広史（浦添市教育委員会）
「イノシシのいた宮古島の遺跡～発掘資料から見た宮古島の暮らしとイノシシ～」

宮古島市総合博物館
2018 年２月９日（土）

2019年（平成31年）2月10日　日曜日

宮古毎日新聞

イノシシ飼育の可能性

菅原さん　友利元島遺跡から考察

市総合博物館文化講座

菅原広史さん

市総合博物館で9日、文化講座が開かれた。講師に招かれた浦添市教育委員会文化財係主任で動物考古学に詳しい菅原広史さんが「イノシシのいた宮古島の遺跡」と題して講演した。菅原さんは5～8世紀の遺跡とされる城辺の友利元島遺跡から数多く出土したイノシシの資料から「イノシシを飼育していた可能性を示唆するもの」と説明した。

講座は2018年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の一環。県内では動物考古学を研究する専門家は少なく、菅原さんの講演は注目されている。

菅原さんは「琉球列島には約3万7000年前から2万6000年前の間にイノシシが登場したと考えられる。この頃のイノシシは現在のイノシシより大きかったことが分かっており、宮古島でもピンザアフなどで旧石器時代にも相当する時期の遺跡から見つかっている」と説明。その上で「氷河期時代に中国から渡って来たと見られる」と推測し、今後の研究で検討していく認識を示した。

市上野地区にあるピンザアフ洞穴からは過去に約2万5800～2万6800年前（旧石器時代）の化石人骨が発見されている。

菅原さんは、特に友利元島遺跡に注目し「イノシシを中心とした動物利用は、宮古島の無土器期としては他に例がない。イノシシを主たる食料としている」と考察した。

2019年（平成31年）2月1日　金曜日
宮古毎日新聞

案内

平成30年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

第3回文化講座「イノシシのいた宮古島の歴史」
―発掘資料からみた宮古島のくらしとイノシシ―

生涯学習振興課長　久貝（くがい）　喜一（きいち）

遺跡の発掘調査では、土器や陶磁器などの昔の人が使用した道具とともに動物の骨も多く出土します。これらの骨の多くは、食料残滓であり、昔の人々の食生活を考える上で重要な資料となります。動物骨の分析からは、動物の種類はもちろん、動物の年齢、体長などを明らかにすることができ、その当時の人々の生業活動や食生活にせまることができます。

宮古島においては、5～8世紀の無土器期の友利元島遺跡のイノシシ骨の分析から、当時の人々がイノシシについて一定の管理を行っていたことが指摘されています。また、12世紀以降のグスク時代においてもウシ、ウマ、ブタなどの家畜が島へ導入された時期に違いがあることなどが指摘されています。

本講座では、遺跡から出土する動物骨の分析をとおした、宮古島におけるヒトと動物（特にイノシシ）の関わり合いについて検討を深めてまいります。宮古島の歴史を考える一つの機会になればと思いますので、ぜひともご参加ください。

記

▽日時・2月9日（土）午後2時～4時
▽場所・宮古島市総合博物館・研修室
▽講師・菅原広史氏（浦添市教育委員会）
▽備考・申し込み不要（参加料無料）
▽問い合わせ先・宮古島市教育委員会生涯学習振興課（77・4947）

平成三十年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第４回文化講座

宮古諸島における十一～十四世紀の集落

【講座の概要】

11 世紀後半、沖縄県内では先史時代が終わりをむかえ、グスク時代という新たな文化が展開していきます。近年、宮古島では、友利元島遺跡やミヌズマ遺跡の発掘調査を皮切りに、松原部落遺物散布地、ティラフグ遺跡などで 11 世紀後半～ 14 世紀にかけての発掘調査成果がえられています。本講座では、これらの調査成果をまとめ、宮古島の集落がどのような形態、文化を有していたのかを考えていきます。

講師：久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

日時：3 月 3 日（日）午前 10 時～正午

場所：働く女性の家・ゆいみなぁ

備考：参加費無料。 申し込み不要

問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課

（0980-77-4947）

写真は、松原部落遺物散布地遺跡の発掘作業風景

宮古諸島における 12 世紀から 14 世紀の集落

久貝　弥嗣 (宮古島市教育委員会)

はじめに

11 世紀の後半以降、宮古諸島を含む沖縄県内の島嶼地域には、様々な文化をもった集団が渡来してくる状況が、発掘調査から出土する資料からみてとることができます。これらの集団は、島 に新たな文化をもたらしますが、島の中ではこれらの文化を独自に発展･展開している様相もみ てとれます。そのため、グスク時代の沖縄といっても、沖縄諸島と宮古諸島とでは異なる要素も 多くみてとれ、多様な地域性をもった文化が展開している状況がみてとれます。

今回の講座では、12 世紀から 14 世紀に時間軸を絞り、これまでの発掘調査から明らかになってきた宮古島の集落の様相について考えていきます。

【12 世紀～ 14 世紀にかけての大きな文化的な画期】

11 世紀後半～ 12 世紀 : 北の九州、沖縄諸島からの交易集団の南下

13 世紀後半～ 14 世紀 : 中国南部からの新たな交易ルート (南島路) の展開

14 世紀後半～ : 琉球－明との朝貢交易の開始

１．11 世紀後半～ 13 世紀中頃の宮古島

11 世紀後半になると、北の博多や沖縄諸島を介在した交易集団が、宮古・八重山諸島までその活動の範囲を広げていきます。発掘調査では、これらの人々によって運びこまれたカムィヤキ、白磁玉縁碗、滑石製石鍋は、沖縄県内全域から出土しています。先史時代まで無土器文化という沖縄諸島と異なる文化を有していた宮古・八重山諸島ですが、11 世紀後半以降は、沖縄諸島と共 通した交易圏域に組み込まれていきます。しかしながら、この時代の宮古島市内の遺跡は少なく、特に 13 世紀代については、具体的にどのような文化を有していたのかは不明な部分が多いといえます。

(1) 宮古島の代表的な遺跡

宮古島市内でも、カムィヤキや、白磁玉縁碗、滑石製石鍋が出土する遺跡は数多くありますが、11 世紀後半～ 12 世紀を主体とする遺跡は非常に少ないです。大部分は 13 世紀後半～ 15 世紀以降を主体とする遺跡から少量出土する場合が多いといえます。しかし、この時から宮古島に、島外か ら島を訪れる人がいたことを示す重要資料です。この時代の代表的な遺跡として、友利元島遺跡、ミヌズマ遺跡、松原部落遺物散布地、パナタガー嶺遺跡などがあり、住屋遺跡等からもこの時代の遺物は出土しています。

(2) この時期の遺跡の特徴

発掘調査の成果からみるこの時期の宮古島の遺跡の特徴について整理してみます。

①カムィヤキ、白磁玉縁碗、滑石製石鍋が出土しますが、滑石製石鍋は非常に少ないといえます。

②ミヌズマ遺跡からは６本や４本の柱から構成される掘立柱建物跡群が検出されています。単純な形態としては、沖縄諸島と類似性が高いといえますが、建物を構成する要素等も含め、今後詳細な検討を必要とします。

③友利元島遺跡では、カムィヤキを副葬した埋葬人骨が確認されています。 カムィヤキを伴う人骨は、

奄美諸島、沖縄諸島からも確認されますが、いずれも伸展葬で、宮古島は屈葬という違いがあります。

④現在、11 世紀後半から 12 世紀にかけての埋葬人骨は友利元島遺跡から２体、ミヌズマ遺跡から１体の計３体が確認されていますが、頭骨の残る２体はいずれも歯槽性突顎の形質を有しています。

⑤ 13 世紀前半～中頃を示す青磁や白磁の資料は、出土数が少ないです。

２．13 世紀後半～ 15 世紀中頃の宮古島

13 世紀後半になると、中国南部から台湾北部、八重山諸島、宮古諸島、沖縄諸島へ向かう南からの新しい交易ルートが拓かれます。この交易ルートで運び込まれた中国産の陶 磁器が、中国の國清窯や浦口窯という窯で焼かれた白磁や、磁姓窯で焼かれたか褐釉陶器と考えられています。13 世紀後半以降は、それ以前の段階とは異なり、遺跡の遺物の出土量も増加するようになります。歴史的な出来事としては、1372 年に中山王察度が、明へ入貢し、沖縄諸島と明との交易がはじまりをむかえる。これによって、14 世紀後半以降には、中国南部 (福州) と沖縄諸 島 (那覇) を結ぶ交易路が主要な航路となります。

(1) 宮古島の代表的な遺跡

13 世紀後半以降の遺跡をみると、宮古島市内の広範囲に遺跡が形成されていることがみてとれ ます。その中には、高腰城跡や、大浦多志城跡などの宮古島の北海岸の標高の高い丘陵地に立地 し、石積をもった遺跡が集中している様子もみてとれます。しかし、海岸線に近く、標高の低い南部の友利元島遺跡からも当該期の陶磁器が出土し、西部のミヌズマ遺跡や住屋遺跡などからも同様の出土資料が確認され、多様な立地に遺跡が展開している状況がみてとれます。

(2) この時期の遺跡の特徴

発掘調査の成果からみるこの時期の宮古島の遺跡の特徴について整理してみます。

①中国南部の固清窯、浦口窯産の白磁、磁姓窯産の褐釉陶器が多く出土します。

② 13 世紀後半になると、宮古島の北海岸には、標高の高い場所に立地し、石積をもった遺跡が出現し、15 世紀前半には衰退します (高腰城跡、大浦多志城跡など)。その一方で、南部の友利元島遺跡や、西部のミヌズマ遺跡、住屋遺跡などのように石積をもたない集落遺跡があり、15 世紀以降も集落として継続しつづけます。

③ミヌズマ遺跡の調査成果から、13 世紀後半以降にオオムギ、コムギ、アワ、イネなどの農耕が開始します。

④土器は、外耳を有した鍋形を主要な器種とする野城式土器が多くの遺跡から出土します。

地域の特色ある文化財公開活用事業　第４回文化講座
平成 31 年３月３日（日）午前 10 時～正午　於　働く女性の家ゆいみぁ

アンケート集計（回収 14 人受講中７人）

１．今回の講座をうけての感想

★宮古人の先祖が北から流れたことが分かった。

★現物をみながら説明はわかりやすかったです。

★毎回思う事は久貝氏の若さでなんで・・・？という事が一番のスゲー！と思う点です。
これからも参加したいと考えています。

★興味深く拝聴致しました。

★とてもよかったです。宮古の古代の話がもっと聞きたいです

★全く興味がなかったのですが、勉強になりました。

★実物の紹介もあり大変よかった。

２．改善してもらいたい点

★資料をくわしくして

★始めの１時間、先生が一方的に話すのではなく、受講者との対話式にしたほうが良いと思います。
少し眠くなってしまいました。

★初心者にもわかるように一つ一つの名称をはっきり言って欲しいです。（よく聞き取れなかったです。）

３．今後受けてみたい講座のテーマ

★宮古の統一されるまでの仲宗根豊見親の話とか。

★昔の人が、どんな生活をしていたか？

★つづけて生活様式やそのころの食生活などしったらさらに楽しいと思いました。

久貝　弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古諸島における 12 世紀から 14 世紀の集落」

2019 年３月３日
「働く女性の家　ゆいみなぁ」

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 5 回シンポジウム

宮古諸島における 15 ～ 17 世紀の集落

- 残された「モノ」から読み解く -

【報告】

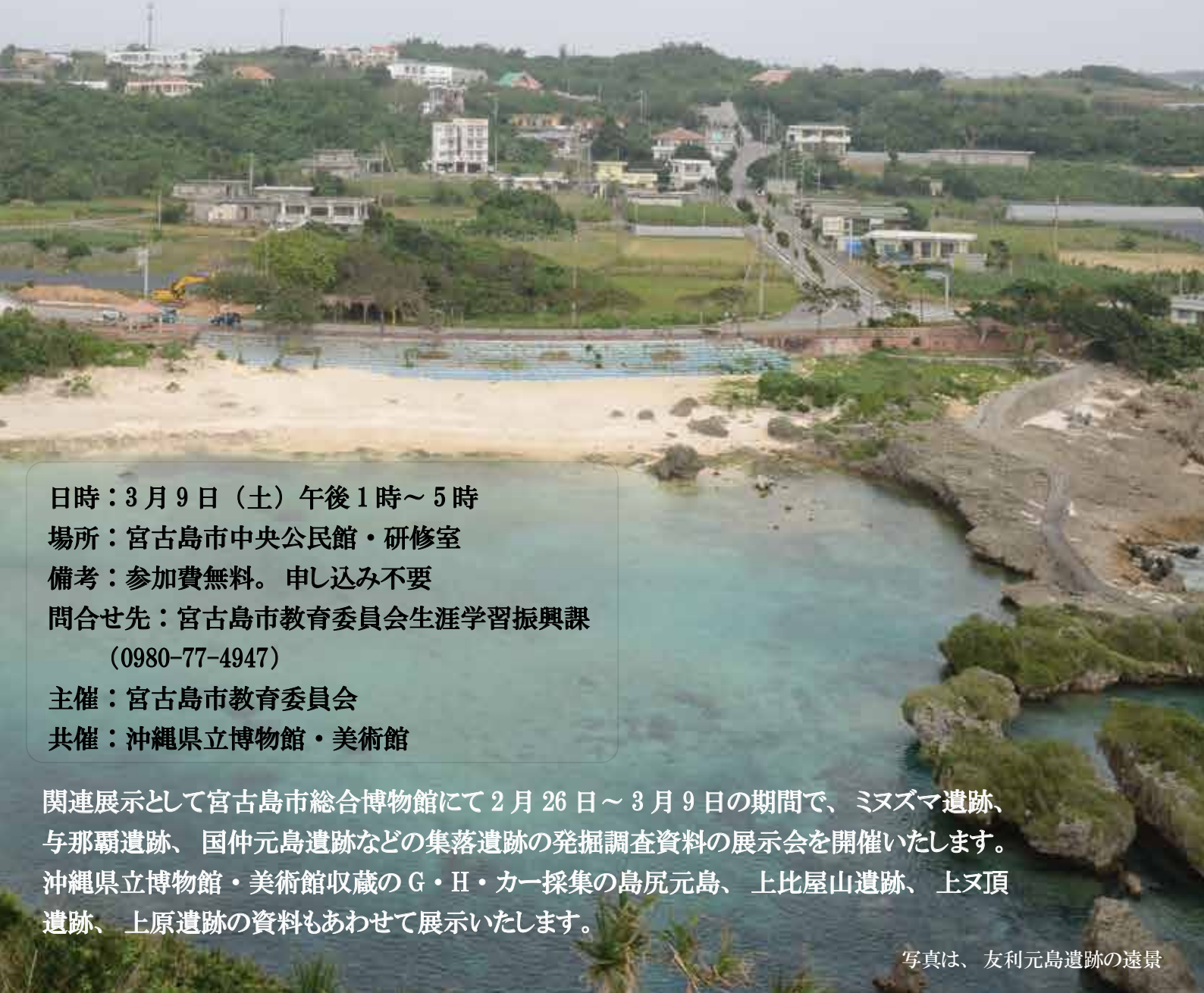
「宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡」　久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」　石井龍太（城西大学）

「琉球列島にみる 15 ～ 17 世紀にかけての集落遺跡の変容」山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）

「歴史地理からみた宮古島の集落」　山元貴継（中部大学）

総合討論　司会　鎌田誠史（武庫川女子大学）　　＊タイトルは仮題



日時：3 月 9 日（土）午後 1 時～ 5 時
場所：宮古島市中央公民館・研修室
備考：参加費無料。 申し込み不要
問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課
（0980-77-4947）
主催：宮古島市教育委員会
共催：沖縄県立博物館・美術館

関連展示として宮古島市総合博物館にて 2 月 26 日～ 3 月 9 日の期間で、ミヌズマ遺跡、与那覇遺跡、 国仲元島遺跡などの集落遺跡の発掘調査資料の展示会を開催いたします。沖縄県立博物館・美術館収蔵の G・H・カー採集の島尻元島、 上比屋山遺跡、 上ヌ頂遺跡、 上原遺跡の資料もあわせて展示いたします。

写真は、 友利元島遺跡の遠景

シンポジウム日程

進行：久貝春陽 (宮古島市教育委員会)

13：00　シンポジウム開始。趣旨説明

【報告】

13：05 ～ 13：40　久貝弥嗣 (宮古島市教育委員会)

「宮古島における発掘された 15~17 世紀の集落遺跡」

13：40 ～ 14：15　石井龍太 (城西大学准教授)

「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」

14：15 ～ 14：25　休憩

14：25 ～ 15：00　山本正昭 (沖縄県立博物館・美術館)

「琉球列島に見る 15 世紀 ~17 世紀にかけての集落遺跡の変容」

15：00 ～ 15：35　山元貴継 (中部大学教授)

「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」

15：35 ～ 15：45　休憩

【総合討論】

15：45 ～ 16：45　総合討論司会 : 鎌田誠史 (武庫川女子大学教授)

15：50　シンポジウム閉会

シンポジウム趣旨

近年において 15 世紀に相当する集落遺跡の発掘調査事例が宮古諸島内でわずかながらではあるが増加している。一方で建築学や民俗学において近世集落の遡源についての検証も活発に行われていることから、当該期における集落の実態について研究分野を越えてどのように描き出すことができるのかをこのシンポジウムで確認していく。このシンポジウムでは集落に残るモノ (遺物・遺構等) に焦点を当てて現在、見られる宮古諸島内の集落がどの部分まで遡ることができるかを明示していく。そして、現在見ることができる集落景観が歴史的に重要な要素を含み込んでいることについて認識していくことを目的とする。

宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡

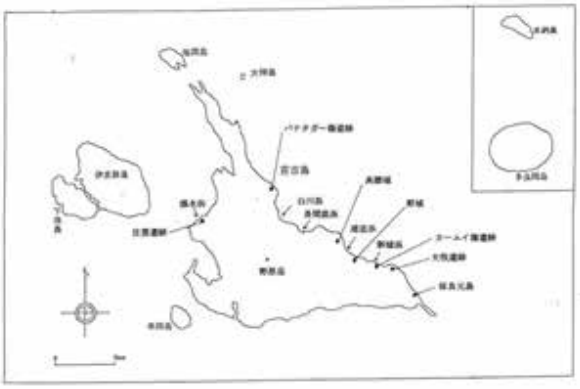
１．15 世紀以前からの変化

13 世紀後半を境に、宮古島市内には遺跡が多く形成されるようになる。その中で特徴的な遺跡群が宮古島の北海岸を中心にみられる (高腰城跡、大浦多志城跡など) 注 1。これらの遺跡の特徴を整理すると下記のとおりである。

・標高の高い丘陵上部に立地する
・石積遺構を有する遺跡が多い。
・15 世紀前半に遺跡の活動が終焉する（青花を伴わない）

特に注目されるべきは、15 世紀前半を境に、丘陵上部に立地し石積を有する遺跡が姿をけすという点にある。単純に集落が移動したのか、集落自体がなくなったのかは現在のところ明らかではないが、これまでの調査事例の現象として確認される。

注 1. 北海岸以外にも、島の中心部にある野原岳に位置する大嶽城跡なども、同様の遺跡群である。



12 ～ 13 世紀の遺跡分布（下地 2011）

14 世紀の遺跡分布 (下地 2011)

２．15 世紀～ 16 世紀にかけての集落遺跡

15 世紀 (中頃) ～ 16 世紀は、宮古島市内で行わる発掘調査で最も調査事例の多い年代の遺跡である。歴史的な出来事としては、1500 年に仲宗根豊見親らがオヤケアカハチの征討を行い、1504 年には、那覇に宮古蔵を設置と伝わる。これらの歴史事象からは、少なくとも 16 世紀初頭には琉球王府との強い関係性を伺うことができる。また、出土する中国産陶磁器の組成の点からも、その関係性を裏付けることができると考える。

この時期の発掘調査の事例としては、住屋遺跡、尻川遺跡、尻並遺跡、外間遺跡、根間・西里遺跡、友利元島遺跡、砂川元島遺跡、宮国元島遺跡、国仲元島遺跡などがある。遺物の出土量は 14 世紀代に比べると増大し、比較的安定した集落を保つことができたのではないかと考える。

(1) 遺物の特徴

当該期の示す代表的な遺物は、中国産の青磁（無文直口碗、雷文帯碗、細蓮弁文碗など）や、景徳鎮系の青花などである。しかし、最も出土量の多い遺物は土器であり、当該期において土器が急減する沖縄本島

とは異なる様相を示しており、宮古・八重山諸島の特徴ともいえる。また、土器の器種は、壺形が主体となり、鉢形、浅鉢形もみられる。前代の鍋形の器種をした野城式土器とは器種や胎土の面で大きく異なる。また、浅鉢形の土器は、宮古諸島にのみ見られる特徴的な土器であり、非常に薄手で器面を磨きあげる調整を施す。浅鉢形の土器は、渡地村跡からも多く出土し、沖縄諸島、八重山諸島にもその出土事例がみられることから、コンテナとして島外へ搬出された可能性が高い土器である。

(2) 遺跡の立地

15 ～ 16 世紀の遺跡の立地をみると、友利元島遺跡などにみられる海岸線に面した標高の低い土地に立地する遺跡や、住屋遺跡、国仲元島遺跡のように台地上に立地する遺跡がみられる。その一方で、標高の高い丘陵上部に立地する遺跡はみられなくなる。

(3) 集落の構成

住屋遺跡は、3,300㎡という大規模な面積を発掘調査し、多くの建物跡や埋葬遺構などが検出されている。そのため、当該期の集落構成を考える上で重要な成果といえる。当該期の住屋遺跡の遺構図をみると、やや混ざりもみられるが、大きく建物跡が検出される住居空間と、遺体を埋葬する土壙墓などが集中する墓域に分けることができる。宮古・八重山諸島は、沖縄諸島に比して当該期の埋葬遺構が多く検出されており、集落の住居空間に隣接して墓域が形成されていることもその要因といえる。また、久貝春陽氏は、住屋遺跡から検出される建物跡は、その建物の軸に共通性がみられ、その軸は、現在の県道 243 号線に並行していることから、当該期においても同様の通路 (道路) が設けられ、建物はそれに対して並行に位置していることを指摘している (久貝春 2015)。

もう 1 点当該期の市街地一帯の遺跡を特徴づける遺構がある。外間遺跡、根間・西里遺跡 (2018 年発掘調査)、保里遺跡 (2018 年発掘調査) では、土器や、中国産陶磁器に加え、動物骨や魚骨、貝類遺体、植物遺体が出土する廃棄土坑が検出されている。土坑の形態や規格には共通性が低いものの、食料残滓などを廃棄する大型の土坑が共通して検出されている点は、市街地周辺の遺跡の特徴を示す遺構といえる。

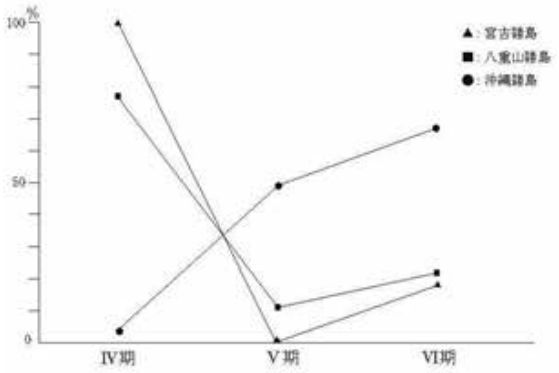
その他、当該期の集落遺跡を考える上で重要な要素が石積を有する集落遺跡である。新里西、東元島遺跡においては、居住空間を囲うようにして石積が設けられ、石積み内からは建物跡が検出されている。この石積は、13 世紀の後半にみられるように丘陵上部に立地せず、13 世紀後半の石積みが集落全体を囲うように構築されているのに対し、新里西元島遺跡は、建物跡を中心に石積を設けているという相違点があり、同一の石済いこととは考えられない。

(4) 銭貨の出土状況にみる宮古島と貨幣経済

沖縄県内においては、15 世紀以降の遺跡からも多くの銭貨が出土する。これらの銭貨は中国から搬入品であり、その多くは北宋銭と明銭から構成される (元代、南宋の銭貨も出土する)。銭貨の出土状況を整理すると、沖縄諸島と宮古諸島では異なる出土状況がみてとれる。

次のページの図は、宮古、八重山、沖縄諸島の出土銭貨の全体量に占める各時期の銭貨の出土量をグラフ化したものである。Ⅳ期は主に明代の洪武通宝や永楽通宝を含まない明代以前時期であり、Ⅴ期は、洪武通宝や永楽通宝などの明代に位置づけられる時期であり、Ⅵ期は 1609 年の薩摩進攻以降の近世琉球期である。

本グラフから、宮古・八重山諸島では、Ⅳ期段階において沖縄諸島よりもその出土割合が高いのに対し、Ⅴ期になると一気に激減し、Ⅵ期に微増する傾向を示している。一方で、沖縄諸島では逆にⅣ期が低調であるが、Ⅴ期になりその出土量が増加し、Ⅵ期においてさらに増加傾向にある。



ここで注目したいのが、Ⅴ期の段階である。Ⅴ期は、1372 年の中山王察度の入貢以降、那覇 - 福州間での交易に伴い、沖縄諸島に多量に持ち込まれたものと考える。当然ながら、沖縄諸島内における出土状況にも検討を行う必要性があるが、沖縄諸島内において最大規模にⅤ期の銭貨が出土するのが渡地村跡である。渡地村跡は、宮古蔵が接地された場所であり、前述した浅鉢も数多く出土する遺跡である。つまり、渡地村跡は、当時の宮古 - 那覇間の交易における那覇側の拠点地といえる。前述したように渡地村跡からは多量の明銭が出土するが、これが 1 点も宮古島市内で出土していることを考えるならば、意識的銭貨を宮古諸島に搬出しないということと考えられる。このことから、宮古島とは銭貨を介在なし非貨幣経済圏であったといえる。

（5）今後の課題 - 地域間の遺跡の比較 -

遺跡の性格を考える上で、その遺跡を残した人々の身分は一つの検討要素であるといえる。宮古島市内においても家譜が多く残され、その中には屋号として、その一族が居住した地域名が記されている。年代的な検討は必要であると考えるが、今後このような地域間での出土遺物の比較検討も行っていく必要性がある。

３．17 世紀の集落遺跡

時代区分において、1609 年の薩摩進攻を契機として近世琉球期のはじまりとなる。琉球王府が薩摩の支配下に置かれるようになり、宮古諸島においても 1610 年に検知が行われ、1614 年に村番所、1637 年に在番が置かれるようになるなどの社会的な変化がみられる。1611 年には、祥雲寺も創建される。社会の仕組みが変わっていく中で、17 世紀代の集落遺跡はどのような様相を呈しているのか、重要な研究テーマであるといえる。

この時代の遺跡の特徴としては、16 世紀から集落が継続している状況にあり、17 世紀以降の近世琉球期の明確な遺構を示す事例が非常に少ない。しかしながら、新里西元島遺跡や、国仲元島遺跡の発掘調査事例をみると、17 世紀へ継続しない集落もみられる。

(1) 国仲元島遺跡について考える

伊良部島のことを記した最も古い歴史史料は、『朝鮮王朝実録』の「朝鮮済州島人漂流史料」である。この史料は、1477 年に朝鮮済州島民が与那国島の漁民に救助され済州島へ帰島するまでの沖縄県内の島々での様子を記したものである。この中で伊良部島は、伊羅夫と記されている。そして、島では黍、粟、麦、稲を栽培していたことや、家畜として牛、鶏、猫を飼い、牛は食べるが鶏は食しないこと、酒を造っていたことなどが記されている。本史料は、15 世紀後半の宮古の各島々の様子を知る上で重要な史料であるといえるが、島単位での記録であるため、伊良部島のどの村の様子を記したものであるかは不明である。

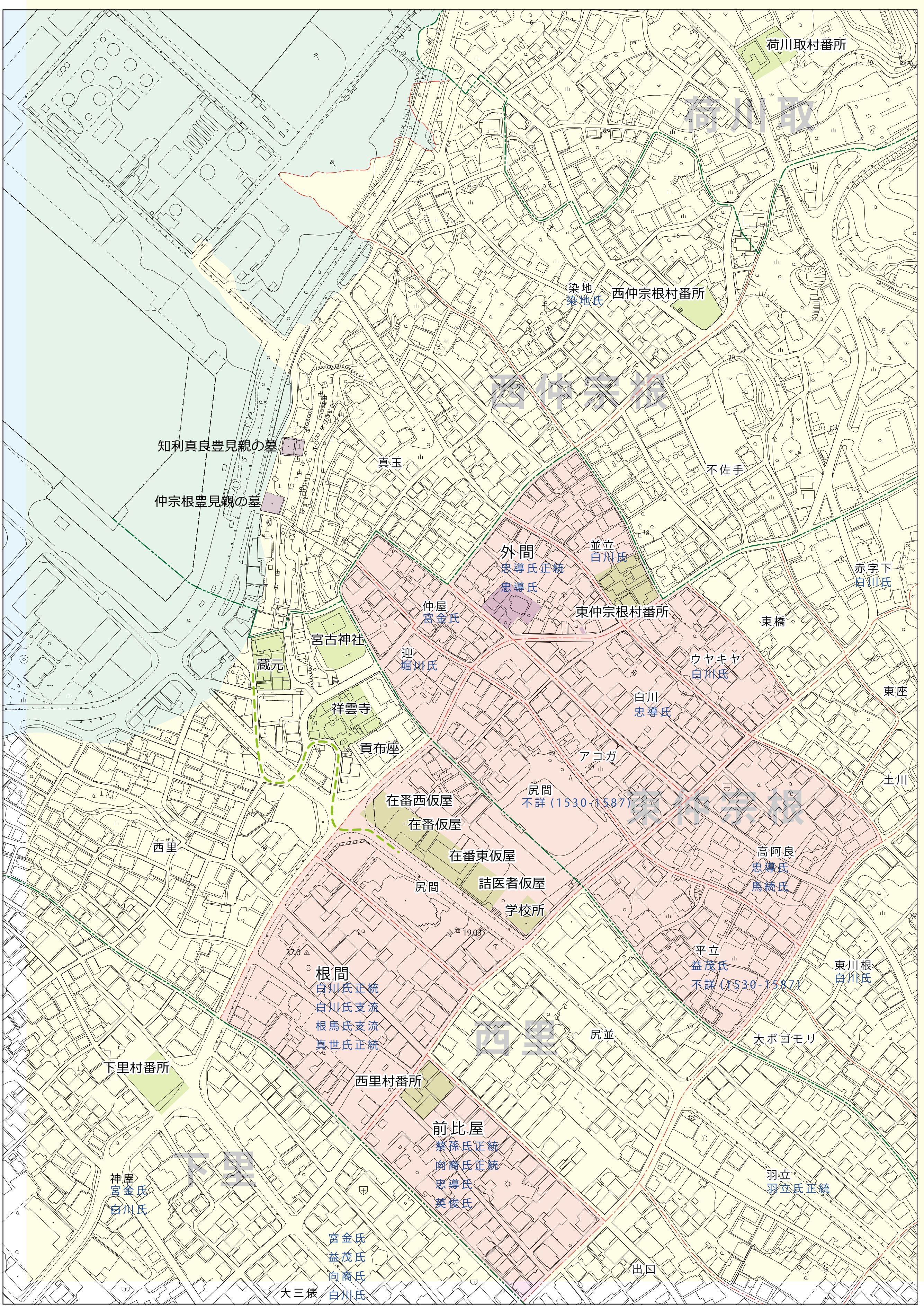
国仲村の始まりを考える上で重要な記録が『球陽』にみられる。『球陽』によれば、尚敬王 25(1737、乾隆 2) 年に、池間島の人民を伊良部島へ移し国仲村とし、与人 1 人、目差 1 人を設けたとある。これは、古文書にみる国仲村の始まりといえる。それを裏付けるかのように、『雍正旧記』においても、伊良部島には伊良部村と佐和田村の 2 つの村についての記述はみられるが、国仲村についての記述はみられない。その一方で、家譜には 1737 年以前の国仲村の記録をみることができる。『家譜にみる宮古の役人』（城辺町教育委員会 1998) を参考に国仲村の役人についてみていくと、最も古い事例としては、南興氏 1 世明元が嘉靖年間に国仲与人であったことが記されている。嘉靖は、中国明代の第 12 代皇帝世宗が用いた元号であり、1522 年から 1566 年までの 45 年間を年代幅としている。これ以外にも 1737(乾隆 2) 年以前の事例として、隆慶年間 (明代・1567 ～ 1572 年) に伊安氏 6 世方里が、万暦年間 (明代・1573 ～ 1619 年) に伊安氏 7 世方と白川氏 5 世恵昌が、康熙年間 (1662 ～ 1722 年）に益茂氏昌盈が、雍正年間 (1723 ～ 1735 年) に益茂氏昌則が国仲与人であったことがみてとれる。国仲村には、この与人以外にも目差、耕作筆者、耕作仮筆者らの役職がみてとれるが、これらはいずれも 1737(乾隆 2) 年以降の年代を示しており、与人のみが 1737(乾隆 2) 年以前を示している。

国仲村以外の伊良部島の村をみると伊良部村の首里大屋子の役職に、伊安氏の名前は不詳であるがが嘉靖 29(1550) 年に就いていたことがみてとれる。首里大屋子の役職が置かれていることからも伊良部村が伊良部島における行政的な中心地であったことがみてとれる。

もう一点の歴史資料として、国絵図の視点から伊良部島の集落についてみてみたい。正保国絵図には伊良部島の唯一の村名として「くがい村」がみてとれ、これは元禄国絵図、天保国絵図でも同様である。絵図の位置から、現在の集落や元島遺跡との比較を行うことは推測を伴うが、伊良部村と国仲村のどちらに比定されるかは判然としない。なお、これらの絵図には、伊良部島の海の玄関口は現在の長山港一帯であったことがみてとれそこから海岸線にそって道が設けられ、現在の佐和田集落あたりを終点としている。『雍正旧記』の段階においては、伊良部島のもう一つの中心的な集落として佐和田村が位置づけられていたことがみてとれ、国絵図には村として記されていないものの佐和田まで道が伸びている状況は村の存在をうかがわせている。

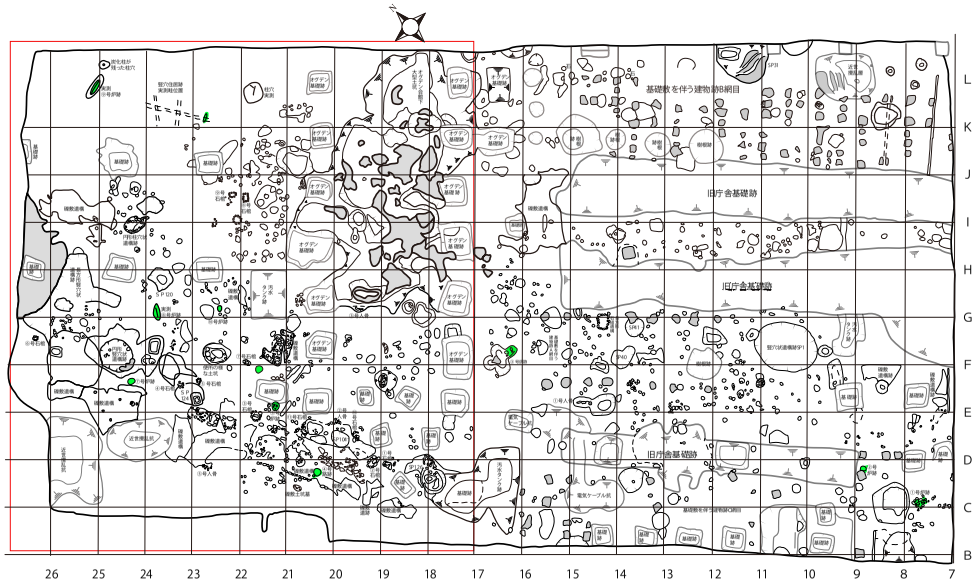
以上の歴史史料から国仲村について考えると、国仲村の始まりの一つは乾隆 2(1732) 年にあったといえる。しかし、家譜の記録を見る限りでは、それ以前にもその母体となる村が存在していた可能性が考えられる。これは、今回の国仲元島の発掘調査でえられた集落の中心年代が 15 ～ 16 世紀に位置づけられることからも十分可能性があるといえる。

下地和宏 2011 年「「宮古人」を考える」『宮古の自然と文化』第 3 集 宮古の自然と文化を考える会
久貝春陽 2015 年「宮古のグスク時代における掘立柱建物跡への考察」『宮古研究』第 13 号 宮古郷土史研究会



荷川取村番所
荷川取
染地
染地氏
西仲宗根村番所
西仲宗根
知利真良豊見親の墓
仲宗根豊見親の墓
真玉
不佐手
外間
忠導氏正統
忠導氏
並立
白川氏
赤字下
白川氏
仲屋
宮金氏
東仲宗根村番所
東橋
宮古神社
蔵元
迎
堀川氏
ウヤキヤ
白川氏
白川
忠導氏
東座
祥雲寺
貢布座
アコガ
在番西仮屋
尻間
不詳（1530-1587）
東仲宗根
土川
在番仮屋
在番東仮屋
西里
高阿良
忠導氏
馬統氏
尻間
詰医者仮屋
学校所
根間
白川氏正統
白川氏支流
根馬氏支流
真世氏正統
平立
益茂氏
不詳（1530-1587）
東川根
白川氏
西里
尻並
大ボゴモリ
下里村番所
西里村番所
前比屋
蔡孫氏正統
向裔氏正統
忠導氏
英俊氏
下里
神屋
宮金氏
白川氏
羽立
羽立氏正統
宮金氏
益茂氏
向裔氏
白川氏
大三俵
出口

西側部分の遺構図(S=1/200)　＊右図の赤線部分の拡大



住屋遺跡遺構概略図(S=1/400)

宮古・狩俣遺跡発掘調査概要（2015 ～ 18 年度）

石井龍太（城西大学経営学部）

はじめに

狩俣集落は宮古島の北東部に位置する (図 1)。北西－北東方向に伸びる方形を呈し、後背には丘陵が位置する、いわゆる「腰当集落」である。これまでに、伝統祭祀をはじめ、民俗学、言語学等様々な学問分野の研究者が興味関心を寄せてきた集落である。

本報告は、大きく 2 つの調査成果について報告する。一つは、報告者が 2015 年から継続的に行ってきた、狩俣集落の踏査成果の報告である。そしてもう一つは、2018 年 12 月に実施した、狩俣集落南東部に位置する土塁調査の報告である。

１．踏査成果

１－１．狩俣集落の表採遺物

報告者は 2015 年から継続的に、狩俣集落全体の踏査を実施し、遺物の傾向や遺構の探索を実施してきた。集落内で確認できた遺物の大まかな傾向として、沖縄島那覇市の壷屋産と推察される沖縄産無釉陶器（荒焼）と宮古式土器が多く、僅かに瓦、沖縄産施釉陶器（上焼）、日本列島産磁器（砥部焼等）が見られる。主体を占める遺物の一つである宮古式土器はⅠ～Ⅲ類が確認され、中でもⅡ類（15 世紀後半。貝片

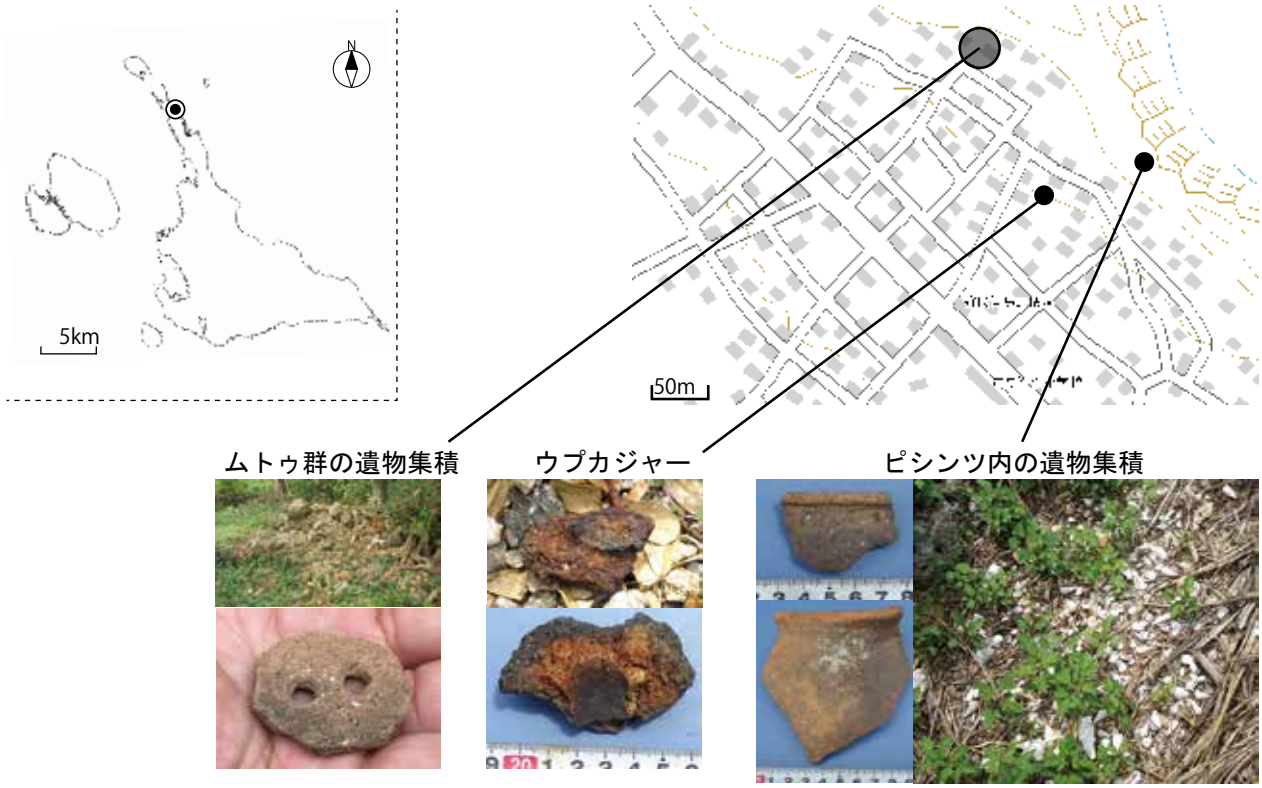


図１　狩俣集落の位置と、本報告で扱う集落内の踏査地点
※地理院タイル（電子国土基本図）を加工して作成

が含まれ、焼が甘い赤褐色の色合いを呈する。）が目立つ傾向にある。

また自然遺物も各所で相当量が確認される。貝類が多く、シャコガイ、ハマグリ、アラスジケマンガイ、チョウセンサザエ、マガキガイ、イモガイ、ラクダガイ等が見られ、中でも大型の貝類が目立つ。他の集落遺跡でも見られる貝種組成であり、その多くは食料残滓と推察されるが、水摩を受けた死貝も見られた。なお貝製品は確認できていない。

１－２．狩俣集落の遺物集中地点（図１）

ピシンツ

遺物は集落全体で確認されるが、一方で一定の粗密も認められる。ここでは集落内において特徴的な様相を呈する３地点を取り上げ、遺物と合わせて見てみたい。

集落北東の山地尾根に沿って、神道であるピシンツ（干瀬道）が走る。海側に開けた場所では大神島が常に視界に入る。一帯の特に北側は沖縄県によって「狩俣遺跡」として遺跡登録されており、土器、輸入陶磁器、鉄滓等が多いとされる。実際に踏査してみると、ピシンツに沿って設置された「ンナグズグズの飲料水タンク」の標識付近の、ピシンツからタンクへ降りる坂道に遺物の集中域が確認される。大量の宮古式土器（Ⅱ、Ⅲ類）、沖縄産陶器（灰釉碗、黒釉片、無釉陶器片）、中小型貝類（マガキガイ、イモガイ、ハマグリ、アラスジケマンガイ等）が確認され、特に宮古式土器は口縁部が複数かつ複数種類認められた。日本列島産磁器をはじめ近現代遺物は見当たらないことから、概ね 15 世紀～近世期以降に位置づけられる。生活材の廃棄遺構と判断されよう。

なおピシンツの集落側には断続的に続く石積が確認できる。幅 40 ～ 120cm、高さ 60 ～ 100cm を測り、地点によって規模が異なることがうかがえる。

ウプカジャー

集落の中央付近に位置するウプカジャーと呼ばれる地点において、屋敷跡南側の道に面する付近にも遺物の集積が確認される。特にウプカジャーの区画入口付近に多く、宮古式土器Ⅱ類、壷屋産の沖縄産無釉陶器に混ざって、鉄塊と、被熱を受けた窯業製品を確認した。後者は小片だが、内面の穴の一部と高温で膨れ自然釉を吹いた外面が残存していることから、羽口の可能性が考えられる。

ムトゥ群

集落北西部に位置するムトゥ群の一帯に、遺物の集中域が認められる。特に北門へ向かう道には多い。種類も豊富で、宮古式土器、沖縄産陶器、日本列島産磁器、軟体動物遺体（貝類）、脊椎動物遺体（魚骨）が認められる。一帯は生活に伴う廃棄場所として機能していたのではないかと推察される。

１－３．小結

集落域全体に認められる宮古式土器の存在から、15 世紀には一帯で面的な人間活動が行われていた可能性が考えられる。ただし地点によって遺物組成は異なり、鍛冶屋と推察される地点も確認される。またピシンツを含めた北側ほど古手の遺物の比率が増え、新しい遺物が入らなくなる傾向を見て取れる。集落の展開を考える上で重要な示唆を与えるものであろう。

また現在は祭祀空間となっているピシンツやムトゥ群には、生活材を廃棄したと思われる多種多数の遺物が確認される。集落後背の丘陵に居住域があったとはしがたいが、ムトゥ群における遺物の集積は、同

地が当初から聖域であった訳ではなく、かつては居住域として使われていたことの表れと解釈することも可能であろう。

２．発掘調査成果

２－１．現状と先行研究

狩俣集落は、居住域である屋敷地全体が囲壁されていたとされる。しかし明治 39 年に、宅地拡大を目的に撤去されたとされ、その後は門のみが残されたという。現在は北の門と東の門が現存しているが、東の門は修復され大型化しており、また北の門は石組が崩れ、崩壊の危険に瀕した状況にある。

集落全体の囲壁の様子を伝える資料として、鎌倉芳太郎が 1923 年に撮影した写真を挙げることができる。特に南門を撮影した写真は、門の左右に伸びる囲壁の一部が確認され貴重である（鎌倉 1982: 10)。写真を見る限り、囲壁は石材による野面積みで、身の丈に及ばない程度の高さであることが伺える。

なお近代に入って撤去された囲壁がどこに位置していたのかについては諸説ある。佐渡山正吉氏による地名に基づいた分析は、先駆的研究として重要である (佐渡山 1994)。一方で山元貴継氏による地籍図に基づいた分析も行われており (山元 2018)、両者の結論は、特に南側 (県道側) のどこに囲壁が位置していたかにおいて異なる。

２－２．測量調査

囲壁については南側（県道側）が注目されがちであるが、狩俣集落の南東部には特徴的な土塁が存在する。上述の先行研究ではいずれも囲壁が存在したとされる地点である。一帯の地籍は細長く、かつ屋敷地を囲むように連続していることから、かつて囲壁があった場所であると推察される。

土塁の周囲は平坦な自然地形であることから、人為的に構築された居住域南東部の区画と考えられる。土塁の内側は屋敷地、外側は耕作地が広がっており、現在も人間活動を隔てる境界として機能している。屋敷地側は屋敷囲いの役割も兼ねており、土塁の壁に接してフクギの並木も確認される。

以上のように、この集落南東部の土塁はかつて存在した囲壁の残存部である可能性が期待されたことから、調査対象にすることとした。2018 年 5 月には、土塁の全形と周辺地形との関係を明らかにすることを目的に測量調査を実施した（図 2-1)。北東－南西方向の直線形を呈し、北東側は山にぶつかり、緩やかに傾斜面と一体化していく。現存する土塁は長径約 20 m、基底部は 3 ～ 4 m、上端は若干の平坦面となり幅約 1.5 m、高さは最大で約 2 mを測ることを確認した。

２－３．発掘調査

2018 年 12 月には、土塁の構築方法と歴史的展開の解明を目的に発掘調査を実施した。木の根かく乱を避け、南寄りの地点を選択し清掃した後、土塁の東側（旧耕作地側）に幅 50㎝のトレンチ（発掘坑）を設けて掘り下げ、土層セクション図を作成した (図 2-2)。

狩俣集落南東部土塁トレンチ土層注記

1A 層	Hue7.5YR2/1　**黒色土層。表土。しまりあり。粘りあり。大小の礫、陶磁器、貝、動物骨、ガラス、プラスチック等を多量に含む。**
1B 層	Hue7.5YR2/2　**黒褐色土層。表土。しまりあり。粘りあり。最大径 3㎝以下の小礫、陶磁器、貝類を多量に含む。**

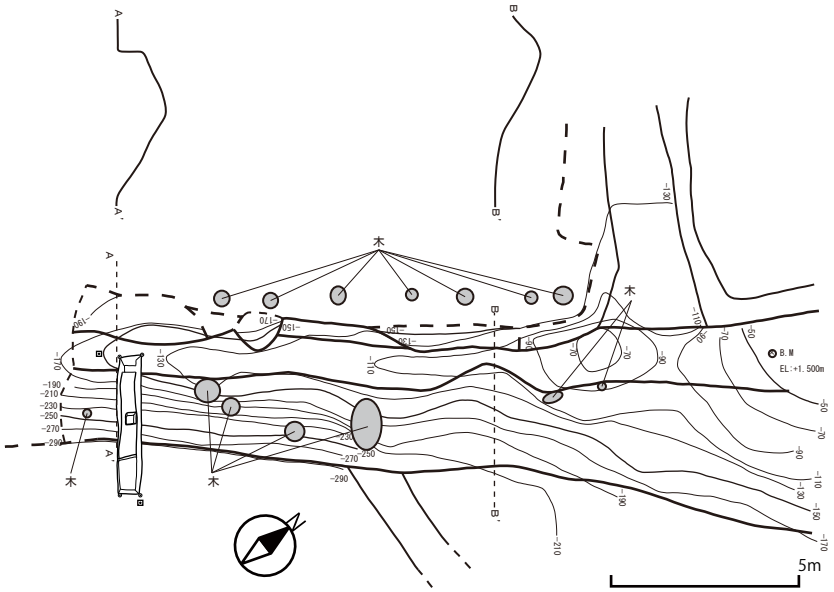


図2-1　狩俣集落の土塁測量図

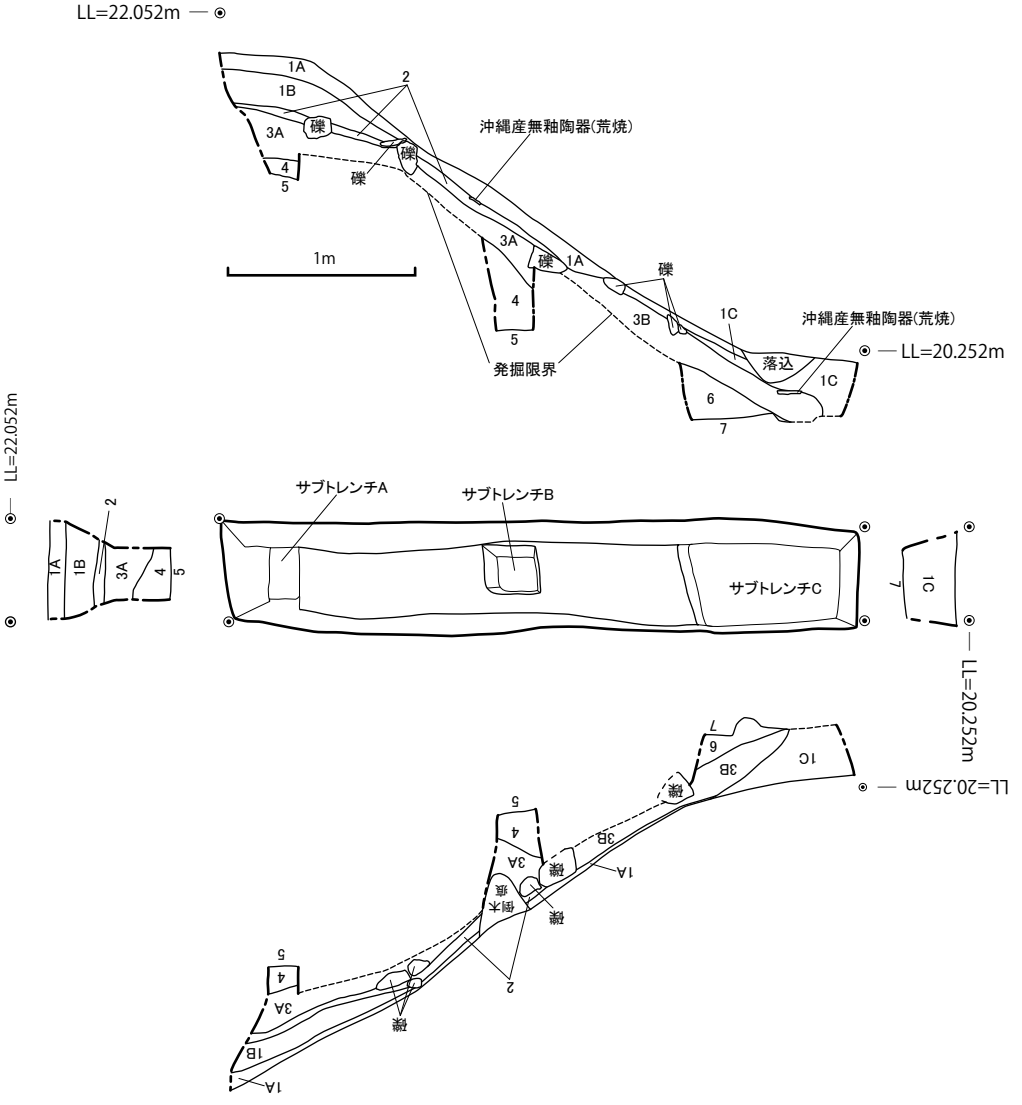


図2-2　土塁トレンチ測量図

1C 層	Hue7.5YR4/3　褐色土層。表土、耕作土。しまりあり。粘りあり。無遺物層。
2 層	Hue7.5YR3/1　黒褐色混礫土層。しまり強。粘り弱。径 15㎝以上も含む大小の礫と貝類を大量に、陶磁器を少量含む。
3A 層	Hue7.5YR4/2　黒褐色混礫土層。しまり強。粘り弱。径 15㎝以上も含む大小の礫と貝類を大量に、陶磁器を少量含む。
3B 層	Hue7.5YR4/3　褐色混礫土層。しまり強。粘り弱。径 15㎝以上も含む大小の礫と貝類を大量に、陶磁器、ガラス瓶等を少量含む。
4 層	Hue7.5YR4/3　褐色土層。しまり弱。粘り弱。径 5㎝以下の礫と貝類を少量含む。
5 層	Hue7.5YR4/3　褐色混礫土層。しまり弱。粘り弱。径 15㎝以上も含む大小の礫を大量に含む。
6 層	Hue7.5YR4/6　褐色土層。しまり強。粘り弱。無遺物層。径 5㎜以下の炭化物を少量含む。
7 層	Hue7.5YR4/4　褐色土層。地山。しまり強。粘り弱。無遺物層。

土塁の表土には 15 世紀から現代までの幅広い時期に渡る遺物が散乱しており、特に貝類と礫が目立つ。トレンチ上半では、表土層の直下に黒くしまった混礫土層（2 層）が検出され、これが土塁の旧表面であると推察された。2 層の下からは混礫土層（3A 層）が検出され、両層とも礫と比較的大型の貝類遺体が大量に混入する。一方で魚骨は少なく、微小貝類は見られない。また量は少ないものの、沖縄産陶器、宮古式土器、清朝磁器、砥部焼、ガラス瓶片、鉄片等が出土しており、近代期に位置づけられる。両層の間に大きな時間差は考えにくく、土塁を構築する際に複数層を積み重ねたものと推察される。なおトレンチ下半は様相が異なり、しまりが強く明るい赤色の混礫土層（3B 層）が検出された。

3A、3B 層の混礫土層が固く詰められていることから、全体的な掘り下げは難しい状況となり、トレンチ上端、中央、下端に、それぞれサブトレンチ A ～ C を設け掘り下げた。上端のサブトレンチ A、中央のサブトレンチ B からは 3A 層の下にしまりのない土層（4 層）が検出され、その下からは再び礫層（5 層）が広がる様子が確認された。下端のサブトレンチ C からは 3B 層の下にしまりの強い土層（6 層）が、その下からは土塁構築前の旧表土面と推察される土層（7 層）が検出された。

検出された層序のうち、硬くしまった土の層である 6 層が土塁の芯になると推察される。6 層は炭化物の細粒を含むことから人工的な構築物であると判断されるものの、今回の発掘調査では遺物が検出されず、年代を特定できなかった。そして 6 層の上面に、礫や貝を大量に混入した土を幾層も盛り付け（2 ～ 5 層）、土塁を構築していることが伺える。2 層以下において検出された貝類は大型で、魚骨が少なく、微小貝類を伴わないことから、現在の地表面においてみられる廃棄された貝類とは異なり、建材として混入されていると判断される。中には水摩を受けた死貝も混入されており、食料残滓の再利用ばかりでなく、土塁の混入物として海から持ち込まれたものが含まれると考えられる。

なおトレンチ中央付近には倒木によって生じた穴を埋めた痕跡が検出されたことから、構築された後も継続して補修、管理が行われていたことが伺える。

２－４．小結

土塁の芯になると推察される 6 層の年代は、無遺物層であるため未確定である。ただしその直上に位置する混礫土層は沖縄産陶器片、ガラス瓶片を含むことから、近代期に位置づけられると考えられる。従って土塁は、近代期に現在みられる状態になったと判断されよう。

狩俣集落の囲壁は近代期に撤去されたとされ、上述の通り、土塁が位置する地籍は集落縁辺部を取り巻くように細長く連続していることから、囲壁が存在した地点であったことが伺える。こうした諸要素を総

合すると、調査した集落南東部では、囲壁の撤去後に改めて土塁が築かれたと推察される。

あるいは第６層の年代が未特定であることから､近世琉球期以前となる可能性が払拭された訳ではない。この地点の囲壁は石積ではなく土塁であり、かつ近代期にも撤去されず、混礫土を盛り上げて整備すらされた可能性も考えられる。現状では前者の蓋然性が高いといえるが、いずれにせよ過去の見解とは大きく異なり、重大な成果と言えよう。

この土塁は現在も居住域と耕作地を画する機能を果たしているが、上述の通り集落の他の地点でも囲壁撤去後に門が残り、北門周囲には石積も確認される。すなわち、囲壁は近代期に全て消滅した訳ではなく、残存、再構築すらあったといえる。

ただし調査地点の土塁は、徐々に存在感が薄らいでいったと推察される。表面に散布している礫や貝、陶器片、ガラス瓶片は、ここが集落地と耕作地からの廃棄場になっていたことをうかがわせる。

今後の課題

以上、踏査と発掘調査の成果を述べたが、本報告の締めくくりとして、これまでの成果を踏まえて今後必要となる調査研究について列挙する。

まず継続的な踏査によって 15 世紀以降に北西部から集落が拡大したという仮説が得られたが、これは集落各地の発掘調査によって裏付けられる必要がある。

また今回発掘調査を行った南東部の土塁は、芯になると推察される第 6 層の年代が不明瞭である。さらにその下層には、かつての囲壁の痕跡が残る可能性がある。今後は 6 層を可能な限り面的に検出し、掘り下げて年代を特定することで、土塁の創建年代を押さえる調査を実施したい。

また囲壁の存在が想定される他の地点でも発掘を実施することで、過去に存在した狩俣集落の囲壁の位置、規模、展開について考察を深めていきたい。鎌倉芳太郎の写真資料を見る限り、南の門は県道よりも集落側に位置していることが伺える。一方で県道沿いにあったとする地域住民の証言もあり、更なる検討が必要であろう。囲壁の場所と歴史的展開を探るためには、かつて存在したとされる南側（県道沿い）や北西部の調査も必要となる。現在も石門が残る北西部は、全体を探るための定点として重要であるといえる。

〈引用・参考文献〉

鎌倉芳太郎　1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店

佐渡山正吉　1994「地名と屋号で見る狩俣集落の変遷」『平良市総合博物館紀要』第 1 号 : 69-80

山元貴継　2018「2 章　沖縄県宮古島・狩俣集落の空間的構造とその変化　－地形的条件および土地所有との関わりにも注目して－」『離島研究』Ⅵ : 25-40

琉球列島における15世紀から17世紀にかけての集落遺跡にみる変容
―沖縄本島を中心に―

沖縄県立博物館・美術館
主任学芸員　山本　正昭

１．はじめに

琉球列島における中世相当期から近世期にかけての集落遺跡についての考察はこれまであまり触れられてこなかった感がある（註１）。それは集落遺跡の発掘調査が集落全域に及ぶような広範囲で行われていないことから全容が判明できる事例が僅少であることや当該期の集落遺跡から検出される遺構の密度が高いことから、遺構の把握が困難であることなどが挙げられる。しかし、近年において集落遺跡の調査事例が増加していることから、資料蓄積は確実なされている状況であり、その中で一定程度の整理、検証していくことで断片的ながら全容を窺い知る方向性が模索できる段階にまできているように思われる。そして、琉球史の中で位置付けらる近世期が考古資料でにおいてどのような論点を提示できるのかについて、当該期の集落遺跡は重要な資料として提起できると考えられる（註２）。

本稿においては上記の点を踏まえながら、グスク時代から近世期にかけての集落遺跡を改めて整理し、その変遷について検証していく。また、集落遺跡そのものが有する変遷と「近世」という時期が集落遺跡にどのような変革をもたらしたのか、「近世集落」を集落遺跡からどこまで踏み込むことができるのかについて、検証していきたい

（註１）近年における近世期の集落に関する研究はや歴史地理学の中で盛んに行われている。

（註２）これまで拙稿 2008, 2015 にてグスク時代から近世期にかけての集落変遷を行った。

２．グスク時代から近世期にかけての集落遺跡概観

集落遺跡の発掘調査は時期を問わず、集落全体を把握できた事例は僅少である。本稿で対象としたグスク時代並びに近世期の集落遺跡を全面発掘した事例は皆無である。その全容を通しての検証は残念ながらまだ先の話という資料的制約を前提にしつつ、これまでの部分発掘で得られた調査成果を読み込みながら考察を行っていきたい。

グスク時代から近世期までの集落変遷を見ていく上でグスク時代でも後半に相当する15世紀代の集落遺跡について事例を掲げていきたい。まずは那覇市首里の天界寺集落について取り上げる。かつて首里城東に隣接して第一尚氏の菩提寺である天界寺が近世まで存在していた。当該寺院は1450年頃に創建されたが、それ以前は境内とその周辺に集落が立地していた。天界寺建立以降は集落としては機能していないため15世紀前半終焉する集落遺跡として位置付けられる。発掘調査では14～15世紀にかけての柱穴群が検出されており、集落を構成していた掘立柱建物の柱穴と考えられる。建物プランは確認できず、小規模な竪穴住居址と想定される円弧状遺構が６基検出されている。（那覇市教育委員会 1999, 2000、沖縄県立埋蔵文化財センター2001, 2002, 2003）。天界寺集落と同様に大規模な

グスクに隣接する集落遺跡では、今帰仁グスクに隣接する今帰仁ムラ跡がある。出土遺物から14～16世紀に展開した集落遺跡とされている。自然地形に制約されながら造成を行い、建物配置するという状況が窺えるが、とくにこの平場を区画するような遺構は検出されておらず、道に伴う遺構も確認されていない（今帰仁村教育委員会 2005, 2007）。また掘立柱建物も検出されているが建物群としての単位や相互の共通性を見ることはできない。また、旧地割りが不定形となっていることから街路見られない若しくは不整然な街路が配されていた可能性が指摘できる（註）。先島地域の集落遺跡については花城村跡を挙げておく。当該遺跡は竹富島にある集落遺跡で14世紀後半から15世紀にかけての遺物が主に出土している（仲盛 1999）。花城御嶽と久間良御嶽周辺の石積み囲いが方形となる以外は不定形の石積み囲いで構成される。また街路が全く配されずそれぞれの石積み囲いが直接、連結し全体を構成している。

次にグスク時代から近世期まで存続した集落遺跡について取り上げていきたい。

浦添市当山にある当山東原遺跡は14～16世紀の掘立柱建物と柱穴群、17～18世紀の掘立柱建物と礎石建ち建物が検出されている（浦添市教育委員会 2003）。14～16世紀では無数の柱穴と方向の揃わない建物が見られるが、17～18世紀になると柱穴は少なく、北西－南東方向に建物の軸が揃う。街区を形成するような溝や石積み等は検出されていないが、建物の方向性が見られる点で計画的な配置が意識されていることが看取される。

上村遺跡は西表島祖内の14世紀中頃～18世紀まで続く集落遺跡で、石積み囲いが良好に残存している（沖縄県教育委員会 1991）。方形の区画が一部見られるが徹底しておらず、道は見られるものの全域におよぶものではなく、石積み囲いを連結させた部分も多く見られる。また街区は見られるが整然と配置されていない。加えて、南側には慶来慶田城遺跡が隣接している。当該遺跡は14世紀の遺物が得られているが、主体となる時期は15世紀末からで近代まで継続する集落遺跡である。伝承では薩摩在番が当該遺跡の南西部に設置され、その地点からは柱穴や溝状遺構、屋敷内道に関係する遺構が検出されている（沖縄県教育委員会 1997）。また集落内の区画は基本的に方形を呈し、東西と南北軸の碁盤目状に近い形で道を配する南側と区画は不定形で道が碁盤目状とならず、支道が取り付く北側に分けることができる。

近世期の集落遺跡については発掘調査事例が極めて限られており、ここでは全体様相が。この時期の集落遺跡では散居的な屋敷配置が見られる事例もあるが（註１）、とくに街路区画についての成果が上がっている事例を以下に紹介していく。

新城古集落は18世紀初期まで確実に遡ることができる集落遺跡で、宜野湾市に所在する。小穴や素掘りの井戸と思われる土坑が多数検出されている（宜野湾市教育委員会 1995）。また当該調査においては６本の素掘り溝が検出されており、そのうち５本の溝の方向軸がそれぞれほぼ直角に交差するため方形区画を形成する区割り溝の可能性が指摘される。

現在見られる、古い様相を示すとされる集落であってもそれは現代までの生活様態が蓄積されたものであり、そのまま数十年前や数百年前の集落形態を示しているものではない。様々な変遷を経て、現在の集落は形成されているため、古い様相のみを切り取って読み込むことは容易ではない。それを解消する方法として文献資料や聞き取り、発掘調査などの方法を駆使して、集落の古い様相や現在に至るまでの変遷を読み込もうと試みが行われてきた。中でも沖縄本島以南の集落についてはグスク時代から近世期にかけて、どのような

変遷を遂げてきたのか。いまだ不明な点が多く残されている。

グスク時代から近世期にかけての集落携帯についてはこれまでに仲松弥秀による歴史地理学を軸にした研究で近世における集落構造の変化を洗い出し、そして安里進や呉屋義勝による共同体の成立と展開を考古学の研究成果と、民俗学、歴史学、地理学等の視点を加えて集落遺跡の考察を行っている。また、小野正敏や高梨修といった沖縄本島とは離れた地域における集落構造の在り方と近世における集落の変化について提示している。何れも集落形態がどのように変化したのかについて明快な形で概念規定を行い、集落構造並びに集落の相互関係、そしてそこから浮上する社会背景にまで踏み込んで検証を行っているものも見られる。

本稿においてはこれまで実施された集落遺跡の発掘調査成果を軸に据えてグスク時代から近世期においての集落変遷を読み解いていき、どのような背景の下でその変化が窺えるのかについて考察していくものである。

沖縄県内では従来までの発掘調査成果に加えてグスク時代から近世期における集落遺跡の発掘調査事例が近年増加しており、新たに考察の枠組みを用いて読み込んでいくことが可能な段階に来ているものと思われる。その反面、今日においても集落遺跡の全面発掘調査事例は極めて限られており、その全容を通しての検証は残念ながらまだ先の話であると言える。

それらの資料的制約を前提にしつつ、部分発掘で得られた調査成果を読み込みながら考察を行っていく。よって、今後において新たな事例が加わることで更なる検証を行っていく必要があることは言を俟たない。

3．グスク時代から近世期にかけての集落遺跡概観

（1）14～16 世紀の集落遺跡

ここでは 15 世紀までに集落としての機能が終焉している天界寺跡集落、津嘉山古島遺跡、16 世紀で終焉した今帰仁ムラ跡、花城村跡について取り上げ、グスク時代終わり頃の集落様相について概観していく。

① 天界寺跡集落（図１）

首里城東に隣接して第一尚氏の菩提寺である天界寺が近世まで存在していた。当該寺院は 1450 年頃に創建されたが、それ以前はこの一帯に集落が立地していた。天界寺建立以降は集落としては機能していないため 15 世紀前半終焉する集落遺跡である。発掘調査では 14～15 世紀にかけての柱穴群が検出されており、集落を構成していた掘立柱建物の柱穴と考えられる。建物プランは確認できず、小規模な竪穴住居址と想定される円弧状遺構が６基検出されている。因みに道路遺構や柵列と言った区画施設は検出されていない（那覇市教育委員会 1999, 2000、沖縄県立埋蔵文化財センター 2001, 2002, 2003）。

② 津嘉山古島遺跡

14～15 世紀の集落遺跡でプランは確認できない簡易な掘立柱建物の柱穴と思われる

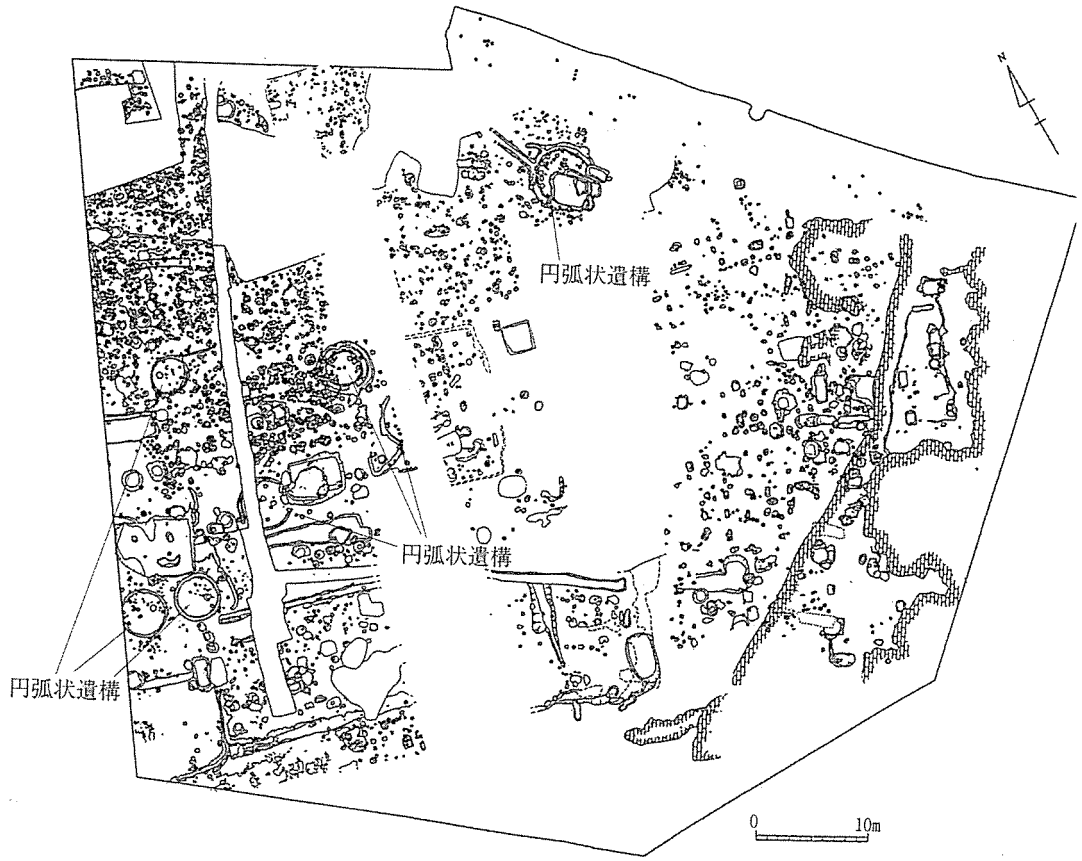


図１　天界寺跡集落

図２　今帰仁ムラ跡（今帰仁村教育委員会 2005, 2007）

柱穴群が確認されている。素掘り溝も検出されているが区画を形成しておらず、また建物との関係については明確ではない。集落として機能しなくなって以降は耕作地と使用されており、その際に大規模な客土造成を行っていた痕跡が確認されている。同様に近接する仲間村跡A地点においても同様の痕跡が確認されていることから、津嘉山の旧集落地帯一帯は中世相当期から近世にかけて居住空間並びに耕作面積拡大を図っていたことが想定される（南風原町教育委員会 1994）。

③　今帰仁ムラ跡（図２）

今帰仁グスクに隣接する集落遺跡で（写真１）、14～16 世紀の遺物を中心に出土している。自然地形に制約されながら造成を行い、建物を配置するといった状況が窺えるが、とくにこの平場を区画するような遺構は検出されておらず、道に伴う遺構も確認されていない（今帰仁村教育委員会 2005, 2007）。また掘立柱建物も検出されているが建物群としての単位や相互の共通性を見ることはできない。また旧地割りが不定形となっていることから街路見られない若しくは不整然な街路が配されていた可能性が指摘できる。

④　花城村跡

竹富島にある集落遺跡で 14 世紀後半から 15 世紀にかけての遺物が主に出土している（仲盛 1999）。花城御嶽と久間良御嶽周辺の石積み囲いが方形となる以外は不定形の石積み囲いで構成される。また街路が全く配されずそれぞれの石積み囲いが直接、連結し全体を構成している。

（２）グスク時代から近世期まで存続した集落遺跡

ここではグスク時代から近世にかけての存続した集落遺跡について取り上げていく。なお、沖縄本島においてこの時期の集落遺跡は多数、発掘調査が行われているが成果としてはグスク時代に見られる様相とあまり変化が無い。

①　当山東原遺跡（図３）

浦添市当山にある集落遺跡 14～16 世紀の掘立柱建物と柱穴群、17～18 世紀の掘立柱建物と礎石建ち建物が検出されている（浦添市教育委員会 2003）。14～16 世紀では無数の柱穴と方向の揃わない建物が見られるが、17～18 世紀になると柱穴は少なく、北西－南東方向に建物の軸が揃う。街区を形成するような溝や石積み等は検出されていないが、建物の方向性が見られる点で計画的な配置が意識されていると解することができる。

②　上村遺跡

西表島祖内の 14 世紀中頃～18 世紀まで続く集落遺跡で、石積み囲いが良好に残存している（沖縄県教育委員会 1991）。方形の区画が一部見られるが徹底しておらず、道は見られるものの全域におよぶものではなく、石積み囲いを連結させた部分も多く見られる。また街区は見られるが整然と配置されていない。なお、南側には慶来慶田城

③　慶来慶田城遺跡

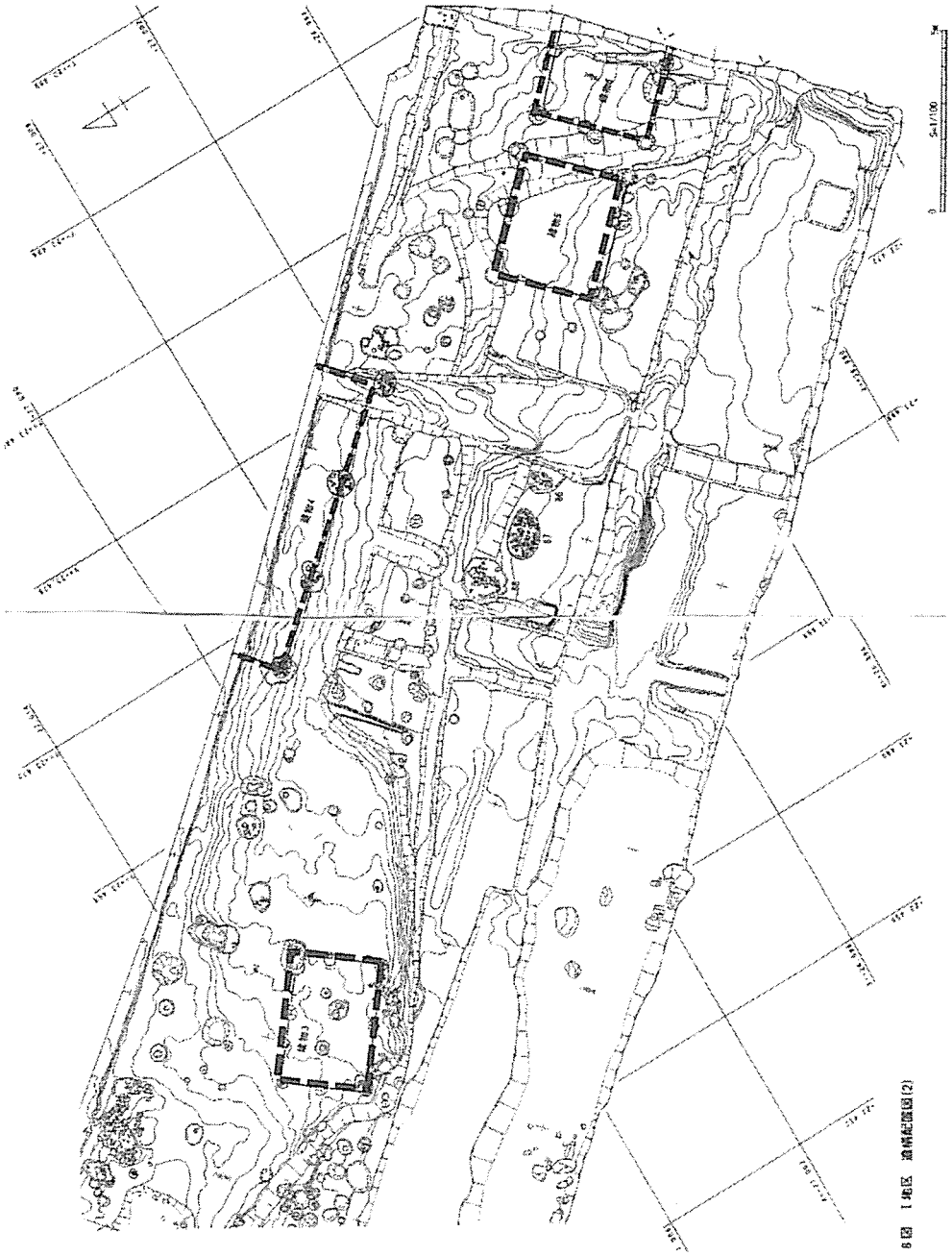


図３　当山東原遺跡（浦添市教育委員会 2003 に一部加筆）

遺跡を中心にした近世の集落遺跡が隣接している。

上村遺跡に隣接する集落遺跡で古手では 14 世紀の遺物が得られているが、主体となる時期は 15 世紀末からで近代まで継続する。相対的に上村遺跡に比べて新しい集落遺跡である。伝承では薩摩在番が当該遺跡の南西部に設置され、その地点からは柱穴や溝状遺構、屋敷内道に関係する遺構が検出されている（沖縄県教育委員会 1997）。また集落内の区画は方形を基本にし、東西と南北軸の碁盤目状に近い形で道を配する南

側と区画は不定形で道が碁盤目状とならず、支道が取り付く北側に分けることができる。

④　上原遺跡

宮古島市池間にある集落遺跡で発掘調査はなされていないが、表面踏査において中国産青磁や青花、沖縄産陶器、宮古式土器が得られている。当該遺跡を取り上げたのは①方形または不定形の石積み区画（以下、区画）を直接、連結させた区域と②道を介して区画を連結させた区域の２つの石積み囲いから構成されており、花城村跡のように中世相当期の様相が窺える①と新しい様相が窺える②が同一空間に存在している点が挙げられるからである。現在の大神神社から近い区画は①が存在し、②はやや遠い位置に存在していることから、区画の聖域化によって、集落の居住域が南東部へ移動していったことが想定される（山本 2004）。

（３）近世期の集落遺跡

当該時期における集落遺跡の発掘調査事例は極めて少なく、全体の様相が窺える事例は以下の３例のみである。この時期の集落遺跡では散居的な屋敷配置が見られる事例もあるが（註１）、とくに街路区画についての成果が上がっている事例を以下に紹介していく。

①　新城古集落遺跡

18 世紀初期まで確実に遡ることができる集落遺跡で、宜野湾市に所在する。小穴や素掘りの井戸と思われる土坑が多数検出されている（宜野湾市教育委員会 1995）。また当該調査においては６本の素掘り溝が検出されており、そのうち５本の溝の方向軸がそれぞれほぼ直角に交差するため方形区画を形成する区割り溝の可能性が指摘される。

②　網取遺跡

1971 年に廃村になった西表島に所在する網取集落の発掘調査を東海大学文学部考古学第１研究室等が実施し、当該集落の変遷と街路区画の形成について調査成果を踏まえた考察を報告書内で行っている。

調査成果から導き出された考察の要点を取り上げると①現在の位置に水稲農耕と住居が成立したのは 17 世紀代で、現在地表面で確認できる主要な基幹道路は 18 世紀後半頃まで遡ることが出来る。②18 世紀後半には２本の幹線道路が交わる四つ辻を使いながら宅地が点在していた。③17 世紀の遺構であるＶ字溝の方向は現在見られる主要基幹道路と同じ軸線となっている。①と②から言えることは 18 世紀後半には集落形成において四つ辻を核とした整然たる街区が備わってくる再編が見られる、そして③では 18 世紀後半に街区を形成する方向軸は 17 世紀代において存在していたことが窺われる。これら調査、考察結果から方形街区の萌芽は 17 世紀でその完成は 18 世紀後半として位置付けることが出来るとしている（東海大学文学部考古学第１研究室ほか 2007）。

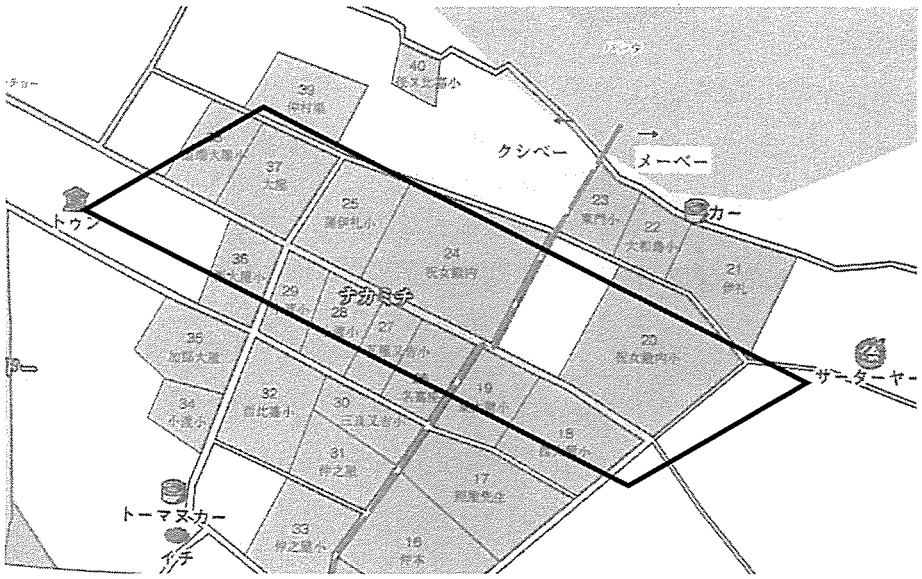


図４　平安座屋号地図（枠内は発掘調査区　北谷島教育委員会２００６に加筆）

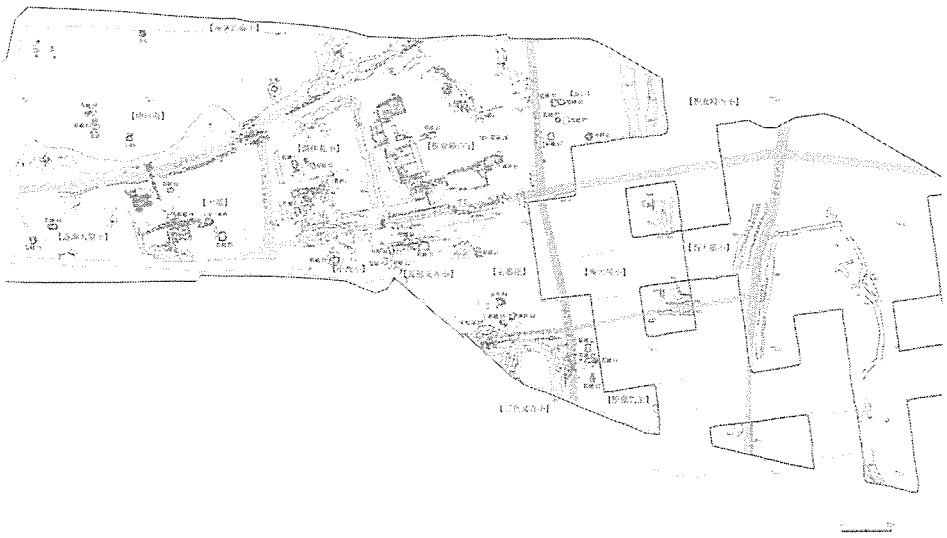


図５　平安座原Ｂ遺跡（北谷町教育委員会２０１６）

③　普天間古集落遺跡（図４、５）

沖縄戦まで存続した集落遺跡で、18 世紀以降の遺物が主体的に出土している。当該遺跡においては屋敷や畑に伴うとされる溝跡が多数、検出されている。これら絵の溝跡はそれぞれ直角に交差に交差し、整然とした区画が確認される。区画の総数 25 あり、それぞれの区画の面積は区々である。また、区画に接して道跡が検出されており、それらは戦前の普天間集落の古写真とある程度整合することができる。注目されるのは柱穴が多数確認できる区画とあまり確認できない区画が見られる点であり、調査区の南東側に前者が集中し、北西側に後者が集中する状況が窺える。発掘調査報告書内ではおそらく前者が居住域であるとの指摘を行っている（沖縄県立埋蔵文化財センター2015）。また、南東部においては面積の狭い区画が比較的まとまって見られ、北西

部は大小の区画が混在しているような状況が見られることも注目される。このことから面積の狭い区画が集中する区域は屋敷地が集中していた区域であることが想定される（註２）。

以上のように近世期の集落の成立を窺う上で３ヶ所の事例を取り上げてきたが、ここで集落遺跡ではないが街路区画の形成を知る上で地割りとの関係が指摘されていることから（仲松 1963）地割りの起源を求めるための事例を以下に取り上げたい。

大謝名軍花原第二遺跡は宜野湾市大謝名にある生産遺跡で 18 世紀まで遡る素掘り溝が５条、検出されている。これらの溝は一辺を５～７ｍとする長方形区画と想定され、とくに用水路として機能した痕跡が見られないため、区画としての意義が大きかったものと思われる（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）。また、この素掘り溝は戦前の地籍図に描かれた地割りと同一のものであることから、そのままこの区画が戦前までの約 250 年の間、踏襲されていったと評価することが出来る。

このように近世期に成立し、戦前まで使われる地割りは 18 世紀にはすでに普及していたと考えられる。またこの地割りは集落内の街区から広がっていったのか、耕作地の地割りから集落内に取り入れられたのかの何れかは現段階において事例が僅少のため判断を下せないが、少なくともその萌芽は 17 世紀頃に求めることが出来ると言える。

３．中世相当期から近世における集落遺跡の分類と変遷

以上、沖縄県内における 15～18 世紀までに存続した集落遺跡を概観してきたが、グスク時代から近世にかけて大きな変化をもたらす要素となってくるのはやはり区画施設であると言える。これまで区画施設による分類は過去に仲松弥秀と高橋誠一によって試みられており、街路区画の様相からその分類を試み、そして変遷についても考察を行っている。ここでは集落遺跡の変遷案を提示していく前に両氏による集落の分類について取り上げ、それを踏まえた形で検証を行っていくことにしたい。

まず仲松は自然発達型の不井然形態と、街路区画が井然と区画されるものをゴバン型形態と２大別し、文献資料の村立て記録によって前者から後者へ変遷するとした。この変遷の意義については 1737 年の蔡温によって実施された地割制の所産であるものと論じた。つまりところ屋敷地造成に制限が加えられたことに大きな意味を有しているとし、首里王府が個人に対して土地利用統制を行ったことの現れであるとしている（仲松 1963）。

続いて高橋は集落内に道路が見られず、不定型な屋敷群は隣接する区画が細胞状に繋がっている八重山の 14, 15 世紀の石垣に囲まれた古村落、そして不定型な屋敷群と推定できる区画は隣接する地筆が細胞状に繋がっている今帰仁旧集落や島尻大里城周辺などを非格子状集落として捉えた。その一方で格子状の区画を有するが、不整形で細胞状に連続する区画、道路網の要素を強く有するものを格子状集落のＡ類型、直線性の強い道路によって構成されている規格的で画一的な格子によるものをＣ類型、その中間的なものをＢ類型として分類を行った。概ね非格子状集落を第１段階、格子状集落Ａ類型を第２段階、同Ｂ類型を第３段階、同Ｃ類型を第４段階と時間的推移を追っている。それぞれの変遷に対する意義については触れていないが格子状集落Ｃ類型出現に関しては伝統的な思想の希薄化も

しくは風水思想に適合した事象によって代替された結果であるとの解釈を提起しているものの、明言は避けている（高橋 2003）。

これら両氏に見られる、街路区画の変化が近世における集落の変化を明示しているとしていることを踏まえて、前章で概観した 12 遺跡について区画する道や溝、石積みの有無、そしてその配置状況や形態を分類基準の軸に据えて新たに類型化した。

街路未配備タイプ

主に明確な建物プランが窺えない簡易な建物が配置され、とくに各建物相互を結ぶ恒常的な道は見られない。建物が存在する空間は平場造成または石積みで囲うといった状況が見られるものの、自然地形に制約されて石積み囲いや平場の広がりが不定形を呈する。また街路を形成するような石積み配置や道路造成等は窺うことができない。

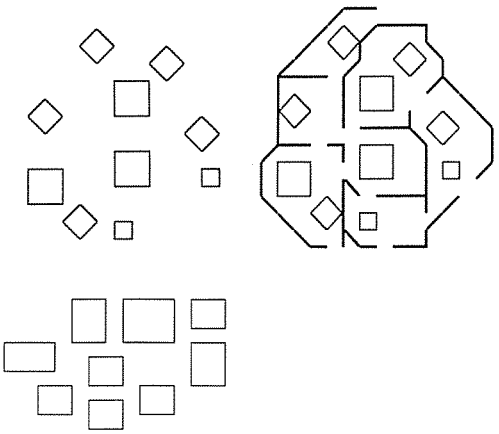


図 6　街路未配備タイプ模式図

街路不井然タイプ

不定形の石積み囲いで街路を形成する石積み配置が見られる。基本的に、地形的制約によって石積み囲いや街路の形態が決定され、規格性はあまり窺えない。因みに現在の奄美諸島地域の集落において当該タイプが多く見られる。

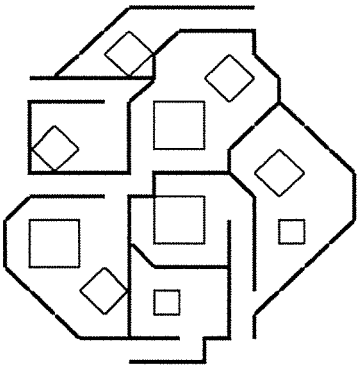


図 7　街路不整全タイプ模式図

井然タイプ

近世以降の集落遺跡に見られるような主に街路による方形の石積み囲いで構成される集落遺跡。石積み囲い内の建物配置は均質的で、各建物の方向も概ね揃う。戦前までの地籍の境界と対応することから、近代ないし現代の集落においても継続されているタイプである。

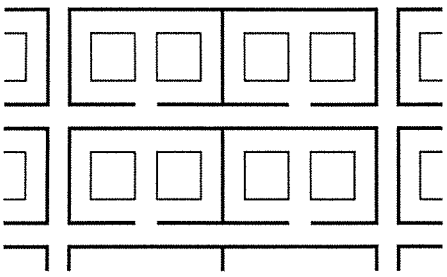


図 8　井然タイプ

実際の集落形態においては各々が単独で構成される場合と複合で構成される場合を見ることができる。現在のところ前章で掲げた集落遺跡の場合、街路未配備タイプが14～16世紀の集落遺跡全て、街路未配備タイプと街路不井然タイプの複合が上村遺跡、上原遺跡、街路不井然タイプでもかなり方形区画としての要素が強くなる慶来慶田城遺跡、井然タイプが網取遺跡、普天間古集落に当てはめることができる。発掘調査事例では街路不井然タイプの単独形態は未だ確認されていないが、現在見られる琉球列島各地に分布する集落はおいては当該タイプの単独形態の多くを見ることができる（仲松1963）。また街路未配備タイプと井然タイプとの複合は現在のところ、全く確認されていない。このことからこの両タイプには長い時間的隔絶があるものと考えることができる。

これらのことを考慮に入れると、街路未配備タイプから街路不井然タイプ、そして最後に井然タイプが出現していったことを想定することができる。そしてそれぞれが相前後するタイプと複合しながら、井然タイプに表徴される方形を基本とした区画を18世紀から19世紀にかけては指向していくこととなる。

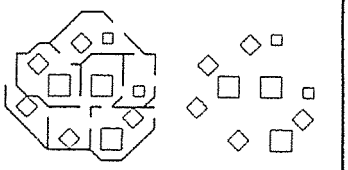
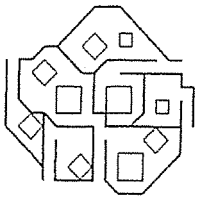
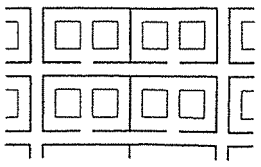
４．グスク時代から近世期における集落の画期について

まず、前章で掲げた分類を仲松、高橋両氏の分類と照合させてみると、仲松の分類においては不井然形態をここで言う街路未配備タイプと街路不井然タイプ、ゴバン型形態を井然タイプに比定することができる。また高橋の分類においては第1段階の集落形態とする非格子状集落でも道を有さない事例が街路未配備タイプに、非格子状集落で道を有する事例と格子状集落Ａ類型が街路非井然タイプに、格子状集落Ｃ類型は井然タイプにそれぞれ比定することができる（註３）。

今回提示した分類と仲松、高橋両氏の分類の対比については表１に示した。集落内に区画が形成され、規格化していくといった一連の流れは仲松、高橋両氏が提示した集落変遷と概ね合致してくると言える。このことを踏まえつつ仲松、高橋による集落研究の成果を加味しながら、街路未配備タイプから街路不井然タイプ、街路不井然タイプから井然タイプへの変遷についてその成立時期と要因について述べていきたい。

まず街路未配備タイプから街路不井然タイプへの変遷は発掘調査事例からおおよそ16世紀に位置付けることができるものと思われる。集落内における街路が成立する背景については確固たる論拠は有さないが、第二尚氏による国内政策の充実が16世紀に展開されてくるのに関連して実施される、幹線道路の整備による影響を指摘することができる。幹線道路は1522年の真玉道の新設や弁ヶ嶽参詣道の改修、1597年の平良橋から太平橋間における石畳道の建造、16世紀初めには綾門大道が既に公道として使用されていた（註４）といったように16世紀代にその設置と整備、管理が首里王府主導により行われていった（名嘉1985）。この幹線道路の設置、建設、整備と集落内における街路設置との関係はおそらく王府による地方統治の中で成立したという背景が窺われる。すなわち、幹線道路網の配備は中央と地方とを結ぶ大きな要素であり、更に地方統治の末端まで把握する上では集落内における街路の存在は必須になってくる。また、集落内における石積み囲い相互が道を介しての往来となることで各石積み囲いの完結性が可視化されていくこととなる。このこと

〈表 1〉分類表

仲松1963	高橋2003		主な事例	模式図
不井然形態	非格子状集落	街路未配備タイプ	花城村跡、津嘉山古島遺跡	
		街路不井然タイプ	仲筋集落、玻名城集落	
	格子状集落A類型			
ゴバン型形態	格子状集落B類型	井然タイプ	網取遺跡、屋嘉集落	
	格子状集落C類型			

は最小生産単位の明確化として意義付けることができ、それは各地域における生産力を把握していく上である程度の指標になっていくことを意味する。

このように首里王府が地方統治ネットワークを配備していく上で集落内の街路の設置を促した可能性が考えられる。この考察を全面的に支持するのであれば、16 世紀における首里王府を頂点とする中央集権化を指向した背景をこの集落形態の再構築から窺い知ることができる

そして街路不井然タイプから井然タイプへの変遷はすでに仲松が述べているように 1737 年の地割制実施に見られる首里王府主導による土地利用統制が主な要因であったと考えることができる。しかし、井然タイプの出現をこの地割制の実施に伴うとするのではなくそれは最終的な決定打であって、井然タイプの出現は網取遺跡で見たように 17 世紀にまで遡る可能性を挙げることができる。また、高橋が伝統的思想や風水思想の変化により格子状集落Ｃ類型すなわち井然タイプが成立してくる指摘も見られることから、17 世紀代に従来まで見られた集落形態の慣習を反故にして集落形態の変遷を首里王府が推し進めたと意義付けることができる。このように集落形態に見られる強制的な土地統制の在り方は 17 世紀から 18 世紀前半における首里王府の地方に対する強い介入であったことを看取することができる（註４）。加えて、以上のような集落形態の変化の意義については 16 世紀が地方統治ネットワークの配備であったことに対して、この時期の集落形態の変化は集落構成員の、可視化できる形での均等化を首里王府が意図していたとも考えることができる。従来までの街路不井然タイプにおいてはそれぞれの石積み囲い相互で不均質な状況が表出されており、それは集落内の階層的、経済的な格差として見て取ることもできる。井然タイプの出現によって各石積み囲い相互の均質化が図られ、それは同時に集落構成員が等しい居住地に割り当てることによって体現される並列化が推し進められていったと見ることができる（註６）。集落構成員の並列化は身分の固定化を促し（註７）、首里王府による地方統治

システムが表面上において末端まで貫徹していったことを意味している。ここにおいて今日も見ることができる沖縄本島や先島諸島の集落形態が完成したと言える。

16 世紀から 18 世紀にかけての 2 度行われた集落景観の再構築はそれぞれ首里王府の地方統治システムと深く関わるものであり、それは中世相当期から近世にかけて模索していった琉球王国の支配構造を読み解く上で欠かすことのできない変化であると評価することができる。

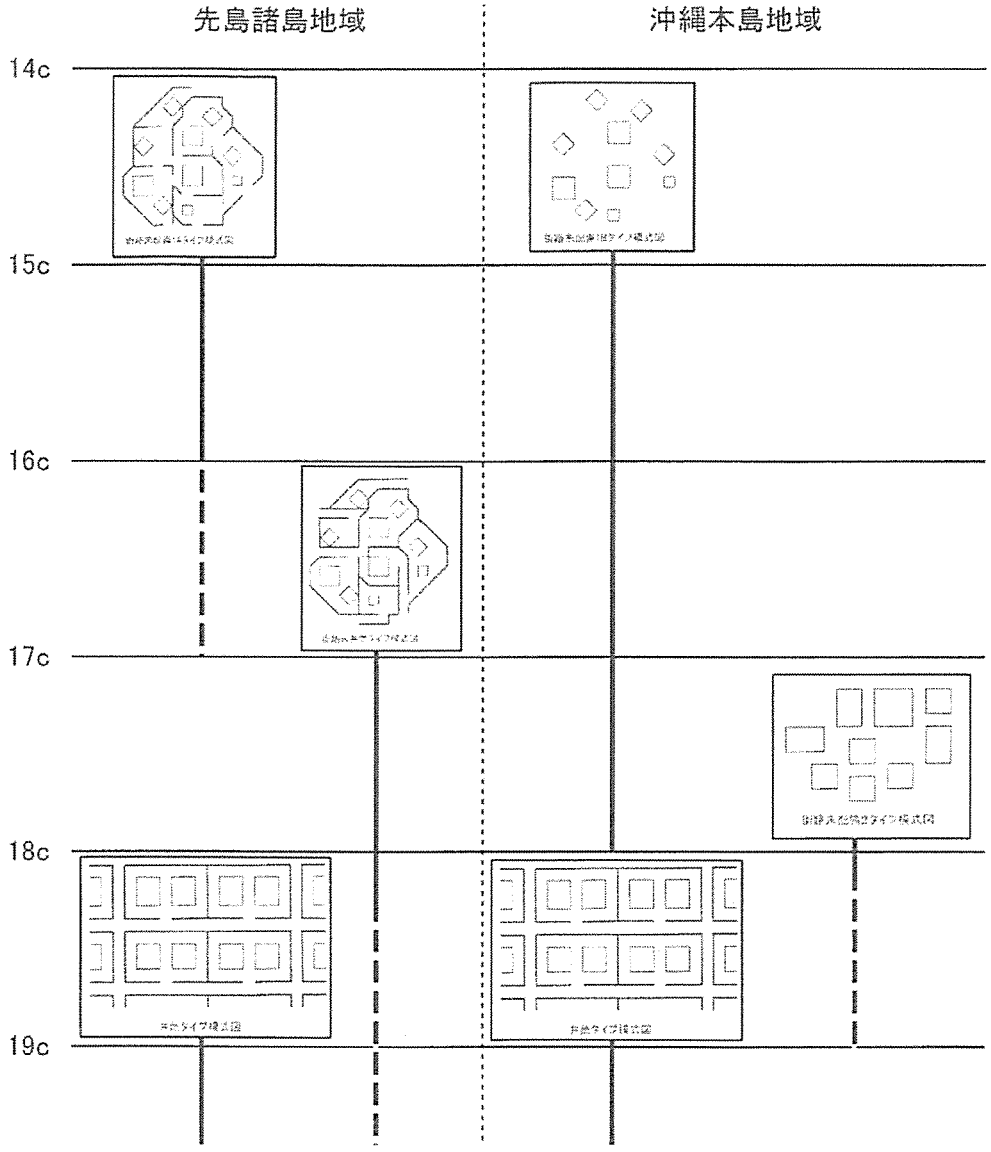


図 9　集落変遷図

5．今後の課題―まとめにかえて－

沖縄県内においてグスク時代ならびに近世期の集落遺跡の発掘調査は小規模な事例も含めて過去５カ年を紐解くと、毎年 10 遺跡以上で実施されていることから（註８）、年々新たな成果が相当数、蓄積されてきている状況にある。また、従来までに見られない集落遺跡の事例が近い将来、確認されることも十分にあり得ることから、冒頭で述べたように本稿は現段階で確認できる事例を集めての考察であり、今後において更なる検証を加えていく必要がある。

他方で、過去において集落遺跡を全面発掘した事例は琉球列島においては現在のところ皆無である。そこで集落遺跡の一部分から集落の全容を窺い知ることを試みることになるが、やはり限界性が常に付きまとうことは必須である。集落遺跡におけるどの属性を捕捉し、そして全体像へ繋げていくのか。今回は集落遺跡の区画に焦点を当てて、その変遷とそこから読み取れる首里王府の支配構造にまで踏み込むことを試みた。その属性を構成する遺構の有り方について具体的に抽出し、比較検討することでその時期における様相の一端が見えてくることを示したつもりである。

しかし、これらはあくまで一属性からの考察でしかない。集落遺跡における他の要素、例えば出土遺物や建物跡、拝所、屋敷内の耕作地、更には立地や湧水地、集落遺跡間の関係などに焦点を当てて検証すれば、また異なる視点での見解が出されることも十分に考えられる。異なる検証結果の突き合せがどの程度まで可能であるのか。集落には様々な属性が当然ながら含まれていることから、それぞれの属性毎に分けて細かく検証すればするほど、集落の全体像が見えてこない状況に陥ることもある。全体像と個別実証を常に意識しながら検証を心掛けていく必要がある。

課題を挙げていけば切りが無いのでこれ以上は触れない。がしかし、発掘調査により明らかになっていく集落遺跡は今後も増えていくことはほぼ間違いないため、それらの調査成果が意味のある形で集落の実態解明の糸口として昇華されるよう、これからも検証を続けていく必要がある。

【註釈】

（註１）うるま市に所在する楚南村跡では山間部に屋敷地が点在する散居的な集落遺跡であることが確認され、当該遺跡からは 19～20 世紀の遺物が主に出土している（うるま市教育委員会 2012）

（註２）昭和 20 年米軍撮影の空中写真では、調査区の西側に相当する場所に屋敷地が見られ、東側は耕作地が展開していることが確認される（沖縄県立埋蔵文化財センター 2015）。

（註３）高橋の A 類型と B 類型の区別は明確な客観的な指標によって区分されておらず、その境界は曖昧としていることから（高橋 2003）ここではＢ類型については割愛する。

（註４）1646 年に記された『正保三年国絵図写』では西海道、東海道、島尻方西海道、島尻方東海道の名称が見えることから既に 17 世紀前半には沖縄本島全域に及ぶ主要幹線道が配備されていたことが窺える。

（註５）首里王府が住居に関して制限を初めてかけた事例は 1532 年と云われており、その内容について詳細は明らかではいない。内容が判明しているものに関しては 1737 年に公布された「敷地家屋の制限令」がある。後者においては総地頭の屋敷は 15,6 間角（225～265 坪）、脇地頭は 12,3 間角（144～169 坪）と定め、平民の家は瓦葺きを禁じた（鶴巻 1972）。

（註６）仲松は 1728 年に蔡温が三司官になって以降、土地の模合持制が円滑に実施され、農村社会の大土地所有者が居なくなったとしている（仲松 1963）。このことからも居住地のみならず耕作地においても並列化が推し進められていったものと考えられる。

（註７）地割制は農民層の中での貧富による階層分解も本来的には出てこない構造であり、沖縄本島における農民層は私的な土地占有が弱くなり、同時に家産も成立しなくなったとされている。（梅木 1989）。

（註８）平成 24～26 年度の沖縄県教育庁文化財課編『文化財課要覧』並びに平成 22、23 年度沖縄県教育庁文化財課編『文化行政要覧』より参照した。

【参考文献】

仲松弥秀「沖縄の集落と土地制度」『琉球大学文理学部紀要』第 7 号　琉球大学文理学部 1963

鶴巻鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房 1972

名嘉正八郎「首里・比謝橋間の交通路」『沖縄県歴史の道調査報告書―国頭・中頭方西海道（Ⅰ）・弁ヶ嶽参詣道―』沖縄県教育委員会 1985

梅木哲人「近世農村の成立」『新琉球史―近世編（上）―』琉球新報社　1989

呉屋義勝「まとめ」『真志喜森川原遺跡』宜野湾市教育委員会　1996

小野正敏「沖縄・八重山の中世廃村」『日本歴史』第 579 号　吉川弘文館　1998

安里進『グスク・村・共同体』榕樹書林　1999

仲盛敦「花城村跡遺跡発掘調査の概要」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社 1999

高梨修「奄美におけるグスク研究のパースペクティヴ」『南日本文化』第 30 号　鹿児島短期大学付属南日本文化研究所　1997

拙稿「グスク時代空間構成試論」『中世城郭研究論集』新人物往来社　2002

高橋誠一『琉球の都市と村落』関西大学出版部　2003

拙稿「沖縄県池間島の廃村遺跡」『考古学ジャーナル』 No.524 ニューサイエンス社 2004

【引用報告書】

沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書―国頭。中頭方西海道（Ⅰ）・弁ヶ嶽参詣道―』1985

沖縄県教育委員会「上村遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第 98 集 1991

南風原町教育委員会「津嘉山古島遺跡　仲間村跡 A 地点　仲間村跡 B 地点　津嘉山クボー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第 8 集　1994

宜野湾市教育委員会「大山岳之佐久原第一遺跡 新城古集落遺跡」『宜野湾市文化財調査報

告書』第21集　1995
沖縄県教育委員会「慶来慶田城遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第131集　1997
那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第42集　1999
那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第43集　2000
沖縄県立埋蔵文化財センター「天界寺跡Ⅰ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集　2001
沖縄県立埋蔵文化財センター「天界寺跡Ⅱ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第8集　2002
沖縄県立埋蔵文化財センター「綾門大道跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第13集　2003
浦添市教育委員会「当山東原遺跡」『浦添市文化財調査報告書』第33集　2003
今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ」『今帰仁村文化財調査報告書』第 20 集　2005
中城村教育委員会「歴史の道『ハンタ道』」『中城村の文化財』第6集　2006
沖縄県立埋蔵文化財センター「基地内文化財Ⅳ」『沖縄県立埋蔵文化財センター』第 38 集　2006
東海大学文学部考古学第1研究室、東海大学海洋学部海洋文明学科、東海大学沖縄地域研究センター『網取遺跡・カトゥラ貝塚の研究―沖縄県西表島所在の先史時代貝塚・近世集落遺跡の発掘調査―』2007
今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ」『今帰仁村文化財調査報告書』第 24 集　2007
うるま市教育委員会「楚南村跡ほか」『うるま市文化財調査報告書』第17集　2012
沖縄県立埋蔵文化財センター「キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書2」『沖縄県立埋蔵文化財センター』第79集　2015

地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落

山元貴継（中部大学）

キーワード：地籍図，土地台帳，隆起さんご礁地形，「格子状」集落，土地所有

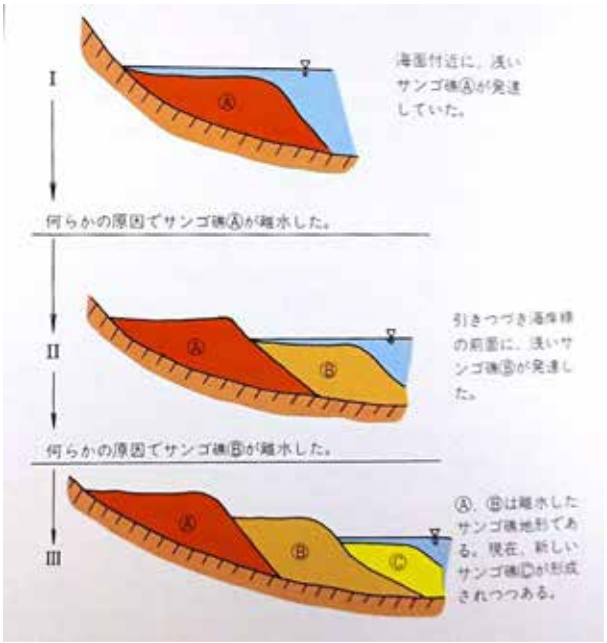
Ⅰ　はじめに

地籍図とは，沖縄県では1899～1903（明治32～36）年にかけて行われた「土地整理事業」によって作製され，以降加筆されながら活用されてきた図面である。そこでは，土地を，宅地や田畑といった地目（土地利用）別・土地所有者別に区分した「地筆（正式には一筆地）」に分け，その測量成果と，「地筆」どうしの位置関係が図面化されている。宮古島では全県に先行して1899年頃に「事業」が行われ，この際に付与された「地番」は，現在でも住所を示す「番地」に流用されている。

一方で土地台帳は，各「地筆」の地税額を決めるために，それぞれの地目や面積，土地所有者と，それらの変化とを追記して記録した台帳であり，その記録を追うことで，特定時期の各「地筆」の地目や土地所有者名・住所を明らかにすることが可能である。

そこで今回の報告では，これらの資料を活用することで明らかになる，宮古島の集落の特徴を紹介する。とくに報告者はこれまで，狩俣集落（第１図）についての分析を続けているが，宮古島の集落が県内，さらには県外の他地域の集落とどのような差違や共通性を見せているのかについても検討していく。一見するとここでの分析は，「土地整理事業」以降についてのものであるが，これが15～17世紀の集落を推定する手がかりになる可能性があることも強調したい。

第１図　沖縄県宮古島市・狩俣集落の位置（□）
（2010年要部修正1:200,000地勢図「宮古島」加筆）



第２図　隆起さんご礁地形の形成（『南島の地形』より引用）

Ⅱ　宮古島でみられやすい地形的条件

宮古島はいわゆる「低島」で，泥岩を基層としてその周囲に発達したさんご礁が，段階的な隆起あるいは海水面の低下に伴って，広く階段状の「段丘」を発達させている（第２図）。また，断層で分断させられつつも，石灰岩堤が島内を縦断する独特の景観をみせている。狩俣集落などでは，詳細な地形データを得ると，狩俣半島の東側を走る最高標高40数メートル程度の狭い泥岩丘陵の東側に，4～5段の段丘面を発達させ

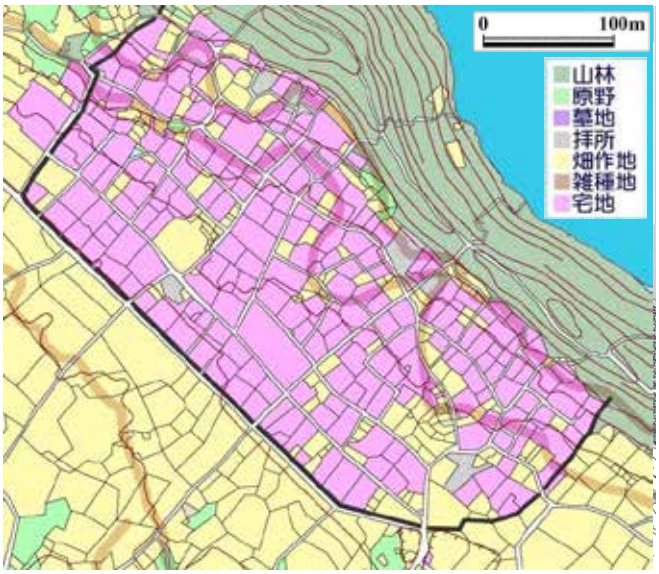
第３図 狩俣集落およびその周囲の標高と地形概要
現地調査・国土地理院PIデータより作成）

ていることが明らかになる（第３図）。さらに，これらの段丘面は，丘陵の高低に合わせて侵食を受け，約80～120m間隔で並走する谷に刻まれている。

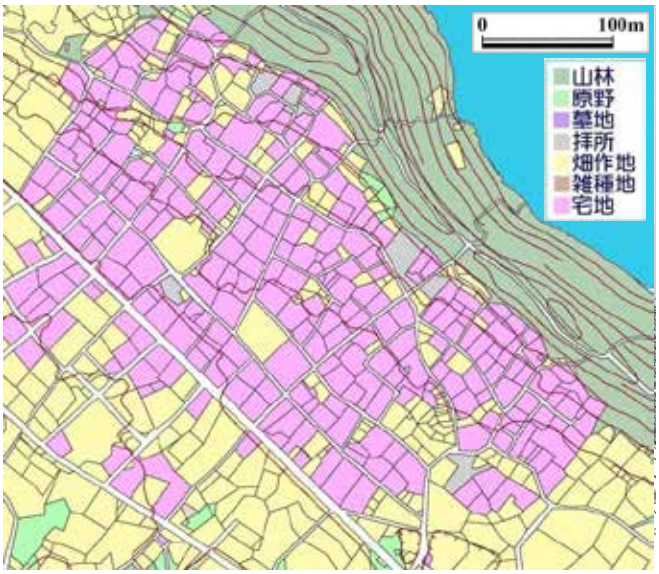
そして，狩俣集落に限らず島内の多くの集落が，これら丘陵や石灰岩堤のピークの直下に，「ムトゥ」（元家）など古くからの居住地のこん跡をみせてきた（第４図）。こうした場所は，冬の寒い季節風や台風時の暴風を避けるために有利であるだけでなく，丘陵や石灰岩堤に降った雨水が隆起さんご礁地形である段丘面の地下深くに浸透する前の，比較的浅い地点で得られやすい。現在に至っても，島内の集落の多くは，

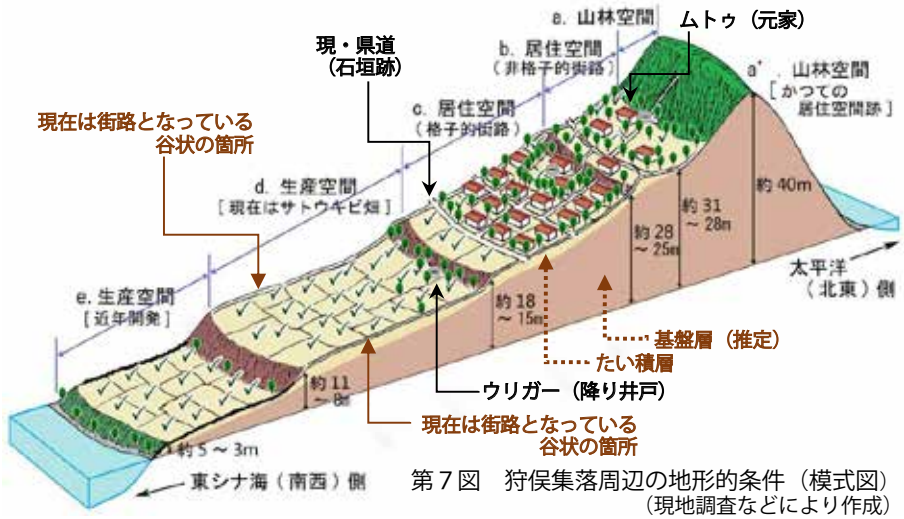
上位の段丘面の範囲に限定して発達している。

ところで，これら上位の段丘面は1771（明和8）年に発生した地震による「明和大津波」での大きな浸水被害も免れた可能性がある一方で，震源に近かった島の南部では多くの集落が被災し，以降再建，あるいは新規の創設など「村立て」された集落の多くは，それ以前からの集落とは異なる景観をみせることとなる。1730年代から「首里王府」は，土地の共有と交換とを前提とする「地割制」や，屋敷地の面積規制などを求めたが，それらを受け入れた地域では，南北方向には一軒分，東西方向には数軒分の屋敷地を並べた「横一列」型街区が多く並ぶことに象徴される，いわゆる「格子状（ゴバン型）」集落での「村立て」が進んだためである。宮古島は「人頭税」の存在もあり，「地割制」の受け入れには積極的ではなかったとされるが，「横一列」型の



第５図 1899年頃の狩俣集落一帯の地目（土地利用）分布
第４図と同範囲。黒太線は石垣の位置（推定）地籍図などより作成）





第７図　狩俣集落周辺の地形的条件（模式図）
（現地調査などにより作成）

第８図 狩俣集落およびその周囲の地形と1899年頃の土地所有
地籍図・土地台帳より作成

街区自体は，宮古島でも各地でも広く採用された。

III　狩俣集落を対象とした分析

狩俣集落について地籍図・土地台帳を活用して復元図を作成すると，同集落の大きな特徴である「石積み」あるいは「土塁」に明確に囲まれた1899年当時の集落の姿が明らかとなる（第５図）。その後，1910年代前後の「石積み」などの撤去を経て集落は下方に拡大した（第６図）が，それでも宅地（屋敷地）は，現在に至るまで基本的には下位の段丘面には到達していない（第７図）。開削に高い技術を必要とし，近年まで表層水の侵入を防ぐことの難しかった「ウリガー（降り井戸）」の改良を待つ必要があったことと，「明和大津波」への記憶の影響が想定される。

そして，土地台帳の各「地筆」の記録確認と相互参照とを行うと，各家の宅地（屋敷地）がどのように立地していたのかが明らかになる（第４図）。そこでは1899年当初，狩俣集落の中でも旧根井間村側では，尾根状の箇所の最上位に根間家関係者の屋敷地が，その直下に狩俣家関係者の屋敷地が集中し，一方では旧狩俣村側では，尾根状の箇所の最上位に狩俣家関係者の屋敷地が，その直下に根間家関係者の屋敷地が集中する傾向がみられた。これら二大姓以外の方々の屋敷地は，谷状の箇所や下方の多くを占めることとなる。そしてこれら二大姓以外の方々の屋敷地には，比較的遅い時期に宅地化したところも含まれ，多くは海岸まで続く街路に開口部（門）を向ける形となる。こうした各家の関係者の位置関係は，より下方の農耕地の所有関係にも反映されていた（第８図）。

さらに注目されるのは，狩俣集落の二大姓関係者の屋敷集中地にみられる，独特な景観とスケールである。これらの屋敷地は，しばしば，尾根状の箇所を走る街路の突き当たりに位置し，周囲に樹齢の古い屋敷林を繁らせている。また，後に分筆（分割）も経験することもあったものの，本来はかなり広い敷地であったことが想定される。こうした景観と屋敷地のスケールは，県内

第9図　狩俣集落の分析から想定される
屋敷地の拡大・街区の再構成
（他地域ではこれに横方向街路が多く加わる）

他地域の「格子状」集落とは遠く，一方では，鹿児島県における「麓集落」の景観やスケールなどと近い。

Ⅳ　狩俣集落の分析などから想定される集落の発達過程

以上のように，「事業」以降も人々は段階的に，谷状の箇所や下方の段丘面に集落を拡大させ，一方では尾根状の箇所を分筆（分割）してきた。こうした変化はあくまで「事業」後の傾向であるが，これらを逆算すると，「事業」以前の集落の発展過程を推測できる可能性がある（第９図）。

すなわち，「グスク時代」以降，人々が丘陵地から下りてきて各地で現在の集落のルーツとなる「村立て」を行ったとされるとはいえ，当初は丘陵や石灰岩堤のピークの直下に，少数の屋敷地が，農耕地（いわゆる「アタイ」）なども抱えた広大な敷地をもって立地していたにとどまっていたのではないかと考えられる。尾根状の箇所に伸び，屋敷地に突き当たる街路は，これらの屋敷地へのアプローチであったかもしれない。

その後，大雨時には鉄砲水も流れ，危険であった谷状の箇所が街路として活用できるようになると，そこにも屋敷地が設けられ，代わって，丘陵や石灰岩堤のピーク直下の屋敷地では，敷地内の農耕地を分家に活用したり，なかでも象徴となる屋敷地を「ムトゥ（元家）」など聖地化していったりしたのではないかと考えられる。

こうした地籍図・土地台帳の分析から求められる想定を検証するために期待されるのが，考古学などの成果との連携である（第１０図）。想定によれば，尾根状の箇所の屋敷地は谷状の箇所の屋敷地に先行し，さらに前者には農耕地であった場所を含み，後者は近い時代まで粗放的な利用や，農耕地としての利用にとどまっていた可能性があって，それらは，埋蔵物などから検証できるかもしれない。また狩俣集落では，集落西方の丘陵地内に山林や畑としては小規模すぎる「地筆」が点在し，これらは「グスク時代」前後の屋敷地や耕作地であった可能性がある。同集落の大きな特徴である「石積み」なども，規模が大きい箇所では独立した「地筆」となって特定しやすいが，小さいところでは「地筆線」に過ぎない。どの「地筆線」がそれに相当するのか，発掘調査が望まれる。

Ⅴ　おわりに

以上のように宮古島の集落は，島の隆起さんご礁地形を非常によく読んで発展してきたことが，残存状態の良い土地台帳などの分析から明らかになる。他地域では確認が難しくなってしまった島の集落の歴史的な営みに，大きく注目したい。

第10図　地籍図・土地台帳の分析から求められる狩俣集落の注目される箇所

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業
第５回シンポジウム　総合討論

石井龍太 (城西大学准教授)
山本正昭 (沖縄県立博物館・美術館)
山元貴継 (中部大学教授) 総合討論
久貝弥嗣 (宮古島市教育委員会)
司会　鎌田誠史 (武庫川女子大学教授)

久貝春陽：それではお時間になりましたので、これより総合討論の方を始めてまいりたいと思います。総合討論の司会は、武庫川女子大学の鎌田誠史先生にお願いしたいと思います。鎌田先生よろしくお願いします。

鎌田誠史（以下、鎌田）：よろしくお願いします。少しだけ自己紹介をさせて下さい。鎌田誠史と申します。武庫川女子大学に勤めています。武庫川女子大学という大学は、女子大生が一万人いるという、日本一大きな女子大学です。甲子園がある西宮市に大学があります。私は沖縄にも８年間くらい住んでいました。首里城の復元の設計を行なったり、それに関する世界遺産周辺の例えば番所（昔の役所）の再現整備や、そのほかにはまちづくりにもたずさわったりしてきました。専門は建築設計やデザインで、研究としては山元先生と一緒に沖縄の近世村落の空間構成の検討を行っております。

本日は足元の悪い中、大勢の皆さんにお越しいただきまして本当にありがとうございます。あと一時間くらいですが、最後までお付き合い下さい。せっかくなので、総合討論はざっくばらんにやりたいと思っています。私達も宮古島にはお世話になっています。このような研究は、ここに来て下さった皆さんがいるからこそできる仕事であると思っています。

さて、今回は質問票を皆さんにお願いしたところ、たくさん書いていただきました。ありがとうございました。これらの質問を、まず先生方と共有しながら、それぞれふっていきたいなと思っています。

今日のシンポジウムのお題をもう一回読みますね。「宮古諸島における 15 世紀から 17 世紀の集落、残されたモノから読み解く」ということです。残されたモノというのは、例えば考古学でいえば遺物になりますよね。そして、山元先生や私のような建築学とか地理学から見ると、例えばそれが地籍図とか、古い写真などもモノということになります。そういったモノからいろいろ宮古島の集落が描き出せたのではないか、一側面ですけど本日の先生方の報告によって描き出されたのかなと思っています。

それらをふまえて、会場の皆さんから質問が寄せられています。まずは山本先生にですが、「集落形態が非常に興味深く、面白く拝聴させていただきました」とい感想をいただきました。報告の中で、それぞれの集落の存在する周辺の地形というのは例えばどういった場所だったのか、４つくらい事例をいただきましたよね。そういった事例がどういった場所なのか、という質問が来ています。もう一つありますが、まずは今の質問についてお願いします。

山本正昭（以下、山本）：沖縄本島の事例で言いますと、最初に現れてくる不規則に建物配置する井然の

形のものとは、いわゆる拝所のすぐ麓やその近くに立地するというパターンが多くみられるかなという印象です。沖縄本島では、「フルジマ」とよばれている場所になります。何々古島遺跡とか、遺跡名として登録されていたりするんですけれども、集落の中でもわりと標高の高い所にそういったものが立地している印象があります。井然型、山元先生が「格子状」とされました、整然と街区が区画されている集落はですね、それ（フルジマ）より少し下方に立地している傾向があると思われます。そういった意味では、時代が新しくなれば下の方に、逆に古ければ少し上の方に立地しているといった違いがみられるのかなと、思います。

鎌田：ありがとうございます。それからもうひとつ、私も同じ質問です。家屋の石積み、石囲みが無い事例というのが過渡期にありましたよね。真ん中くらいの時に出てきますけども、私も不思議だなと思っていました。今分かっている範囲で結構ですので、そういったものがなぜ出て来たのか、例えば沖縄の環境は結構厳しいですよね、その中で何から護っていたのか、もしくは地形でうまく護られていたのかお分かりであればご教示下さい。

山本：囲いが無いというのは、いわゆる石積みとか土塁などの構造的にしっかりとしたものを構築としていないということで、場合によっては臨時的に柵列のようなもの簡単に区画できるような構築物があった可能性もあります。他には、古い昔の沖縄の写真を見ると、チニブとよばれるような、いわゆる植物質のもので編んだ、塀といいますか、簡単な区画施設があったりします。あくまで遺跡から出てくるモノに関して言うと、区画は確かにみられないんですけど、そういった痕跡として残らないものがあった可能性がひとつあるのかなと考えています。あともうひとつ、当山東原遺跡の事例でも紹介しました、階段状、ひな壇状に緩斜面に立地している集落に関しては、石積みを回すのではなくて平場をそれぞれ構築することによって、屋敷の単位が明確化されていくような場所も考えられます。言ってみれば、16 世紀段階で集落というのは石積みを巡らさなくて、臨時的なもの、もしくは地形に即した屋敷の範囲をつくっていた可能性もあるのかなと考えています。

鎌田：地形を読みながらということですね。例えば私が以前に本日もお越しの富山国際大学の浦山隆一先生と一緒に廻った、伊良部島の国仲の集落は周りに山すらないんですよね。平坦な場所でも微地形をうまく利用しながら宅地を配置しているようなパターンも見受けられましたので、先ほどの山本先生のおっしゃったことも深く理解できました。ありがとうございました。

さて、どんどんいきましょうか。石井先生に少し教えていただきたいです。狩俣集落の石垣を積んだ人というのは中国からの渡来人という報告がありましたが、その根拠について教えてほしいという質問です。というのは、もしかしたら津堅島の人だという説もあるのではないかということをおっしゃっています。私も全然分かっていないので、もしお分かりであれば、根拠を示していただきたいなと思います。

石井龍太（以下、石井）：僕が聞いたのは、渡来中国人が津堅島から来たといった記憶があって、引用文献を明確に示せないんですけれども、クバラパーズという人物がいて、霊能力で壁を造ったという話があったと思います。14 世紀というのも、何が根拠で言われているのかよく分からないんですけど、そういう伝承があるということですね。年代などについては、私もそれを確かめたいなと思っております。

鎌田：なるほど、雍正旧記に書かれている可能性があるのではないでしょうか。

石井：お隣の中国には、平面が直線形の集落があります。だから、この伝承に引っ張られすぎない方が良いだろうと思うんですけど、繋がりを考えたら面白いかもしれないし、土塁をめぐらした事例は

かつて那覇の久米村にあったと、それは居留中国人の区画だったという話もありますので、断片的に面白い所だけを繋げると面白いんですけれども。

山元貴継（以下、山元）：石積みについては、私自身、韓国の方でも研究していますので、その狩俣の石積みも含めて、沖縄県内各地の石垣について、アジアとの関係をもう少し考えてみても良いんじゃないかと思います。例えば、津堅からという話も出てきますし、沖縄ですといろいろと風水に関する話というのはしばしば久米をはさみますよね。しかし、この久米というのは、久米にずっといらっしゃった方々を指すのではなく、この久米に渡って来られた中国の方々がという可能性があり、そしてさらには津堅も、もしかしたら中国から来た方などが津堅を経由して渡来したというのも否定できないわけです。なので、私の専門の地理学ですとそこまで技術については細かくは研究していないのですけど、石積みの周囲にどういう遺物が一緒に含まれているのかに興味があります。さらには、石垣・石積みの研究によると、そこにあった石を単純に積むわけじゃなく遠方から運んできて、最初からかなり削ってきちんとかみ合うように積むという技術というのは中国で発達しますし、例えば国内でも、熊本とか長崎でかなり技術を高めた地域があります。ですので、東シナ海というひとつの大きな海を挟んで、もしかしたら漂流という形かもしれませんけども、交流の中で沖縄の石積みが造られたという可能性が出てきます。県内の各地域で、何島から来た、中国から来たという色々な伝承が出てくるのは非常に興味深いことで、実は裏にどういう関係が本当は隠れているのかついて、伝承を細かく確認したり、あるいは考古的な知識から石をどう切った、どのように積んだかというのを含めていろいろ検討ができたりと、実は楽しい世界が広がっているのではないかと思っています。

鎌田：ありがとうございます。

会場（女性）：石井先生に伺いたいんですけれども、どこで中国からということを？文献で？

石井：いますぐには呈示できないんですけど、狩俣内にはそういう立看板があったのが記憶にあります。この時代、14 世紀からたぶん 16 世紀くらいまで、外国人技術者が比較的…私は少し焼物やっているんですけども、焼物の世界もそうで、おそらくいろいろな技術を持った外国人が琉球にやって来たり、出て行ったりの時代であったと思うんですね。だから、集落内の施設を造るにあたって、そういう人達が関与したというのもあながちないにしろ、突き止められたら面白いなと。遺物でいうのは難しいので、造り方とか遺構で攻めた方が妥当かなと思います。

鎌田：会場から手が挙がっていますね。マイクをお願いします。

会場（男性）：大浦集落ですね。大浦集落の人達は中国人だといわれています。なので、中国人は宮古にいたんじゃないかなと思っています。

山本：中国人と結びつけられるかどうかという話に併せてですが、石井さんの報告についてちょっと批判めいたことになって恐縮なんですけど、よろしいでしょうか。

石井さんの報告の中で、発掘調査の最下層のⅥ層は非常に締まった土ということで、集落を囲っていた囲いの基礎といいますか、一番核になる部分じゃないかと報告にありました。このⅥ層について石井さんは、近代ということで位置づけされていましたけど、実は遺物は出てないんですよ。自分も、さっき映像にあったように発掘に参加させていただいて、Ⅵ層がかなり硬く締まっている状況は確認しています。土をかなり硬く締めるという技術が狩俣の集落の中で醸成できるのかと。土をかなり硬く締めて積み上げるという技術も、やはりある程度の高度な技術がないとできないんじゃないかということも考えた場合、あれが近代の土とは考えられなくて、それを運輸するのであれば、外からの技術ということもひとつ言えるんじゃないかなと考えています。石井さんも近代

とは断定しておらず、近代か？ということで紹介されたと思うんですけれども、その辺のことについて、石井さんに逆に、Ⅵ層が近代であるという根拠について教えていただければと思います。

石井：ご質問としては、ひとつは近代なのか？もうひとつが狩俣のものなのか、外国の技術だということですか？

山本：まずは時期についてお願いします。

石井：はい、年代は書いてあります通り、無有物層なので特定は難しいです。平坦地にいきなりこんもりなので、人工的なのは間違いないだろうし、炭が混じっていることから人為的なものかと思っています。年代の根拠は今言ったとおり、遺物がないので特定はできないんですけど、すぐ上に食い込んでいる石と貝にはガラス瓶や沖縄産陶器が混ざってます。山本さんは、近代ではなく 14 世紀とか 15 世紀の土だとお考えですか？

山本：それを期待したいなと。

石井：では、14 世紀の土の上にいきなり近代の土が来ている？

山本：それがあってもおかしくないと思っています。そもそも遺物が出てないですから。

石井：遺物が出てないということは、その年代がよく分からないということになりますよね？

山本：そうです。

石井：よく分からないから 14 世紀でもいいということですか？

山本：いや、だからといって近代かどうかも分からないですよね？

鎌田：いつもの飲み会の雰囲気になってきましたけども。

（会場笑い）

石井：止めてくださいよ。

山元：今、こうやって我々が見ている年代についてですが、一世紀の違いは実はすごく大きいですよね。先ほどから、例えば中国からというけれども、中華人民共和国というのは 1949 年からですよね。韓国、朝鮮半島を研究していると、朝鮮からと言われても、新羅なのか？百済なのか？そこから考えるとこなんですよね。今後研究を発展させていきたいのは、同じ朝鮮半島でも、例えば遺物が違うだけでなく、新羅系の城と百済系の城とでは石の積み方が違うんですよね。それぞれ、雨の少ない地域と多い地域ですので。だとすると、雨が降ることを前提に石を組んでいたのか、降らないから適当に積んでも良かったのか、それが中国の中でも絶対出てくるはずです。その中で、例えば中国から来た、この一言を言うだけでも、今の中国ではなく、それこそ沖縄では中国と言えば福州、福建省になるのですけども、そう断言して良いのか、もしかしたら中国の北方の方々かもしれないです。

また、中国の城と言うと、だいたい方形の、羅城のイメージが出てまいりますけども、中国でも地方の城や、朝鮮半島の城と言えばかなり円型を基本にするものですから、実は狩俣の石積みが集落を丸く囲んでいるのを見て、私は韓国研究者として、少し懐かしいイメージを持つんですよね。そのルーツは例えば中国か？下手すると朝鮮半島か？いろいろ考えると実は幅が広がって、私たちの酒の肴としては面白いんですけれども。

こうして考古の方々や私を含めて、たった一世紀の違い、いや数世紀の違いと言ってなぜ我々が盛り上がるのか、ぜひ興味を持っていただければと思います。これと、中国から来たという伝承が組み合わさることによって、いつの時代の中国それも中国のどの地域の影響を受けたのか、それについて考えると、我々としては夢が広がります。そういった、年代も含め分かるようなさまざまな伝承などご存知の方がいらっしゃいましたら、我々にお教えいただければと思います。

鎌田：ありがとうございます。次に元島の話ですね。今回、友利と新里の元島について紹介していただきました。この２つの集落は、どちらも明和の津波で同様の被害を受けたと考えられるということなのですが、友利の集落が 19 世紀まで継続している一方で、新里の集落が 17 世紀までしか残らなかったということは、すごく疑問に思います。この点について、見解があれば教えていただきたいという質問です。

久貝弥嗣（以下、久貝）：友利と新里の集落の終わりなんですけども、友利は 19 世紀まで継続するのではなく、1771 年、乾隆 36 年の大波の段階で下の方にあった元島の集落は大きな被害を受けて、上の方に上がっていきます。友利の元島はインギャーあたりの海岸線に近い所に立地する遺跡ですが、発掘を行うと津波の層が確認されます。というのも、向こうは津波の被害を受けて、その後集落は移動してしまうので、逆に津波の堆積層がよく残されているんですよね。なので、津波が来たかどうか、非常に分かりやすい地域であるなと思います。一方で新里の方は、海岸線から近いのですが、標高は友利の方よりもちょっと高いんですよ、標高 14 メートルくらいの場所にあって。新里の方では明らかな津波堆積層というのは確認されていません。新里の方は 16 世紀終わりの方で、17 世紀のものも少し出ますけど、だいたい 16 世紀終わりの方で集落の活動が終わりを迎えるというのは、津波とかではなく別の要因があるのだと思います。少なくとも、僕が見た新里の西元島のところは津波堆積層の層は出てないので、それとは違った原因で集落が移動したのか廃村になったのか、そういったことが考えられるのかなと思います。

鎌田：ありがとうございます。これ、私も今日初めて聞いて、興味深く感じています。つまり、生き残った集落と消滅した集落があるということですよね。それは、必ずしも津波によって無くなったからだけではないということですが、ズバリ原因は何だとお考えですか？今言えることとして、要はレジリエンスとして村落が持っていたキャパシティみたいなものがあって、水の確保の問題とか総合的な要因だとは思いますが、今のなんとなく思われていることがあればお願いします。

久貝：正直分からないんですけども、16 世紀に終わる遺跡として、新里西元島と国仲元島の二つを紹介しました。新里西元島の方は近くにキャーザガーがありますが、国仲元島は水事情というのがあまり良くない気もします。ただ、それが原因で集落が廃村になったのか、移動になったのか分からないです。実際に出土遺物の年代がそこで終わってしまうので、移動しているのかもしれませんが、どうして移動するのか等を含めて、今のところは思い当たる節はないですね。

鎌田：今日来てくださった方も疑問というか興味があると思うので、もし他の先生方で意見があれば、こういうことも考えられるのではないかということがあればいかがですか？

山元：津波で全部やられたと考えられるのは非常に単純で、その跡で例えば村を再建できたか、できなかったのかという条件が多分出てくるでしょうね。それは、例えば周りの漁場が豊かであれば、農業で厳しいかもしれないけども漁獲の方でやっていけたと思います。あるいは、津波の被害も比較的穏やかであったとか。津波というと皆さんご存知のように、石がばーっと運ばれてきたり、田畑があったところに塩が残ったりするので、しばらく農業は厳しいんですよね。今も多良間島の塩川、こちらの方は明和の津波で完全に沈んでしまったので、未だに塩川に行くと、完全には沈まなかった仲筋側の田畑と比べた時に、収穫がどうしても落ちるという言い方をされます。そういった結果、例えば集落をなんとか再建してみたけれどもやはりうまくいかなかったということが起こってくるかもしれないし、あるいは、もっと遠い所で先生方から話が出たと思うのですけれど、首里王府と各地域間の関係もその後大きく変化しますから、宮古島だと平良と比較的早く直結すればその後も発展できたかもしれない。ちょっと時間がかかることになってくると、貨

幣経済なども入ってきた時にうまく太刀打ちができなくなって、村を捨てて新しく村建てをした方が良いという選択をするということも起こってきたと思います。そういったことも含めて、単純に理由づけできないところがあるので、これから先の課題だと思いますね。

石井：廃村の話で時代は新しいですけれど、18 世紀から以降の集落遺跡を八重山でいくつか掘っていて、安良村というのが石垣島の北部にありまして、いわゆる明和の大津波で 500 人近くいた人口が 20 人にまでなった村なんですけど、廃村が許されなかったんです。その後もずっと 20 数名のまま存続して､20 世紀の頭についに廃村になるんですけど｡つまり廃村したとかしなかっただけじゃなく、廃村が許されたか許されなかったのかというのも多分あって、私が見ている限り、近世の終わりの頃は村を潰さない、人口が減ったらよその村から移してきても維持するということが文献によく出てくるんです。廃村になるのは近代以降のことで、廃村自体が、僕は近代的な現象だと思っています。廃村にはだいたい 3 回位ピークがあって、ひとつは人頭税が廃止された段階です。つまり、移動しても許されるということで、それまでは移動すると村に迷惑がかかるので移動ができなかった。次に、戦後の米軍の統治収拾時にも結構村が無くなっています。もうひとつは、本土復帰の時の僻地の集落で、とくに西表島の西部辺りはどんどん村が消えるという現象があったのですけれども、移動の自由が認められるというような意味合いでも消えていったりしますので、話は複雑ですよね。これらのタイミングではない、16 世紀後半で考古学上な大きな変化として認めうるとすると、貿易陶磁器の急速な減少でしょうか？

山本：石井さんが研究を進められている窯業の視点からはいかがですか？

石井：16 世紀後半は、比較的大きな動きが沖縄本島を中心に考古学上発生しているタイミングです。それまでに潤沢に入ってきた貿易陶磁器が減少していって、自分たちで自分たちの焼物を作り始める時代ではあるんですね。そのような点で 16 世紀後半は大きな動きがあった時代ではあると思います。その対比的なものも含めて貿易構造の変化とリンクさせていくことはできますか？突飛すぎます？

久貝：宮古は窯業が無いんですよね。宮古の人は近世、近代入っても土器を作り続けるんです。沖縄本島の方でそういった動きみたいなものはあるのかもしれないけれども、それが直接、宮古に影響を及ぼすほどのものではなかったかなと思います。

石井：焼き物の減少に見られる、対外的に頼れなくなるというのは、自給し始めると僕は思っているんですけど、16 世紀以降の宮古も同じだと思うんですよ。焼物だけではなく、このタイミングで何かしら変化があったとは考えられませんか。

久貝：沖縄本島では土器を作らなくなって、窯業で賄っていくようなものの何かですか？

石井：それは、我々考古学者だったら窯業製品と見ていきますけれども。

久貝：宮古に窯業自体が無いので、それに代わるものを作るのではなく土器を作り続けるという流れの中で、そこまで焼物が変わる、土器が変わっている様相もないので、そこら辺のインパクトが分かりません。

石井：宮古にあった、16 世紀後半に集落が消滅するような大きな変化というのはみられないということですか。

会場（女性）：久貝さんにもう一点だけ質問いいですか？新里西元島の方からはあまり津波の影響が感じられないという話でした。ゴルフ場辺りに元島があったということなんですけど、ゴルフ場あたりは発掘作業を行ったことはありますか？

久貝：僕が発掘を行ったのは 1 回しかありません。ですので、発掘をした場所で津波の痕跡が出ていない

というだけで、新里も津波の被害は受けていると思います。なので、何かしら海岸線近いところでいうと津波堆積層というのはあると思います。

会場（女性）：ゴルフ場になっているところは、発掘作業は可能なんですか？

久貝：できないわけではありませんが、学術的にやるのが一番かなと思います。津波堆積層を研究されている方は結構いるので、単純に発掘作業するだけではなく、ボーリングなどの調査方法も含めて、津波堆積の研究を進めていくことができるのかと思います。

会場（女性）：ありがとうございます。

鎌田：では質問の方を続けてまいります。狩俣の集落についてお二方の先生に発表してもらったわけですが、石井先生に一個ずつ答えて頂きたいなと思っておりまして、それからまた山元先生にもお願いします。まずひとつ目としては、ちょっと思い出していただきたいのですが、集落の北側から発展したのではないかとおっしゃっていましたが、北側に遺跡が多いのは中国との交流が影響しているのか、または生活用品の漂流物とかでそういったふうに言われたのかなという質問なのですが、いかがでしょうか。

石井：北側の遺構が多いのは中国との交流がどう、という質問でしょうか？

鎌田：はい。そうですね。

石井：直接交流があったかというと、それはあまりそれは想定していないですね。

鎌田：北側の遺構が多い理由についてはいかがでしょうか。

会場（男性）：現在、この島の北側は生活しにくいです。にもかかわらず、南側よりも北側の方にそういう集落が多かったという報告でした。今ではそれらの集落が無くなって、だいたい南側で生活しています。それはどういうことかというのが質問です。その北側というのは断崖絶壁で、漂流物があるからそれを拾って異文化と交流があったのか、それとも中国から来るのに具合が良かったのか。海に下りてくのも今では大変ですけども。そういう意味の質問でした。

鎌田：なるほど。

石井：そうですね。背景にまで僕は迫りきれておりません。残念ながらですね。地理学的には住みやすかったかどうかは山元先生からコメントいただきますけども、たぶん狩俣一帯は、僕の中では比較的住みやすかったのではないのか、というご意見をお持ちだったようです。私が言ったのは、現象として北側というか山側に行った方が遺物に古いものが多いんです。南の方が新しいです。人の移動と広がりがそう見えるという現象をご説明いたしました。

山元：地理学的にという話が出てきましたけども、狩俣の住民の方々はよくご存じの通り、かつては海側の方に下りることができまして、今でも磯津の御嶽が残っているわけでございます。北側の方は太平洋に面しておりますので、悪く言えば波も荒いですが、一方では、船などがついたり、あるいは太平洋の広い地域からの漂流物も流れ着いたりするので、そういった海からの交流を考えやすい。逆に南から西側というのは、今は埋め立てでだいぶ変わってしまいましたが、イノーとなっていてよく言えば漁業的には良いかもしれないけど、外海に出ようと思った時にはかなり大変な条件となります。ですので、交流という面では明らかに北側、すなわち太平洋側ですね、そちらの方が有利にはたらくだろうと。

ただし、今日の発表の方で強調させていただいたのですけども、やはりなぜ北側に相対的に古い世界ができてくるかといえば、グスク時代の記憶も多分あると思うんですね。今も遠見台も残っておりますし。何しろ、外から来るものは良いものばかりではなく外敵である可能性でもありますので、それをいち早く見つけてということですね。そのために、少しでも早く遠見台または高台

に登ることができるということを考えたときに、北側の場所は有利だということがまずあるでしょう。

また、今日お話ししたように、やはり宮古島の集落を理解するための大きいポイントとなるのは、島のいたるところでもともと泥岩系の古い地層の基盤層の丘陵があって、その下にいきなり隆起石灰岩サンゴ礁の世界ができていることです。そのため、泥岩すなわち丘陵のところと、その下のサンゴ礁のところでは、例えば降った雨の水の流れが全然違うんですよ。泥岩のところですと降った雨は表面を伝って流れてくる。でも、いったんサンゴ礁のところに入ってしまうと、ぐーっともともともとのサンゴ礁のできる前の層まで全部水が浸透してしまう。ですから簡単に言えば、狩俣というのは南に行けば行くほど、深く掘らないと真水が得られないはずです。そう考えたときに、高いところにいるべきだという古来から記憶に加えて、ほんとに丘陵の直下に、西原もそうですけど全てのムトゥがあるわけですけど、そういったところじゃないとかなり初期の時点では水、それもきれいな水は得られなかったのではと。もうちょっと南に行くと、雨が降った時にダーッと水が流れますけれども、あれは表面の土砂を巻き込んで流れてくるわけですから、農業には良いかもしれないけど、飲めと言われたらたぶん厳しいかもしれません。でも、丘陵の直下のところだと、ちょっと掘って「クスヌガー」を造ると、澄んだ水が今も湧いている状態ですので、そういったところにこそ古くからの生活の痕跡があると。そして、さらに北側からは、海を通じて多くの地域との交流と、そしてそこから得られたさまざまな産物を生活痕として存分に残す可能性があります。狩俣ではそういった関係が、北から南に向けてだんだん薄れていくのではないかとこちらは考えております。

鎌田：ありがとうございます。まだあと二つ質問をいただいていたので、そちらをぜひ質問者の方からご披露下さい。

会場（男性）：それでですね、北側の集落がどんどん没落していくわけですね。島尻や狩俣は別にしまして、なぜ集落は没落していって南側に来たか、理由がいくつかあったんじゃなかろうかと。そういうことを考えられますか？また、今のお話の中では人骨があまり出てないですね。私は実際に元島で人骨を見ました。元島には津波が来たんだろうと思いますが、その人骨はきちんと埋葬されたような状態でした。だから、津波より前の人骨であって、津波より前に集落があったんだなと思いました。その人骨を見ると、だいたいいつごろの集落かということが分かるんじゃないだろうか思いました。質問はこの二つですね。戦があって没落したのか、それから、元島はこの人骨によっていつ頃かということがきっちり分かるんでなかろうかという疑問です。

鎌田：はい。ありがとうございます。ではすいません。お答えできる範囲で、どなたかお願いします。まず、人骨の話からいかがでしょうか。

山本：考古学の分野では人骨の科学分析で年代を出すこともできますが、15 世紀～ 17 世紀の集落の年代を位置付けているのは、人骨ではなくて土器や陶磁器や陶器などの遺物なんですよね。沖縄産陶器や陶磁器の種類で年代的な位置付けがされていて、人骨の年代値よりもより細かな年代を考えていくことができます。なので、確かに人骨の出る土壙が遺跡からは、出たりするんですが、それは、人骨の年代ではなくて、副葬されている例えばカムイヤキという陶器だったりとか同じ土から出る陶磁器だったりとかで年代を決めているという状況です。ですので、あくまで人骨は埋葬されている姿を現していて、人骨に伴う遺物が無ければ仕方なく人骨を分析から年代を出しますけれど。遺物がある分に関してはやはりその物の年代を優先的に考えて集落の年代を決定しているというのが、オーソドックスな遺跡調査のあり方ですね。

会場（男性）:八重山では 10 万年ほど前のその人骨が出たとかいう話があったんですが、、こちら（宮古島）の方も結構古いんではなかろうかと思っていますが。

山本：10 万年ではなくて、25,000 ～ 26,000 年前の人骨ですね。当時は石器ぐらいしかないいんですけど、沖縄は石器が出土せず人骨しか出てこないので、人骨の年代測定を行っています。ただ、年代測定の年代の幅が実はあるんですよ。2 千年とか 3 千年ぐらいの幅があります。なので、あのようなかなり古い時代のケースの場合だと、人骨で年代を出したりしています。それでも 2 世紀 3 世紀でだいぶ状況は変わってきますので、人骨で年代推し量るというのは厳しいのかなというような現状ですね。

会場（男性）：ありがとうございます。

鎌田：あと、（集落がなぜ）南に発展していったのか、というのはなかなか難しいですか。まそれは難しいですよね。

山元：南に発展していくのかをどう考えるのかですよね。

会場（男性）：戦があったように聞きますからね

山元：はい。戦というかなり大げさに聞こえてくるのですけど、私が研究で使っている地籍図を見てもですね、皆さんが思っている以上にそれぞれのルーツがでてくるんですよ。狩俣での分析について、狩俣の方々がどう思われるか非常に難しいのですが、例えば根間さんの一族の土地の確保のしかたや割り方と、狩俣さんの一族の土地の確保のしかたや割り方というのは違っているんです。ですから、実は先ほどお話しました、まずは大きな屋敷地を確保し、その後その敷地を大きく分割した可能性がありますよというのは、実は狩俣さんの一族の土地の割り方で、これがなぜか、薩摩の方の屋敷とかとスケールが一致しているんです。一方で、根間さんの一族は最初から小規模に屋敷地を確保していたようです。

これが何を実は意味しているかというと、この二つの一族が戦ったかどうかは今となっては分からないこともありますし、事を荒立てる必要もないのですけども、これは争いというレベルではなく、例えば新たな一族がやってきて、その方々はそこに以前からいた一族よりも例えば屋敷一軒に対して大きく場所をとる傾向があるとすれば、それまでいた人たちは追い出されるみたいなことが起こるでしょう。そして、結果的には以前からいた人々が追い出され、新しくできた集落の人々も最終的にうまくいかなければ出ていく、あるいはそこで集落が途絶えるといったことも起こるかもしれません。ですから、直接的な争いによって殺伐とした中で宮古の北側の方の人口が減っていったという可能性ももしかしたらゼロではないかもしれないのですけども、次から次に新たな方々が例えば北からまたは南から移住してくる中で、今まで例えば特定の一族または特定の方々でなんとか均衡を保って集落をつくっていたところに他の地域から人が来て、その人たちに占拠されて前にいた方々が淘汰される。それでさらに発展する場合もでてくるし、残念ながらそのまま淘汰されて、来た方々もまた去っていくみたいなことがあり、そういった事を繰り返しながら、宮古の北部の集落は運命を分けていったのではないかと思います。

それに対して、宮古の南部というのは面積的にも広いですし、それこそかつてはマラリアとかも含めて克服しないといけない壁は多くあったと思うんですけれども、何しろ平坦地が非常に多くあります。津波は怖いけれども、うまく均衡を保って開発をすることで、次第に農耕地などを確保することができるようになる。その後、例えば作物が変わり、そしてさらには鉄器が入ってきたりして、今まででは開発できなかったところをうまく開発しようとした時に、面積的な開発余地が大きいのは明らかに南部ってことになってしまうので。まあ、そういったことで、城辺や上野、

さらには下地というのは、その後の歴史の中で比較的有利にはたらいたんじゃないかなということを考えることができます。

ですから、争いということを実はオブラートに包んで穏やかに考えられることもできて、もしかしたらそういったいろんな方々のせめぎあいがもしかしたら北部にあったんじゃないかとも思います。そういったことも、伝承の中でもし拾いあげることができたらいいですね。ぜひ我々に、どんな些細なことでも聞かせていただけたらと。いかがでしょう？

会場（女性）：あの、いいですか。ものの本によりますと、琉球は長いこと狩猟生活だったということで、海のものを捕って食べていたんだと思います。この間、久貝さんが担当した発掘調査（保里遺跡）の場所でも、カメの甲羅まで出たんですよね。あの場所は、海から少し離れていますけど。だから、近場で狩猟生活をして暮らしていて、南に移動したっていうのは農業が始まったからだと、私はそう思うんですよね。

あの、どうして農業がはじまるのかといったら、それは農機具の問題ではないでしょうか。集落の形態にしましても、道ができたのは農業ができたからだと思ったりするんですね。今日の、模式図で説明されたのが非常に面白いなと思ったんです。で、元になるものは、私の考えですけど、上比屋の森の中に石の小屋がありますよね、あれが船でやってきた人たちのキャンプ地としての、手っ取り早い住まいだったと思うんです。そこに定住がはじまったら、人の暮らしというのはアメニティーを求める。そのアメニティーを求めて、石の壁を石囲いにする。で、集落としては細胞のように繋がっていく。それで、隙間を人が移動するようになる。この模式図の通りの集落があって、その中には草ぶきの、すぐ風が吹いたら飛ぶような小屋があって、でも快適であったと思います。ですから、何回も家を建て替えて、穴がいっぱい残ったわけですよね。

まあ、そんな風に考えると、宮古に人が暮らしを立てて定住したのは、ほんとに日が浅いんじゃないかなと思います。私自身は建築の設計をしている関係で、すばらしい焼き物の破片が見つかるわりにはいい建物が無いないんじゃないかと非常にがっかりすることがあって、後ろにおられる下地さんにいろいろ教えていただいたんですけど、大陸から焼き物を持って来て、割れたのはその辺に捨てて持って行った、使ったわけじゃないって話がすごくヒントになりました。そんなんで結局、風土、気象条件、それから農業という文明に出会った。それから、その他社会的な状況にも。発掘されたものが物語の中にすごくリアルに出てくるんだなというふうに思っております。

鎌田：ありがとうございます。すばらしいです。

会場（女性）：あの、さっきのちょっとした情報なんですけど、実はうちの父のおじいちゃん、94 歳ですがニーマズシュウの次男のお家なんですね。もともと大きな敷地があって畑もいっぱいあったんですけど、働かない人がいて税金を払わないということで、敷地などを無理やり取られたんですよね。これが、敷地だけじゃなくてその収穫するものも全部取られたということで、あの時代にはそういうことも多かったらしいんですよ。それで、税金だから収穫したものだけを取ればいいのに、敷地も全部その時に自治会長さんみたいな人が無理やり取った時代があります。（そういうことが）あの時代いっぱいあったと言って、その話を父が 50 歳ぐらいの時に。隣の人から、自分のおじいちゃんが無理やり奪った土地なのでいろいろ変な事が起きているから、夫婦に返したいと言われて。返したいと言われてもねぇと言って、でも結局お金で買ったんですけどね。そう時代があったと。やっぱり、力がある人が無理やり土地を取るということは、いっぱいあったそうです。

鎌田：ありがとうございます。非常に勉強になりました。ありがとうございます。

会場（女性）：今住んでいる家です。

鎌田：はい。もう時間もあれなので、もう少し可能な限り、いただいた質問に答えたいなと思いまして、狩俣に関連してですね、遺構の調査っていうのは実は沖大が以前にやってるんではないかと。それとの違いに完結に教えてください。

山本：カンジャヤー（鍛冶屋）の跡地を沖大が結構前、復帰前後ぐらいに調査はしてはいて、その時の報告も沖大の紀要に載っています。ただまあ、面積としては非常に限られたもので、本当に鍛冶屋の周辺だけを調査していて、一応、鍛冶を伴う床面とかが出てきたという報告がされていて。あとは焼土ですね、焼けた土もいくつか出てきていると報告されています。鍛冶をやっている可能性が非常に高いというような成果が、確か報告のまとめに記されていました。

鎌田：ありがとうございます。石の加工についてですね。野面積みから多分いろいろ変わってくると思いますがそれの加工について何世紀ごろに何がっていうようなことがもしお分かりの先生がいらっしゃったら、説明をお願いしたいのと、あと、与那国の海中の遺跡についてもし知っていたら。よろしくお願いします。

久貝：宮古島で出てくる石積みの大部分は、野面積みになります。野面もそんなに石じたいをあんまり加工していないような積み方だと思います。全ての石を加工していないというわけではなく、「ミャーカ」とかは、完全に板状に加工するような技術を持っていたりするんです。ただ、石積みという風な部分に言及していくと、高腰城跡の方では野面の石積みとは別に、切り石の石積みも用いられています。高腰城跡自体は 15 世紀前半で終わってはいるので、少なからず野面積みが主体ではあるけれども、切り石をもった積み方自体は宮古の方にもあったんじゃないかと思います。

山本：切り石積み自体は沖縄本島の方がより巧みに積んでいると言いますか、だいたい 15 世紀あたりから切り石が普及していくような状況がみられます。ただ実は、石切り場の痕が全く確認されていなくて、それに伴うどういう工具を使っていたのかっていうのも判っていません。ただ、その時期に切り石積みをしているというのは分かっています。

宮古に引き付けて言うのであればですね、やっぱり「ミャーカ」の石の組み方とか加工っていうのは、非常に高度なものかと思います。ただ、これはグスク時代じゃなくてやはり近世に入ってからの可能性も捨てきれないのかなという気がするんですけれども。まあ沖縄本島が早くて、宮古がちょっと後だったのではないかと感じています。ただ、これが石の積む技術が稚拙なのか、もしくは巧みなのかという話とはまた違って、野面積みでも、非常に巧妙な野面積みというのがありまして。

先週与論島に行った時に、3.5 メートルぐらいの高さの野面積みの石積みを見たんですよ。よく見ると目地の間にほとんど隙間が無くて、石の野面の形をパズルのように埋めるように組み上げていくというものでした。ただ加工して積む技術とはまた別の、野面積みの組み方の技術があるんじゃないかなと思わせるぐらい、一見野面積みなんですけれども巧妙な積み方がありましたので。必ずしも野面から切り石もしくは相方という流れでなくて、野面は野面で技術の組み方の進化について考えてもいいかなというふうなことを、最後にひとつ付け加えさせていただけます。

鎌田：ありがとうございました。終わりの時間も近づいてきました。こういうやり方も結構楽しいですよね。いろいろ皆さんの意見・質問をいただけまして、ほんとにありがとうございました。最後に、今日下地和宏先生が来て下さっていますので総括を少しいただけましたら。総括というか感想でも結構ですので。よろしくお願いします。

下地：先生方ご苦労さんでした。四名の先生方がいろんな視点や切り口でご報告いただきました。今日の

テーマは 15 世紀～ 17 世紀の集落ということだったんですけど、いわゆるグスク時代から近世ですよね。山本さんの沖縄の集落の事例の報告を通して、それが宮古とどういう風につながるかということは非常に興味あることでした。それと、山元先生の地籍図から集落を復元しようという研究は、本当に初めて聞いたお話で、どうしても頭の中がこんがらがってしまいましたが、こういうところからも見えるんだなと教えていただけました。
それから、今日は狩俣に集中していたかもなきにしもあらずでしたけれどもが、それでも狩俣に考古学の面からメスをいれたのは、今回初めてのケースなんですよね。私も非常に期待を持って報告を聞いていた結果としては、石井さんの報告にあった通りと思います。狩俣という集落が、民俗学的にも考古学的にも非常に関心を持たれる地域だということは確かであると思います。石の出入り口をつくったという東であれ南であれ、北については最近壊れてるんですよ。自然に落下したんですかね。克子さんに聞けば分かると思うんですけども。最近行って、非常にがっかりした部分はあります。先ほどの石積みのお話そのものは、狩俣もそうなんですけど、久貝さんの西元島のお話もありましたように、野面なんですけどしっかりとした石積みなんですよね。狩俣の場合には、北にわずかに残されている野面の石積みがあることはあるんですが、非常にチャチなんですよね。ただ、この石門と連動しているかどうかってことは非常に慎重に考えなければならない問題もあります。それから､ここ（北の石積み）を含めた狩俣の根井間村と狩俣村とがあって、狩俣に統合されるという集落の過程もありますし。何度も狩俣踏査したんですけれども、13 世紀とか 14 世紀の時期の遺物見つかっていないんですよ。逆に言えば､あれだけの狩俣の集落なんで､どこに考古学的にメスを入れるかっていうことが非常に大変なところだとは思います。ただ、それでも分かりたい、知りたいという気持ちだけがあります。
また石の門に話を戻しますけど、皆さんの喧喧諤諤のお話がありました。先ほどは山元さんですかね､これは遺物からだけじゃなく､構造物からもどう見えるかっていう､東アジアを含めた中でね。中国の伝承もあることはあるんですけど、はたしてこれがどういうふうに連動していくかということを含めて、ここだけじゃなくして大きな視点で見れたら、この構造物も違った形に見えるんだろうなということを教えていただきました。先ほどのクバラパーズのお話のそのものは、狩俣では中国から伝承というのが色濃く残っているんですよ。ところが宮古の旧記には、伊江や津堅島から兄弟が来ましたという報告もありますし。だから、それを含めてどうやら小さな島なんですが、東アジアを含めた全体で考えていただければ非常にいいことだなと思っています。
最後じゃないんですけど、久貝さんの報告は非常に斬新的な報告って言うんですかね。近世の家譜から起こして、町の種族がどこに住んでいたんだろうっていうのは、初めての研究だと思うんですよ。近世の集落を考える意味では非常に重要な手掛かりを今なされているらしいとのことでしたので、これを含めてありがとうございました。
最後に一点だけ。乾隆の津波のお話がありましたね。乾隆の 36 年、いわゆる明和の津波と言われている部分の中で、集落が移動するという、もともとあったところから離れたところに住みつくんじゃないかというお話もありました。全くその通りだと思うんですよ。だたし近世のあの移動というのは別に考えなければいけないような気がします。それには、伝承の津波もあることはあるんですよね。一同今言っている砂川・友利が、伝承の津波で洗われた。なおかつ、そこに住み続けているんですよ、そこの人たちは。近世の集落に移行していくということもありますので、それも含めて集落のあれは考えてみた方がいいんだろうなと思いました。課題としてあと一点だけ解明されていない、なぜ東側の丘陵の遺跡が 15 世紀と前後して無くなるのかという問題という

のは、大きくはさっき言ったみたいに、宮古島に入ってくるのは北からの移民であったり、それから、中国であれ韓国であれ朝鮮であれという方々を含めて考えてみられたら、陶磁器との関係が非常に色濃く残っている。で、彼らはいなくなったのはもう任務が終わったからで、それから新しい時代に入っていく、との絡みを考えてみた方がこの時期は理解できるんではないだろうかということを教えていただけましたので、ありがとうございました。

鎌田：素晴らしい総括ありがとうございました。あともう少しだけアナウンスさせてください。一枚目は交易時代の琉球と日本というとことで今､埋文で企画展をやってるというご案内ですね。それから、もうひとつ。私たちグループで刊行した「抱護」と沖縄の村落空間です。「抱護」という村の林を復元的に考察しました。ぜひお買い求めください。

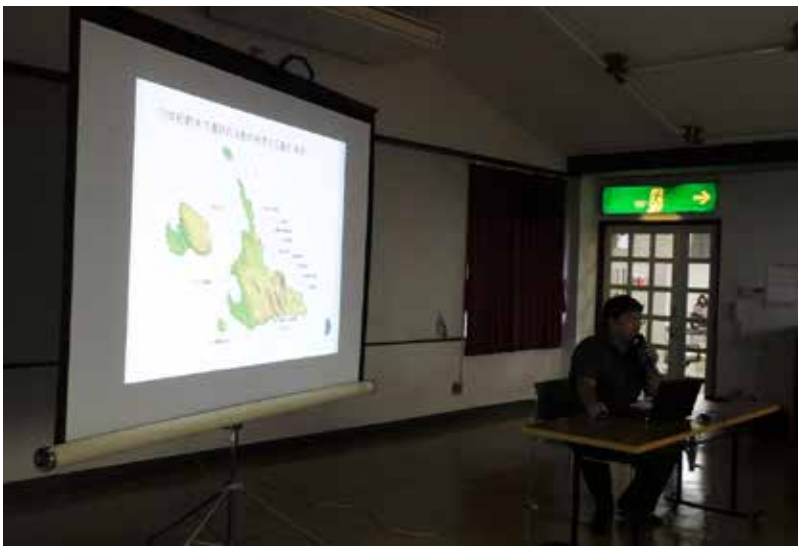
それでは、この長時間にわたって皆さん良い議論ができたと思います。ほんとにありがとうございました。では、司会をお返しします。

久貝春陽：鎌田先生、報告者の皆様ありがとうございました。これで本シンポジウムの全ての日程を終了したいと思います。皆様、長時間にわたり本シンポジウムにご参加いただきましてありがとうございました。ご連絡ではありますが、本シンポジウムに関連した発掘調査出土資料の展示会を、宮古島市総合博物館にて３月 17 日まで開催しています。本日話に出てきました住屋遺跡や友利元島遺跡などの資料が展示されているほか、沖縄県立博物館美術館収蔵の、ジョージ・ヘンリー・カーが 1960 年代に宮古島から採取した資料の展示も行っております。ぜひとも博物館の方にも足をお運びいただければと思います。また、アンケートについては出入り口の方にて回収いたしますので、よろしくお願いします。

それでは、これで本シンポジウムを閉会したいと思います。皆様どうもありがとうございました。

鎌田：ありがとうございました。

（2019 年３月９日　宮古島市中央公民館研修室にて）



第５回講座講演

久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡」

第５回講座講演

石井龍太（城西大学准教授）
「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」

第５回　講座

山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）
「琉球列島に見る 15 世紀～ 7 世紀にかけての集落遺跡の変容」

第５回講座講演風景

山元貴継（中部大学教授）
「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」

第５回講座　総合討論

司会：鎌田誠史（武庫川女子大学教授）

第５回　講座受講風景

宮古島市中央公民館　研修室
2019 年３月９日（土）

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用講座　第 5 回

平成 31 年 3 月 9 日（土）13 時～ 17 時　於：中央公民館研修室

アンケート集計

1．今回のシンポジウムに参加してのご意見・感想

●地積　土地台帳の話しは過去をみるのに役に立つ

●山元先生、もう少しゆっくり話をしてください。

●総合討論よかったです。

●集落遺跡の研究の楽しさを知りました。
山元先生の土地台帳から見た集落のありかたはおもしろいです。

●宮古でうまれながら宮古の事を知らないので知りたくて参加した。面白かったです。

2．今回のシンポジウムを受けてもっと深くほりさげて貰いたい点

●宮古島人類の歴史を深く知りたい。生活やどこから来たのか？

● 17 世紀以降の集落遺跡

●引き続き、発掘調査の報告を聞きたいです。

3．今後受けてみたい講座のテーマ

●宮古島の文化について

●宮古島の家譜
明和の大津波、自然災害史

●同じテーマを希望します。

4．今回のシンポジウムを何で知りましたか？

●新聞

●ラジオ、知人・友人

●新聞

●新聞

●ポスター

15世紀から遺物の出土量増大

遺跡からわかる集落シンポジウム

15世紀ごろの集落の遺跡などについて報告がされた＝市中央公民館

宮古島市教育委員会（宮國博教育長）は9日、市中央公民館で地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回シンポジウム「宮古島諸島における15～17世紀の集落、残されたモノから読み解く」を実施した。歴史地理学専門の山元貴継教授（中部大学）、考古学専門の石井龍太准教授、（城西大学経営学部准教授）、沖縄県立博物館・美術館主任学芸員の山本正昭さん、同会生涯学習課の久貝弥嗣さんがそれぞれのテーマで発表した。参加者らは遺跡からわかる集落の状況についての報告に熱心に耳を傾けた。

午後1時から始まったシンポジウムで久貝さんは「宮古島における発掘された15～17世紀の集落遺跡」について報告した。久貝さんは「この時期の発掘調査の事例としては住屋遺跡、尻川遺跡、外間遺跡など10カ所あり遺物の出土量は14世紀に比べると増大し、比較的安定した集落を保つことが出来たのではないか」と指摘した。他にも、石井准教授は「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」、山本主任学芸員は琉球列島に見る15世紀～17世紀にかけての集落遺跡の変容」、山元教授は「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」についてそれぞれ発表した。

シンポジウムは近年において15世紀に相当する集落遺跡の発掘調査事例が宮古島諸島内でわずかながらではあるが増加している一方で建築学や民俗学において近世集落の遡源についての検証も活発に行われていることから、当該期における集落の実態について研究分野を超えてどのように描き出すことができるのかを確認し、集落に残るモノ（遺物、遺構など）に焦点を当てて、現在みられる宮古諸島内の集落がどの部分まで遡ることが出来るかを明示する。そして現在見ることが出来る集落景観が歴史的に重要な要素を含み込んでいることを参加者に認識してもらうことを目的に開催された。

宮古新報

2019年（平成31年）3月10日 日曜日

特徴や土器を紹介

埋蔵文化財公開活用事業

15~17世紀遺跡講座

地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回シンポジウム（主催・市教育委員会）が9日、市中央公民館で開催された。市教育委員会生涯学習課の久貝弥嗣さんの「宮古島における発掘された15~17世紀の集落遺跡」などの講座が行われた。

久貝さんは宮古島で15世紀以前に形成された遺跡の特徴として、標高の高い丘陵上部に立地することや15世紀前半に遺跡の活動が終わっていることを挙げた。

15~16世紀の遺跡は土器の出土量が多く宮古諸島のみ見られる浅鉢形の土器などを紹介した。17世紀の遺跡は16世紀から集落が継続している状況だが、新里西元島遺跡や国仲元島遺跡など17世紀に継続しない集落も見られることを説明した。

講義を熱心に聞き入る参加者＝9日、市中央公民館

遺跡を残した人々の身分は一つの検討要素で市内においても家譜が多く残され、屋号として一族が居住した地域名が記されている。

その上で「地域間の出土遺物の比較や年代なども検討する必要がある」と話した。

その他、城西大の石井龍太准教授が「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」、県立博物館・美術館主任学芸員の山本正昭さんが「琉球列島に見る15~17世紀にかけての集落遺跡の変容」、中部大学の山元貴継教授は「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」についてそれぞれ発表した。

宮古毎日新聞

2019年（平成31年）3月12日　火曜日

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 5 回シンポジウム

宮古諸島における 15～17 世紀の集落

- 残された「モノ」から読み解く -

展示解説パンフレット

【展示の趣旨】

今回の展示では、宮古島市内のグスク時代から近世琉球にかけての集落遺跡に焦点をあてております。

11 世紀後半以降のグスク時代から近世琉球においては、宮古島を含めた東アジア海域の中で様々な交易の航路が拓かれ、その波及を受けて宮古島に新しい文化が持ち込まれるようになります。その一方で、遺跡の発掘調査からは、様々な新たな文化の波及を受け入れながらも、独自の地域性をもった集落を築き上げていく宮古島の人々の姿をみることもできます。このような島嶼地域における、遺跡の変遷過程を、島外から持ち込まれた陶磁器、宮古島で生産された土器の変化などを通して考えていくことができればと思います。

【G・H・カー資料の展示】

今回の展示では、沖縄県立博物館・美術館に収蔵されている G・H・カーの宮古島での採集資料の展示も行っています。G・H・カーは、1960 年代に沖縄県内の各島の遺跡を歩き回り、その採集資料が県立博物館に収蔵されています。展示では、島尻元島遺跡や上比屋山遺跡、上ノ頂遺跡、上原遺跡の資料を展示しています。この機会に、是非ともご覧ください。

主催：宮古島市教育委員会

共催：沖縄県立博物館・美術館

写真は、友利元島遺跡の遠景

１．11 世紀後半～ 13 世紀中頃

１．11 世紀後半～ 13 世紀中頃の宮古島

11 世紀後半になると、北の博多や沖縄諸島を介在した交易集団が、宮古・八重山諸島までその活動の範囲を広げていきます。発掘調査では、これらの人々によって運びこまれたカムィヤキ、白磁玉縁碗（はくじたまぶちわん）、滑石製石鍋（かっせきせいいしなべ）は、沖縄県内全域から出土しています。先史時代まで無土器文化という沖縄諸島と異なる文化を有していた宮古・八重山諸島ですが、11 世紀後半以降は、沖縄諸島と共通した交易圏域に組み込まれていきます。しかしながら、この時代の宮古島市内の遺跡は少なく、特に 13 世紀代については、具体的にどのような文化を有していたのかは不明な部分が多いといえます。

２．宮古島の代表的な遺跡

宮古島市内でも、カムィヤキや、白磁玉縁碗（はくじたまぶちわん）、滑石製石鍋（かっせきせいいしなべ）が出土する遺跡は数多くありますが、11 世紀後半～ 12 世紀を主体とする遺跡は非常に少ないです。大部分は 13 世紀後半～ 15 世紀以降を主体とする遺跡から少量出土する場合が多いといえます。しかし、この時から宮古島に、島外から島を訪れる人がいたことを示す重要資料です。この時代の代表的な遺跡として、友利元島遺跡、ミヌズマ遺跡、松原部落遺物散布地、パナタガー嶺遺跡などがあり、住屋遺跡等からもこの時代の遺物は出土しています。

３．この時期の遺跡の特徴

発掘調査の成果からみるこの時期の宮古島の遺跡の特徴について整理してみます。

①カムィヤキ、白磁玉縁碗、滑石製石鍋が出土しますが、滑石製石鍋は非常に少ないといえます。

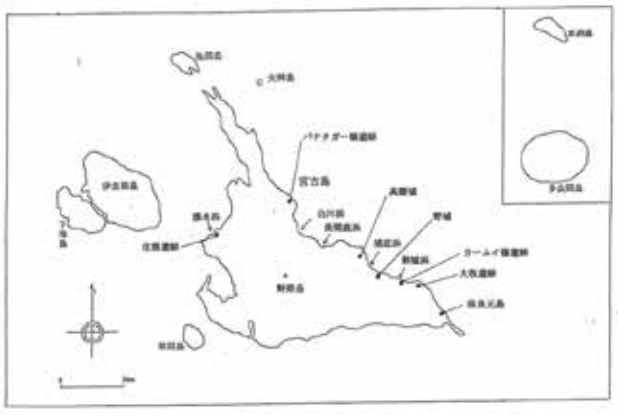
②ミヌズマ遺跡からは 6 本や 4 本の柱から構成される掘立柱建物跡群（ほったてばしらたてものあとぐん）が検出されています。
単純な形態としては、沖縄諸島と類似性が高いといえますが、建物を構成する要素等も含め、今後詳細な検討を必要とします。

③友利元島遺跡では、カムィヤキを副葬（ふくそう）した埋葬人骨（まいそうじんこつ）が確認されています。
カムィヤキを伴う人骨は、奄美諸島、沖縄諸島からも確認されますが、いずれも伸展葬（しんてんそう）で、宮古島は屈葬（くっそう）という違いがあります。

④現在、11 世紀後半から 12 世紀にかけての埋葬人骨は友利元島遺跡から 2 体、ミヌズマ遺跡から 1 体の計 3 体が確認されていますが、頭骨の残る 2 体はいずれも歯槽性突顎（しそうせいとつがく）の形質を有しています。

⑤ 13 世紀前半～中頃を示す青磁や白磁の資料は、出土数が少ないです。

友利元島遺跡出土の人骨に伴うカムィヤキ



第１展示室にも住屋遺跡の 11 世紀後半～ 12 世紀にかけての出土資料が展示されています。

＊カムィヤキ：鹿児島県の徳之島で焼かれた焼物
＊白磁玉縁碗：碗の口の部分が玉のようにふくれた形をしている白磁の種類の一つ。
＊滑石製石鍋：長崎県の西彼杵半島を主な産出地とする滑石と呼ばれる石を鍋の形に加工した製品。

11 世紀後半を始まりとする松原集落の遺跡

松原遺物散布地

場　　所：宮古島市平良字松原　　時代：11 世紀後半・12 世紀～ 16 世紀

調査年：2018 年 7 月～ 8 月　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】

松原遺物散布地は、これまで土器などの遺物が散布している状況が確認されているものの、その性格については詳しく分かっていない遺跡でした。しかし、今回の発掘調査では 1 基の掘立柱建物跡と、1 基の土壙墓が発見され、人が生活を行っていた集落遺跡であることが分かりました。

遺跡の年代としては、15 ～ 16 世紀の資料が多く、１７・18 世紀代の資料もみられますが、11 世紀後半から 12 世紀の資料である中国産の白磁玉縁碗が出土した他、13 世紀後半の浦口窯白磁なども出土しています。このことからグスク時代の初期という非常に古い時期から、人がこの場所で生活していたことが分かりました。

写真右上：掘立柱建物跡検出状況 / 写真右下：埋葬人骨検出状況

＊掘立柱建物跡：柱を立ててたてられる建物のあと。

＊土壙墓：地面に穴をほって死んだ人を埋葬する墓の形態

11・12 世紀から 15 世紀前半にかけての大規模集落

ミヌズマ遺跡

場所：：宮古島市平良字松原　　時代：グスク時代（11・12 世紀～ 15 世紀前半）

調　　査　　年：2012 ～ 2013 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】

ミヌズマ遺跡は、平良字松原に所在し、与那覇湾に面した標高 5 ～ 15 ｍの小丘陵地に形成された遺跡です。発掘調査は、ほ場整備工事に伴い 2012 ～ 2013 年にかけて実施されました。

発掘調査では、11 世紀後半～ 12 世紀の 4 本柱や 6 本柱から構成される掘立柱建物跡が確認された他、埋葬人骨 1 体が確認されています。13　世紀後半～ 15 世紀前半にかけても埋葬人骨が複数確認されているほか、炉跡からは、13 世紀～ 14 世紀にかけてのアワ、オオムギ、コムギ、イネなどの農耕穀物が確認されています。その他、島外から搬入された中国産陶磁器も数多く出土しており、長期にわたって人々が生活していた集落遺跡であることが分かっています。

宮古島の郷土史家の慶世村恒任は、各地の伝承などをもとに、14 世紀代の宮古島の争乱・与那覇ばら軍によって進攻された村について言及し、それらの村の西美野、美野、美野娥麻がミヌズマ遺跡に比定されると考えられます。

写真：6 本柱建物検出状況

2．13 世紀後半～ 14 世紀

1．13 世紀後半～ 15 世紀中頃の宮古島

13 世紀後半になると、中国南部から台湾北部、八重山諸島、宮古諸島、沖縄諸島へ向かう南からの新しい交易ルート（下の図参照）が拓かれます。この交易ルートで運び込まれた中国産の陶磁器が、中国の閩清窯（びんせいよう）や浦口窯（ほこうよう）という窯で焼かれた白磁や、磁灶窯（じそうよう）で焼かれたか褐釉陶器（かつゆうとうき）と考えられています。13 世紀後半以降は、それ以前の段階とは異なり、遺跡の遺物の出土量も増加するようになります。歴史的な出来事としては、1372 年に中山王察度（ちゅうざんおうさっと）が、明へ入貢（にゅうこう）し、沖縄諸島と明との交易がはじまりをむかえる。これによって、14 世紀後半以降には、中国南部（福州）と沖縄諸島（那覇）を結ぶ交易路（ふくしゅう）が主要な航路となります。

2．宮古島の代表的な遺跡

13 世紀後半以降の遺跡をみると、宮古島市内の広範囲に遺跡が形成されていることがみてとれます。その中には、高腰城跡や、大浦多志城跡などの宮古島の北海岸の標高の高い丘陵地に立地し、石積をもった遺跡が集中している様子もみてとれます。しかし、海岸線に近く、標高の低い南部の友利元島遺跡からも当該期の陶磁器が出土し、西部のミヌズマ遺跡や住屋遺跡などからも同様の出土資料が確認され、多様な立地に遺跡が展開している状況がみてとれます。

3．この時期の遺跡の特徴

発掘調査の成果からみるこの時期の宮古島の遺跡の特徴について整理してみます。

①中国南部の閩清窯（びんせいよう）、浦口窯（ほこうよう）産の白磁、磁灶窯（じそうよう）産の褐釉陶器（かつゆうとうき）が多く出土します。

② 13 世紀後半になると、宮古島の北海岸には、標高の高い場所に立地し、石積をもった遺跡が出現し、15 世紀前半には衰退します（高腰城跡、大浦多志城跡など）。
その一方で、南部の友利元島遺跡や、西部のミヌズマ遺跡、住屋遺跡などのように石積をもたない集落遺跡があり、15 世紀以降も集落として継続しつづけます。

③ミヌズマ遺跡の調査成果から、13 世紀後半以降にオオムギ、コムギ、アワ、イネなどの農耕が開始します。

④土器は、外耳を有した鍋形を主要な器種とする野城式土器が多くの遺跡から出土します。

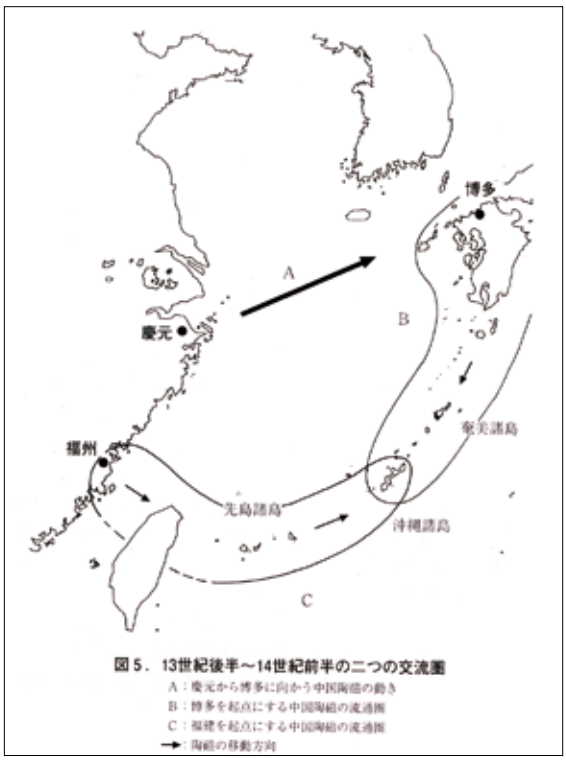


図 5．13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏
A：慶元から博多に向かう中国陶磁の動き
B：博多を起点にする中国陶磁の流通圏
C：福建を起点にする中国陶磁の流通圏
→：陶磁の移動方向

木下尚子 2009 年『13 ～ 14 世紀の琉球と福建』p253 より

野原岳に築かれた宮古島市内最大規模の城跡

大嶽城跡

場所：：宮古島市上野字野原　　時代：グスク時代（13 世紀後半～ 15 世紀前半）

調　　査　　年：2009 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】

大嶽城跡は、歴史資料や遺物の表面採集の状況から、グスク時代の遺跡であるとされていましたが、沖縄戦時や米軍統治時に野原岳の地形が大きく削平されていたことなどもあり、具体的な遺跡の状況が分かっていませんでした。発掘調査では、非常に限られた範囲ではありますが、グスク時代の生活層が確認されました。このグスク時代の層からは、鍋形の土器や、徳之島で焼かれたカムィヤキ、中国産の白磁（ビロースクⅢ）や青磁（蓮弁文皿など）、北宋銭（元符通宝）などが出土しており、遺跡の大まかな年代が 13 世紀から 15 世紀に位置づけられることも明らかになってきました。

▲　現在の野原岳

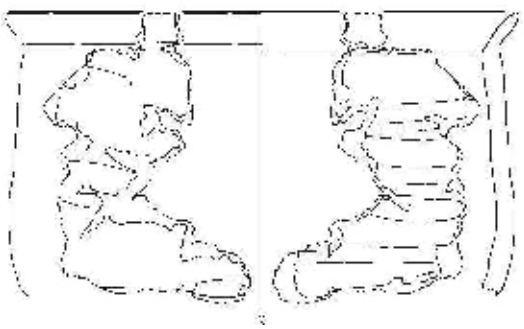
現在は航空自衛隊宮古島分屯基地として利用されています。

▲ 13 世紀～ 15 世紀前半の生活の検出（白線の黒い土の層）

野城式土器（ぬぐすくしきどき）とは？

宮古のグスク時代において、同時期の沖縄本島とは異なる土器の出土が確認されています。この土器は、高さが約 20 ～ 30 ㎝で、口の広さが 40 ～ 50 ㎝の寸胴形をしており、ひとの耳ににた把手を 2 つか 4 つ、口の近くに張り付けるという特徴を持っています。さらに、土器の表面の色は黒みがかった色をしています。宮古島市内で、このような特徴を持った土器がはじめてまとまって出土したのが、野城遺跡であったことから、野城式土器とよばれています。

高腰城跡出土の野城式土器（鍋形）



大嶽城跡出土の野城式土器（鍋形）

３．15 世紀～ 16 世紀

１．15 世紀～ 16 世紀の宮古島

前述したように、1372 年の中山の明への入貢以降、東アジア海域における交易航路は、中国（福州）と沖縄諸島（那覇）が主要航路となります。このような交易航路の変化は、宮古諸島へも影響が及んだものと考えられますが、15 世紀代については具体的な検証が深められていません。しかし、1500 年のオヤケアカハチの征討に見られるように 15 世紀末には、那覇港と漲水港を主要な航路として、沖縄諸島との関係性が非常に高くなったものと考えられます。宮古島市内には、宮古島の南部に限らず伊良部島などにおいても一般集落が形成されるようになり、遺跡数はより増加していきます。そして、土器の器種には浅鉢形が出現するなど地域性の高い文化もみとめられます。

２．宮古島の代表的な遺跡

15 世紀中頃になると宮古島の多くの場所に集落が形成されるようになります。しかし、前の時代にみられるような標高の高い場所に遺跡が形成されることはなく、海岸線に面した標高の低い場所に遺跡が形成されるようになります。

また、新里西元島遺跡は、建物の周囲を石積で囲う形態の集落を呈しており、石積は約 2m 以上にも及ぶ高いものです。現在は、石積をみることはできませんが、狩俣集落も集落を石積で囲う形態をしており、その一部である石門は現在でも残されています。

３．この時期の遺跡の特徴

発掘調査の成果からみるこの時期の宮古島の遺跡の特徴について整理してみます。

①遺跡からの出土遺物は、さらに増加します。出土遺物の主体は、宮古島で焼かれた土器で、中国産陶磁器は沖縄諸島と同様の製品が出土します。

なお、15 世紀になると沖縄諸島では土器の出土はほぼなくなり、土器が多く出土するのは、宮古・八重山諸島の地域的な特徴であるといえます。

②土器の器種は、壺形が多く、鉢形、浅鉢形、碗形などの器種が確認され、浅鉢形は宮古島特有の器種になります。浅鉢形は、宮古蔵が置かれていたとされる那覇の渡地村の発掘調査からも多く出土しています。

③墓の形態としては土葬であり、居住区間に近い場所に埋葬していたものと考えられます。

⑤永楽通宝や洪武通宝などの明銭は宮古島からは出土しません。八重山諸島も含め貨幣経済の圏外地と考えられます。

▲ **土器・壺** [15 ～ 16 世紀 / 宮古島]

▲ **土器・鉢** [13 ～ 16 世紀 / 宮古島]

▲ **土器・浅鉢** [15 ～ 16 世紀 / 宮古島]

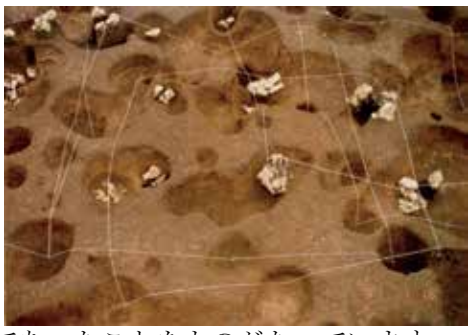
11 世紀後半からつづく宮古島市内最大の集落遺跡

住屋遺跡

場所：：宮古島市平良字西里　　時代：11 世紀後半～

調　　査　　年：1990 ～ 1991 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】



住屋遺跡は、現在の宮古島市役所平良庁舎の建設に伴い 1990 ～ 1991 年にかけて発掘調査が行われました。発掘調査では、グスク時代の竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）や掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）が発見された他、多くの埋葬人骨（まいそうじんこつ）も検出されています。遺跡は、11 世紀後半のグスク時代から現在まで継続して人が住み続けているため、中国産の陶磁器や、本土産の陶磁器、土器、動物遺体、貝類など非常に多くの遺物（生活で使用された道具）が出土しています。遺跡から出土したこれらの資料は膨大で、この一帯が大規模な集落遺跡であったことをものがたっています。

住屋遺跡の位置する現在の平良庁舎一帯には、琉球王府から派遣された役人の勤める在番仮屋（ざいばんかりや）や、宮古島の役人が勤める蔵元（くらもと）、税としての布を納める貢布座（こうふざ）などの行政機関が集まる場所であります。

また、漲水港は那覇へ向かう宮古島の出発口であり、交易物資の集約する商業の中心地でもありました。

住屋遺跡からは、多様な遺物が出土し、青花などは他の遺跡と比べても非常に多い出土量がみられます。これは住屋遺跡の位置する島内での地域性を示すものといえます。

石積囲いをもったグスク時代の集落遺跡

新里西元島遺跡

場所：：宮古島市上野字新里　　時代：グスク時代（15 世紀～ 16 世紀）

調　　査　　年：2015 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】

新里西元島遺跡は、上野字新里に位置するグスク時代～近世（15 世紀～ 18 世紀）にかけての集落遺跡です。遺跡内には、現在でも石積が多く残されており、石積の囲いをもつ集落遺跡であったことが分かります。発掘調査は、建物建設工事に伴い 2015 年に行われました。

発掘調査では、15 世紀～ 16 世紀の柱をもった建物跡が 2 基確認されています。建物の柱の穴には、石が込められており、柱を固定することが目的であったと考えられます。掘立柱建物跡 1 は、調査区の外にものびることが想定され、大型の建物跡であることが分かります。また、調査の結果、現在でも残されていた石積も、建物跡と同じ 15 世紀～ 16 世紀の時期のものであったことが分かりました。

出土した遺物では、土器が最も多く、中国産の青磁や白磁、青花、褐釉陶器などの出土も確認され、遺跡の年代を考える上では重要な資料となりました。その他、当時の食料であった動物の骨や貝なども出土しています。

4．17 世紀～ 18 世紀

1．17 世紀～ 18 世紀の宮古島

沖縄県の歴史区分において、1609 年の薩摩（さつま）による琉球侵攻から、1879 年の琉球処分までの約 270 年間を近世琉球と位置付けています

近世琉球の集落は、グスク時代から継続する集落がある一方で、18 世紀頃からは、各地に村建てがなされるようにもなります。近世の集落の発掘調査では、友利、砂川の両元島遺跡で、1771 年の大津波（乾隆 36 年の大波）の痕跡が確認されています。隣接する新里、宮国元島でも発掘調査が行われており、近世の集落遺跡の変遷（へんせん）を考える上で重要な成果がえられています。近世から近代にかけての村番所跡の発掘調査の事例として与那覇遺跡があります。また、近世から近代にかけての埋葬の方法であった岩陰墓の発掘調査の事例も近年増加傾向にあり、北久場間岩陰墓（きたくばまいわかげぼ）からは、中国の銭貨（せんか）に孔をあけたものや人の顔を削りこんだ木製品なども出土しています。

また、住屋遺跡（俗称・尻間）の位置する現在の平良第 2 庁舎一帯には、琉球王府から派遣された役人の勤める在番仮屋（ざいばんかりや）も設置されます。近世琉球において、漲水港から現在の平良庁舎一帯は、官公庁の置かれた行政の中心地としてのより活用されていきます。

2．この時期の遺跡の特徴

① 16 世紀から継続する集落が多く、18 世紀以降には新しく村建てされる集落もみられるようになります。

②島外品としては、中国産の白磁や福建（ふっけん）・広東（かんとん）産の青花が出土し、本土産の肥前（ひぜん）磁器、陶器、薩摩焼などの焼物の出土もみられるようになります。

③沖縄本島の無釉陶器、施釉陶器の出土が増え始めます

④宮古島においても土器を製作しているが、回転盤（かいてんばん）などを利用し、壺形を主体とし、沖縄産無釉陶器を模倣（もほう）して製作されたと考えられる浅鉢（あさばち）、徳利（とっくり）、擂鉢（すりばち）などの器種も確認できます。

⑤ 1771 年の乾隆（けんりゅう）36 年の大波は、宮古島の南海岸の集落遺跡に甚大（じんだい）に被害をもたらし、集落の移動が行われました。

⑥近世琉球時における遺跡の発掘調査は比較的少ないです。

在番仮屋（宮国定徳『宮古の史跡・文化財』1975 年より）

住屋遺跡（俗称・尻間）発掘作業風景

乾隆 36(1771) 年の大波による被災集落遺跡の発掘

友利元島遺跡

場所：：宮古島市城辺字友利　　時代：無土器期（5 ～ 8 世紀）、11 世紀後半～ 18 世紀後半

調　　査　　年：1987、1995 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】

友利元島遺跡は、城辺字友利に所在し、海岸に面した標高 10m ほどの低地に立地する遺跡です。友利元島では、これまで複数回にわたって異なる地点で発掘調査が行われています。これらの調査から、友利元島遺跡は、古くは 5 世紀～ 8 世紀の無土器期の生活層が確認され、11 世紀後半から 18 世紀まで継続的に集落として人が住み続けていたことが分かっています。

1987 年と 1995 年の発掘調査では、いずれも 1771 年の大津波の痕跡が確認されています。近世の敷石遺構などは津波によって破壊されたとみられ、近世時の遺構の上には、津波によって運ばれたと考えられる海岸線の砂礫や枝サンゴなどが厚く堆積している状況が確認されています。このような自然災害の痕跡が遺跡の発掘調査から確認されたのは沖縄県内で、友利元島遺跡が初めての事例であります。津波の被害を受けた後、集落は丘陵上に移動し、本遺跡は、畑地として利用されていたため、津波の痕跡がよく残された状態にあったと考えられます。

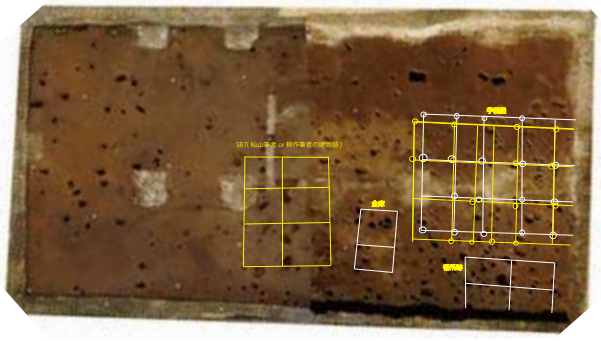
よみがえる与那覇村番所

与那覇遺跡

場所：：宮古島市下地字与那覇　　時代：グスク時代（15 世紀～ 18 世紀）

調　　査　　年：2013 年　　調査機関：宮古島市教育委員会

【調査概要】



与那覇遺跡は、下地字与那覇に所在する遺跡です。発掘調査は、2013 年に与那覇公民館を取り壊し、防災センターを建設する際に行われたものです。

与那覇公民館は、与那覇村番所の跡地でもあり、発掘調査では、実際に 5 基の建物跡が検出されています。5 基の建物跡は、道路に対面するように配置されており、一部の建物は調査区外にも及んでいます。

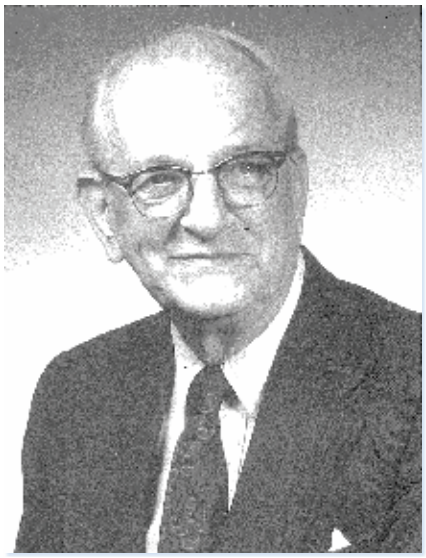
近世の村番所の建物については、『与世山親方宮古島規模帳（よせやまうぇーかたみやこじまきもちょう）』という歴史史料に、その建物の規格や構造などが決められていたことが記されています。出土遺物としては、15 世紀～ 16 世紀にかけての青磁なども出土しますが、17 世紀以降の青花（せいか）や沖縄産陶器などの出土量が多く、宮古島で焼かれた土器も多く出土しています。

近世の村番所跡の発掘調査事例では宮古島市内で 2 例目となる与那覇遺跡ですが、歴史史料と実際の発掘調査で確認された建物跡の比較を詳細に行うことができる重要な調査成果がえられています。

沖縄県立博物館・美術館収蔵・G・H・カー資料の展示

文章作成：山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）

George Henry Kerr（ジョージ・ヘンリー・カー）



1911 年にペンシルベニア州にて生誕。1935 年～ 1937 年まで日本に留学、1937 ～ 1940 年まで台湾の台北市にて英語教師として赴任する。太平洋戦争時にはアメリカ陸軍省にて台湾における解説顧問を経た後、コロンビア大学の軍政学校に赴任する。
太平洋戦争後はアメリカ海軍駐在武官の補佐官として台湾へ赴いた後、アメリカ国務省外交局の台湾副領事に着任する。
1947 年～ 1949 年にはワシントン大学で、1949 年～ 1950 年にはスタンフォード大学とカリフォルニア大学バークレー校で日本史講師として教鞭をとった。また後にフーヴァー戦争・革命・平和研究所所属の研究員に就任している。

1960 年～ 1962 年にかけて「琉球列島遺跡調査」の再確認調査という名目の下、沖縄本島から八重山諸島各地の 144 遺跡を巡検し、大量の遺物の表面採集を行っている。また、沖縄に対する歴史的造詣も深く、『Okinawa: Kingdom and Province before 1945 』や『Okinawa, the History of an Island People』では琉球列島における神話の時代から沖縄戦までの歴史についてまとめている。
台湾に関しては政治史についての関心が高く、著書も多数に及んでいる。
1992 年、ハワイ州ホノルルにて永眠。享年 80 歳

遺跡一帯が現在も聖域として崇められる倭寇の根拠地とされる場所

上比屋山遺跡

当該遺跡は宮古島市城辺砂川にある標高約 60 ｍの丘陵である上比屋山とその南側斜面に立地する集落遺跡である。遺跡一帯は聖地となっていることが、遺跡内に御嶽（うたき）が 9 ヶ所、点在していることから解る。1956 年には県指定史跡となっている。

これらの御嶽を中心に野面積みの石積みが展開しており、遺跡としての保存状況は極めて良好である。1956 年に稲村賢敷（いなむらけんぷ）によって発掘調査（試掘調査）が実施され、宮古式土器、中国産青磁（せいじ）、白磁（はくじ）、青花（せいか）、褐釉陶器（かつゆうとうき）など多くの遺物が得られている。これらの遺物から 14 世紀～ 15 世紀には機能していたものと考えられる。近世には遺跡の北端に切石積みの方形基壇（ほうけいきだん）が築かれており、遠見台の遺構と推測されている。

かつて、稲村は倭寇（わこう）の根拠地として、下地馨（しもじかおる）は中継貿易的な自由貿易の地としてこの上比屋山遺跡を捉え、両氏の間で論争となっている

約６００年間も続いた池間島南岸にある集落遺跡

上原遺跡

宮古島市字池間に所在する 14 世紀頃から始まる集落遺跡で、近代まで家屋が建っていました。遺跡は池間島の南西端に立地しており、遺跡内には池間集落の拝所であるウパルズ御嶽(うたき)を見ることができる。この御嶽の南西側には 41 の石積み囲いの区画を見ることができ、御嶽から近い場所では不整形(ふせいけい)の石積み囲いが、離れた場所には方形区画の石積み囲いを見ることができる。御嶽に近い石積み囲いでは 14 世紀～ 15 世紀の遺物が多く採集され、方形区画(ほうけいくかく)の石積み囲いでは近世から近代にかけての遺物が多く採集されることから、ウパルズ御嶽から離れるように居住地が移動したことが窺われる。

また、当該遺跡のもう一つの特徴として、外縁部(がいえんぶ)に配置されている石積みが約 2.5m の高さを有している点が挙げられる。この石積みの外側は斜面が続き海岸部へと続くことから、海面までの比高(ひこう)差が約５ｍを測る。このことから高低差を活かした障壁(しょうへき)として、この石積みとして位置付けることができる。防御性をある程度見出すことができる集落遺跡として捉えることができる。

宮古諸島の中でも当該遺跡は極めて残りの良い集落遺跡であると共に、集落域を防御することが宮古諸島地域において具体的にどのような意味を有していたのかを考える意味で重要な遺跡であると言える。

三方が海に面した防御的性格を持った遺跡

島尻元島遺跡

宮古島市字島尻に所在する当該遺跡は現在の島尻集落の発祥地とされており、ナウッダー、ニスンニャー、ススゥマラヤーなどの拝所を見ることができる。

島尻漁港の東側に隣接した低丘陵上に当該遺跡は立地しており、現在は周辺が近年の埋め立てにより陸地化されているが、かつては半島状に突き出た丘陵であった。

遺跡内は広大な平場を見ることができ、この周辺から中国産青磁や宮古式土器、石器、獣骨片が採集されている。これらの遺物は 15 世紀中頃から 16 世紀前半に相当する。また、この平場内にはンナカガーと呼ばれる井戸を見ることができることから、平場と表採遺物から居住空間としての条件は整っていたと言える。この平場の東、北、西は海に面した急崖となっており、その縁辺には高さ 0.5 ～２ｍの野面積みの石積みが巡っているのを確認できる。

戦前まで、島尻漁港側の出入口にはアーチ門が残っていたことから、進入しやすい場所に対しては閉塞性を高めていたことが窺える。このように石積みを外縁部に沿って配置していることを合わせて考えると、ある程度の防御性を有した遺跡であると言える。

現在は失われてしまった倭寇との関わりが指摘される遺跡

上ヌ頂遺跡

当該遺跡は宮古島市平良西仲宗根に位置する標高８ｍの低丘陵一帯に立地する。戦後において採石場となったことから、現在は遺跡としてはほとんど壊滅状態で、かつての面影は失われている。
1969 年に嵩元政秀、友寄英一郎らによる発掘調査が実施され、14 世紀から 15 世紀の集落遺跡とされている。主に土器、中国産陶磁器、カムィヤキ、石器では砥石や石斧、骨製品では針状製品が、魚骨や貝類など多くの遺物が出土している。中でも鉄滓やフイゴ片といった鍛冶関連の遺物が見られることから、生産遺跡としての側面も持っているものと思われる。これらの発掘調査成果については『琉大史学』第 4 号にて報告されている。
遺跡内には「アガリナリカニ神」を祀る上のツヅ御嶽を見ることができ、郷土史家の稲村賢敷は倭寇に関係する場所としての解釈を行っている。

【お知らせ】

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 4 回文化講座
「宮古諸島における 11 世紀～ 14 世紀の集落遺跡」

日　時：平成 31 年 3 月 3 日（日）10 時～正午　　場　所：働く女性の家ゆぃみなぁ
講　師：久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 5 回シンポジウム
「宮古諸島における 15 ～ 17 世紀の集落 - 残された「モノ」から読み解く - 」

【報告】
「宮古島における発掘された 15 ～ 17 世紀の集落遺跡」　久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）
「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」　石井龍太（城西大学）
「琉球列島に見る 15 世紀～ 17 世紀にかけての集落遺跡の変容」山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）
「地籍図・土地台帳から見た宮古島の集落」　山元貴継（中部大学）
総合討論　司会　鎌田誠史（武庫川女子大学）

日時：平成 31 年 3 月 9 日（土）午後 1 時～ 5 時
場所：宮古島市中央公民館・研修室

いずれの講座・シンポジウムとも参加料は無料。事前申し込みは不要です
問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課（0980-77-4947）

「宮古諸島における 11 ～ 17 世紀の集落」

宮古島市総合博物館
展示期間
2019 年２月 26 日（火）～３月 17 日

宮古毎日新聞　2019年（平成31年）2月28日　木曜日

集落遺跡の出土品展示

市博物館、来月10日まで

上比屋、島尻元島など

市総合博物館特別展示室で26日から企画展「宮古島の集落遺跡」が開幕。宮古島で確認された集落遺跡から発掘された11世紀から18世紀ごろの出土品や、アメリカ人のジョージ・ヘンリー・カー氏による宮古島での遺跡調査時に採集された品々も展示されている。会期は3月10日まで。

ジョージ・ヘンリー・カー氏の採集資料は県立博物館・美術館に収蔵されているもので、今回は企画展のために、上比屋山遺跡、島尻元島遺跡、上原遺跡、上ヌ頂遺跡で採集された出土品105点を借用し展示している。

そのほかミヌズマ遺跡、新里西元島遺跡、友利元島遺跡、住屋遺跡などの集落遺跡で市教育委員会が発掘した多数の出土品も展示されている。

市教育委員会文化財係の久貝弥嗣主任主事は今回の企画展について「暮らしがどう変わってきたかを遺跡からの出土品や建物の遺構などから見ていくことが大きな狙い」と説明し、来場を呼び掛ける。

今企画展の関連行事として3月3日に文化講座「宮古諸島における11～14世紀の集落」が市働く女性の家（ゆいみなぁ）で、同9日にはシンポジウム「宮古諸島における15～17世紀の集落～残された『モノ』から読み解く～」が市中央公民館研修室で開催される。

ジョージ・ヘンリー・カー氏の展示資料について説明し来場を呼び掛ける久貝主任主事＝27日、市総合博物館特別展示室

教委主催

17世紀以前の変化など検証

市総合博物館「宮古島の集落遺跡」始まる

「宮古島の集落遺跡」の展示について説明する久貝さん＝市総合博物館

宮古島市教育委員会主催の企画展「宮古島の集落遺跡」が、27日から市総合博物館で始まった。これまで発掘調査した松原遺物散布地やミヌズマ遺跡、大嶽城跡、新里西元島遺跡、友利元島遺跡、与那覇遺跡、住屋遺跡から出土した土器などが展示。松原遺物散布地では11世紀頃と見られる土器片が初公開された。これは過去に発掘されてきたものと比べ、貝殻や砂礫などの含有物が特徴的だという。3月10日まで。

同展は文字記録が少ない17世紀以前の集落の移り変わりについて出土品や建物跡から検証していくもの。これまでに行われた発掘資料を基に宮古島における時代ごとの集落形態の移り変わりについて説明している。「宮古島旧記」などで伝えられる史実は18世紀以降の編纂で、この時代の集落については明らかでない部分が多い。同委員会職員の久貝弥嗣さんは「土器片の材質が他と比べて脆いのは、あえて作るだけの意図が発掘地にあったのではないか」とし、さらなる事実解明に期待を寄せる。

松原遺物散布地から出土した土器

会場では沖縄・台湾歴史研究家のジョージ・ヘンリー・カー氏が、1960年代初頭に宮古島で調査した際の出土品が沖縄県立博物館から「里帰り」して展示されている。このほか上比屋山遺跡や島尻元島遺跡、上原遺跡、上又頂遺跡から発掘された土器などを見ることが出来る。

同展関連として、3月3日午前10時から市働く女性の家で文化講座「宮古諸島における11～14世紀の集落」、3月9日午後1時からは市中央公民館研修室でシンポジウム「宮古諸島における15～17世紀の集落―残された「モノ」から読み解く―」が開かれる。

文化講座は11世紀から14世紀に焦点を当て、遺跡発掘の成果報告と調査資料の紹介を行う。シンポジウムでは15世紀から17世紀の集落跡について、考古学や歴史地理学など複数の研究分野から報告し議論する。参加費は無料。問い合わせは同委員会生涯学習振興課文化財係（77・4947）。

平成 30 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業
最新の研究成果に見る宮古の歴史　№3
－文化講座資料集・記録集－

発 行 月　平成 31(2019) 年３月
編集発行　宮古島市教育委員会
〒 906-0103
宮古島市城辺字福里 600-1
ＴＥＬ：0980-77-4947
ＦＡＸ：0980-77-4957
印刷製本　ぐしけん印刷